縁通庵遺跡・アカリ遺跡発掘調査報告

―― 三重県多気郡勢和村片野 ――

１９９９・３

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財保護行政の一環として、各開発関係部局の事業予定地域内の埋蔵文化財の確認とその保護に努めてまいりました。

ここに報告する多気郡勢和村片野所在の２遺跡は、縁通庵遺跡が平成９年度の、アカリ遺跡が平成10年度の県営畜産経営環境整備事業（多気勢和地区）に先立ち、発掘調査を実施し、記録保存したものであります。

多気郡勢和村内を流れる櫛田川は県内でも有数の河川の一つであり、太古の昔から人々に多くの幸を与えつづけています。今回の発掘調査でもその一端が明らかになるものと期待されておりました。

そして今回、広大な範囲に及ぶ遺跡の一部分の調査ではありましたが、県内でも少ない縄文時代前期の遺跡の調査例と、勢和村では初めての弥生時代のムラの調査例として報告することができました。

当地域には我々の祖先の残した数多くの歴史的遺産があります。今後それらを貴重な財産として保護し、後世に伝えていくと共に、今後の文化の向上、発展に活用していかねばなりません。そして、我々の公共財産である歴史的遺産と公共事業との共存・共栄の道を模索しなければならないと考えています。

調査にあたっては、三重県農林水産商工部農芸畜産振興課（旧三重県農林水産部農芸畜産課）、松阪地方県民局農林水産商工部（旧松阪農林事務所）、勢和村教育委員会をはじめ、地元地区の多くの方々の惜しみないご理解とご協力を賜り、文末ながら記して深く感謝申し上げます。

平成11年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　大　井　與　生

例　　言

1．本書は、平成９年度県営畜産経営環境整備事業（多気勢和地区）に伴って実施した縁通庵（えんつうあん）遺跡、並びに平成10年度同事業に伴って実施したアカリ遺跡の発掘調査報告書である。

2．縁通庵遺跡は、三重県多気郡勢和村字片野小字縁通庵に、アカリ遺跡は三重県多気郡勢和村片野小字アカリに位置している。

3．調査体制は、下記によった。

平成９年度〈縁通庵遺跡〉

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課

第１係長　清水　正明（調整）

主　事　松葉　和也

研修員　津田　琢麻

整理担当　　三重県埋蔵文化財センター　管理指導課

平成10年度〈アカリ遺跡〉

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第一課

第１係長　竹内　英昭（調整）

主　事　松葉　和也

研修員　柴山　圭子

整理担当　　三重県埋蔵文化財センター　資料普及グループ

4．当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。
また、本文の執筆・編集・写真撮影は、津田、柴山の補助を得て、松葉が行った。

5．発掘調査時から、奥義次氏（三重県立松阪高等学校）のご教示を得た。また、石材鑑定は磯部克氏（三重県立松阪高等学校）に依頼した。

6．本書で使用した方位は、全て真北で示した。この地域の磁北は西偏６°20′である。

7．本書で使用した遺構表示記号は、以下の通りである。

ＳＨ：竪穴住居　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＡ：柱列　　ＳＫ：土坑　　ＳＤ：溝

8．当発掘調査の記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

9．調査にあたっては、地元勢和村片野地区、土地改良区をはじめ、三重県農林水産商工部農芸畜産振興課（旧三重県農林水産部農芸畜産課）、松阪地方県民局農林商工部（旧松阪農林事務所）、勢和村教育委員会からの協力を得た。とりわけ土地改良区長であり勢和村文化財保護委員でもある三井博之氏には何かとご尽力いただいた。また、現地作業については、以下の方々の参加をいただいた。記して感謝の意を表したい。

平成９年度〈縁通庵遺跡〉

坂口サヘ、野呂昇三、野呂　操、野呂　都、深田久男、深田美代子、深田しづの、古市　民、三井留生、三井秀代、三井雪生、三井さち、三井清右エ門

（順不同、敬称略）

平成10年度〈アカリ遺跡〉

井上久子、坂口サヘ、高山澄子、田口正夫、中川利代、中道つぎ、野呂昇三、野呂　都、野呂一生、深田久男、深田美代子、深田しづの、古市　民、三井留生、三井秀代、三井雪生、三井さち　（順不同、敬称略）

10．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
Ⅲ　縁通庵遺跡発掘調査の成果 …… 7
Ⅳ　アカリ遺跡発掘調査の成果 ……23
Ⅴ　結　語 ……42

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　遺跡地形図 …… 4
第３図　調査区位置図 …… 5
（縁通庵遺跡）
第４図　調査区平面図 …… 8
第５図　調査区南壁土層断面図及び用水路以東の北壁土層断面図 …… 9
第６図　SB30・SB35平面図及び断面図、SK1 平面図及び土層断面図 ……11
第７図　SB33・SB34・SA31・SA32・SB36・SA37・SA38平面図及び断面図 ……12
第８図　縄文土器実測図（１） ……14
第９図　石器実測図（１） ……15
第10図　縄文土器実測図（２） ……17
第11図　石器実測図（２） ……18
第12図　中世の土器実測図 ……19
（アカリ遺跡）
第13図　調査区平面図 ……25・26
第14図　ＳＨ19・ＳＨ35平面図及び断面図 ……28
第15図　ＳＨ41～43・ＳＨ70平面図及び断面図 ……29
第16図　ＳＨ47・ＳＨ48・ＳＨ71平面図及び断面図 ……30
第17図　ＳＢ72平面図及び断面図・ＳＸ56平面図及び断面図 ……31
第18図　ＳＢ73・ＳＫ17・ＳＫ21・ＳＢ66平面図及び断面図 ……32
第19図　縄文土器実測図 ……34
第20図　弥生土器実測図 ……35
第21図　中・近世の土器実測図 ……36
第22図　石器実測図 ……37
第23図　石器・石製品・鉄製品実測図 ……38

表　目　次

（縁通庵遺跡）
第１表　掘立柱建物・柱列一覧表 ……19
第２表　土坑他一覧表 ……20
第３表　溝一覧表 ……20
第４表　土器観察表（１） ……20・21
第５表　土器観察表（２） ……22
第６表　石器観察表 ……22
（アカリ遺跡）
第７表　竪穴住居一覧表 ……39
第８表　掘立柱建物一覧表 ……39
第９表　方形周溝墓一覧表 ……39
第10表　土坑一覧表 ……39・40
第11表　溝一覧表 ……40
第12表　土器観察表 ……40・41
第13表　石器観察表 ……42

図　版　目　次

図版１　縁通庵遺跡調査区全景 ……44
　　縁通庵遺跡ＳＫ１ ……44
図版２　縁通庵遺跡縄文土器 ……45
図版３　縁通庵遺跡石器 ……46
　　アカリ遺跡調査区 ……46
図版４　アカリ遺跡ＳＨ41～43・ＳＨ70 ……47
　　アカリ遺跡出土遺物 ……47
図版５　アカリ遺跡弥生土器 ……48
　　アカリ遺跡石斧他 ……48

Ⅰ 前　言

1　調査の契機

縁通庵遺跡は約16,000㎡、アカリ遺跡は約22,000㎡におよぶ周知の遺跡である。また、近辺にもいくつかの遺跡が従来から知られていた。平成８年度に県営畜産経営環境整備事業（多気勢和地区）がこの地域で実施されることになり、試掘調査を行うことになった。

平成８年10月29・30日の試掘調査では、縁通庵・アカリ・スサキ・ソウダ遺跡の合計４遺跡、総面積約72,550㎡を対象に47か所の試掘坑を設定し、実施した。その結果、縁通庵遺跡約10,000㎡、アカリ遺跡約11,800㎡、スサキ遺跡約1,000㎡、ソウダ遺跡約3,600㎡について遺構が存在しているものと判断した。

その後の関係部局との協議の結果、平成９年度及び10年度事業予定地内については、工法変更で遺跡の保存に努め、深く掘削する水路設置部分の縁通庵遺跡内約600㎡と、削平を免れないアカリ遺跡内約1,205㎡については発掘調査を実施し、記録保存を図ることになった。

2　縁通庵遺跡の調査経過

（１）調査経過

縁通庵遺跡の発掘調査は平成９年９月18日から開始し、同年10月30日に終了した。調査面積は約５×120ｍの約600㎡であったが、約５×80ｍの約400㎡を対象として下層調査を行ったため、最終の調査面積は合計約1,000㎡となった。

（２）調査日誌（抄）

平成９年

９月18日　重機による表土掘削開始。

９月19日　包含層掘削。小地区設定。

９月24日　作業員初日。調査区西端から壁削り、検出。溝、土坑、Pit 多数確認。直径約３ｍの土坑は竪穴住居か。

９月25日　遺構掘削。根石を持つPit 数個。

９月26日　雨天中止。

９月29日　遺構掘削、検出。ＳＫ１の周囲では縄文土器の小片が出土する。

９月30日　ＳＫ１他掘削。縄文土器、サヌカイト石鏃・剝片出土。

10月２日　遺構掘削。

10月３日　遺構掘削。下層トレンチ掘削。

10月６日　ＳＫ16掘削。下層トレンチから縄文前期土器、石器剝片出土。

10月７日　遺構掘削。

10月８日　遺構掘削。遺構清掃。

10月９日　遺構掘削。遺構清掃。実測用３ｍメッシュ設定。

10月13日　遺構清掃。遺構写真撮影。実測用３ｍメッシュ設定。

10月14日　遺構個別実測。

10月15～17日　遺構実測。

10月20日　遺構レベル計測。

10月21日　遺構個別実測。重機による下層確認。一部分で遺物出土。

10月22日　作業員再開。包含層掘削。遺構検出。

10月23日　包含層掘削。遺構検出。土層断面図作成。

10月24日　包含層掘削。土層断面図作成。

10月27日　包含層掘削。土層断面図作成。下層レベル計測。

10月28日　下層レベル計測。

10月29日　道具撤収。

10月30日　現地確認。発掘調査終了。

11月20日　農林事業工程との整合をつけることができず、発掘調査終了までに現地説明会を開催することができなかった。しかし、地元住民の要望もあり、「発掘調査成果報告会」を11月20日に開催した。地元の「片野コミュニティーセンター」を会場にし、18：30～19：30の予定で、遺構はスライドで、遺物は実物を使用して説明をした。当日は、30人ほどの地元参加者があった。

3　アカリ遺跡の調査経過

（１）調査経過

アカリ遺跡の発掘調査は平成10年９月４日から開始し、同年11月13日に終了した。調査面積は1,205㎡である。また、ほぼ全面にわたって重機による下層確認をおこなった。

（２）調査日誌（抄）

平成10年

９月４日　重機による表土掘削開始。

９月８日　作業員初日。水路部分検出。土坑列、溝等を掘削。

９月９日　いくつかの大型の方形土坑上面で、弥生土器を確認。竪穴住居の可能性が考えられる。

９月10日　柵列だと考えていたものは、現代の攪乱で、ブドウ棚の支えであることが判明した。

９月16日　台風一過。現場復旧。

９月22日　台風被害甚大。翌日復旧。雨天の日が多く、作業が捗らない。

９月23日　現場復旧のため、出勤。

９月24日　ＳＨ19完掘。

９月29日　ＳＤ３完掘。ＳＨ19全体を調査できるように調査区拡張。

10月５日　ＳＨ35から石製紡錘車、磨製石斧等が出土。

10月６日　ＳＨ41～43検出。３棟が切り合っていると考えられる。のちに、もう１棟が切り合うことが判明した。

10月９日　方形周溝墓を確認。ＳＨ35完掘。

10月13日　１間×４間の中世掘立柱建物を確認。周溝のみの竪穴住居を２棟検出。

10月15日　ＳＨ47完掘。

10月20日　ＳＨ48完掘。

10月21日　水路部分の残りを検出。ＳＤ３につながるものではないかと想定する。石鏃、サヌカイト剝片の出土が多い。現地説明会資料を県政記者クラブ、松阪市政記者クラブ、Mie ネットに同時提供。

10月22日　地元各紙に記事が掲載される。一部テレビ放映もされた。

10月23日　縄文時代の遺構を確認。サヌカイトの剝片が多数出土した。

10月24日　現地説明会。雨天のため、一度中止をしたが、参加者が多数集まったため開催。約80名の参加があった。

10月27日　ＳＨ41完掘。

10月29日　ＳＨ42完掘。ＳＨ42内に小規模な竪穴住居を確認。

11月２日　ＳＨ43完掘。

11月４日　遺構実測。写真撮影。

11月６日　ＳＨ42周溝から鉄製品出土。

11月９日　面の調査区を引き渡し。

11月10日～11日　実測、レベル計測。

11月13日　残りを引き渡し。発掘調査終了。

Ⅱ　位置と環境

多気郡勢和村内を流れる櫛田川は三重、奈良両県境の高見山に源を発する。その後１市４町１村を貫き、伊勢湾へと注ぐ。

縁通庵遺跡（１）とアカリ遺跡（２）は、櫛田川中流域の河岸段丘面にある。この段丘面には多くの遺跡が存在している。勢和村内の遺跡数は100以上あり、またその半数以上が縄文時代の遺跡である。[①]

当遺跡付近の櫛田川は、ほぼ南流し、流れの方向は変化に乏しい。また段丘面は、標高約67ｍ、河床面から10ｍほどの高さである。この段丘面の川沿いにいくつかの遺跡が直線的に並んでおり、その分布状況は特徴的である。

以下には、この地域の遺跡を概観したい。

1　旧石器時代

旧石器時代の遺跡数は少ない。立岡遺跡（３）、浜井場遺跡（４）、中ノ広Ｂ遺跡（５）でナイフ形石器が採集されている。

2　縄文時代

縄文時代になると遺跡数は増加する。草創期の遺跡では、北新木遺跡（６）で木葉形尖頭器、コバサマＢ遺跡（７）で有茎尖頭器が採集されている。試掘調査例では石神Ａ遺跡で有茎・木葉形尖頭器や神子柴型石斧などの草創期特有の石器群が出土している。[2] ただ、この石器群に伴う土器が不明であり、この傾向は県内の当該期の遺跡についても同様である。[3]

また、この時期の土偶を始めとする土器・石器が出土した飯南町の粥見井尻遺跡は、櫛田川沿いの約10kmほど上流に位置している。この遺跡の調査成果により、この時期の県内での様相が明らかになりつつある。[4]

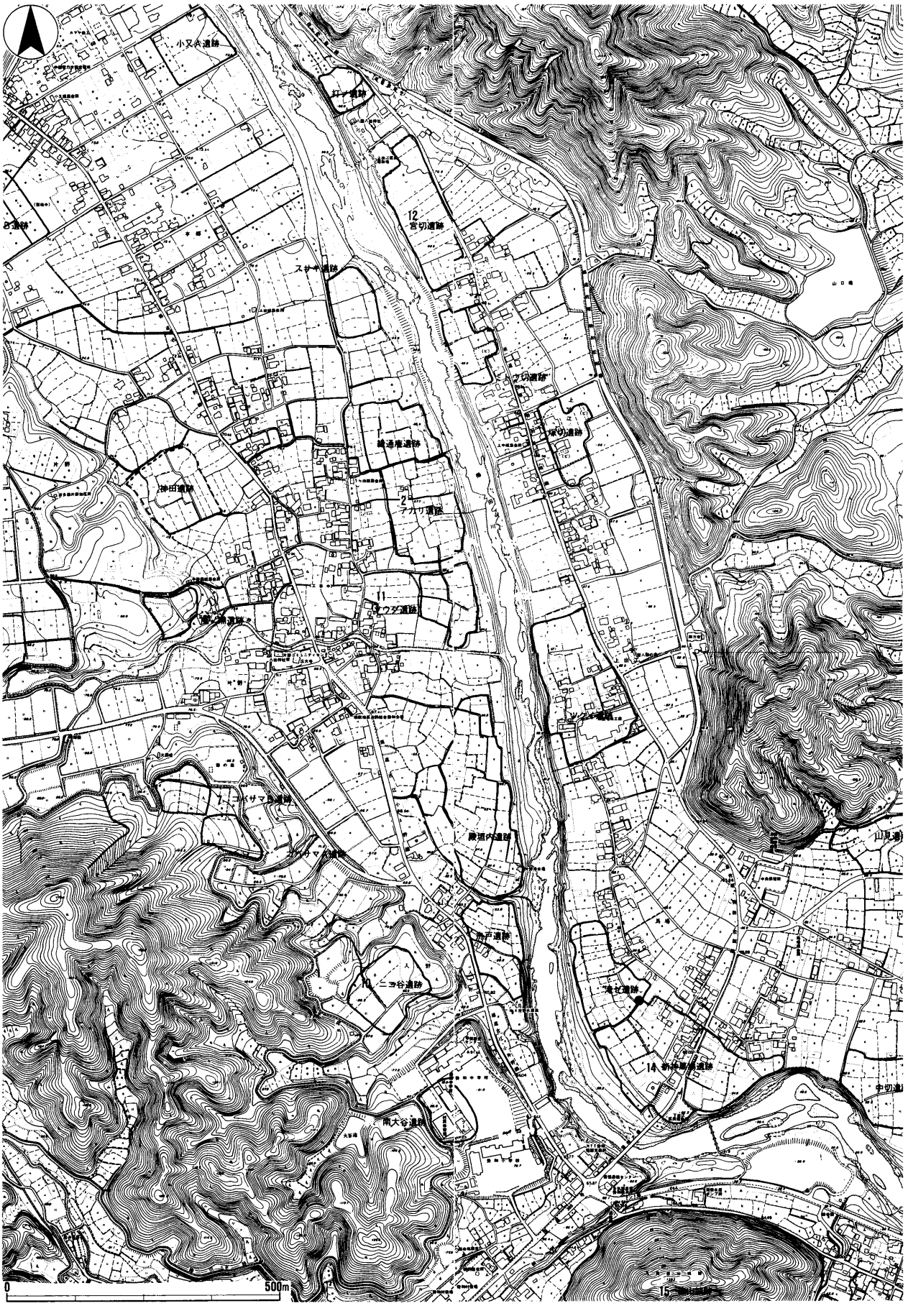
早期前半の押型文土器前半期には南新木遺跡[5]（８）、後半期には中広遺跡（９）・ニコ谷遺跡（10）がある。早期後半の条痕文土器期には目立った遺跡はない。

前期になると、県内ではその数が激減する。その中にあって勢和村内にはアカリ遺跡をはじめとするいくつかの前期の遺跡がある。アカリ遺跡は、宮川流域の度会町・万野遺跡[6]とならび、櫛田川流域における拠点的集落であったと推定されている。縁通庵遺跡でも、かねてからこの時期の土器が採集されている。前期は調査例も少なく、実態解明が進んでいない。

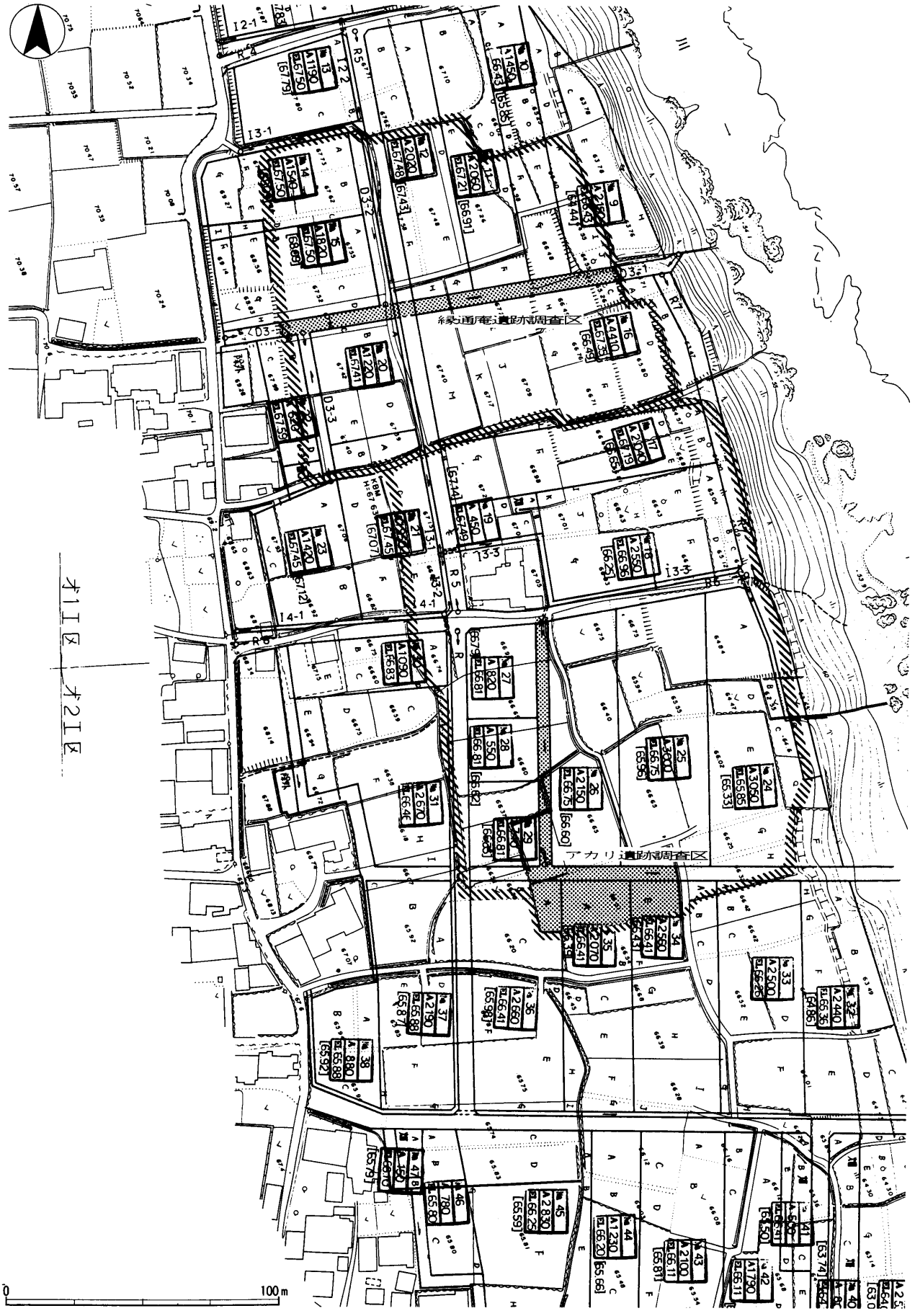
中期になると遺跡数も増加する。浜井場遺跡（４）は櫛田川流域を代表する遺跡である。この遺跡では舟元・里木式を主体とした土器がみられる。また、ソウダ遺跡（11）では70cmにおよぶ石棒が単独出土しているが、中期から後期のものと推定されている。

後期でも遺跡数は多く、前半では宮切遺跡（12）・井尻遺跡[7]（13）がある。この時期の櫛田川流域には、ある程度拠点的な遺跡が数kmおきに位置していることが指摘されており[8]、これらもそういった遺跡の一つである。後半には遺跡数が減る反面、大規模な遺跡が現れる。新神馬場遺跡[9]（14）は、この地域の代

第１図　遺跡位置図（1：50,000）　国土地理院「横野」（１：25,000）から



第2図　遺跡地形図（1：10,000）　「勢和村遺跡地図」（1：5,000）から



第3図　調査区位置図（1：2,000）

表的な遺跡である。石器石材は在地のチャートが減少し、サヌカイト利用が一般的になる。

晩期前半の遺跡は乏しいが、後半では池ノ谷遺跡がある。この遺跡では、朱付着の磨石や石皿、辰砂原石とともに朱彩土器が出土している。朱といういわば特産品を生産した遺跡の一端がみえる。また、石棒・石剣類など呪術的な性格の遺物が多いことも注目される。[10]

3　弥生時代

遺跡の分布が平野部に進出するなか、前期には北新木遺跡（6）で遠賀川式土器が確認されるなど、中・上流域でもいくつか点在している。南新木遺跡（8）では前・中期ごろと思われる石包丁が確認されている。しかし、弥生時代の遺跡の解明は進んでいないといえる。

4　古墳時代

古墳の分布は平野部に集中し、この地域では上広古墳群があるのみである。3基存在したということであるが現在は消滅し、詳細は不明である。

5　奈良～平安時代

奈良時代については遺物が確認される遺跡もなく、ほとんど白紙に近い。平安時代も村内丹生地区の畝ノ上遺跡で須恵器が掘立柱建物柱穴内から出土している程度であり、資料の蓄積が待たれる。

6　中世

中世の集落跡がその数、面積ともに増加してきたことは遺物の散布状況からもうかがえるが、現集落と重複する部分も多いと思われる。城館には、五箇篠山城跡[11]（15）・波多瀬城跡（16）などが挙げられる。五箇篠山城は南北朝時代に南朝方の拠点の一つとして築かれ、16世紀末に改修がされたと考えられている。

［註・参考文献］

① 『勢和村遺跡地図』（勢和村教育委員会、1995年）。

② 早川正一・奥義次「三重県石神遺跡出土の石器群」（『考古学雑誌　第50巻第3号』、1965年）。

③ 県内の有茎尖頭器や神子柴型石斧などを出土する遺跡では、明確な草創期の土器は出土しておらず、むしろ押型文土器が出土する傾向にあることが、奥義次氏によって指摘されている。

④ 中川明「日本最古の土偶が出土！」（『三重県埋文センター通信　みえ　No.21』、1997年）。
中川明・松葉和也『粥見井尻遺跡範囲確認調査報告』（飯南町教育委員会、1997年）。

⑤ 谷本鋭次『上広遺跡試掘調査報告』（上広遺跡調査会、1973年）。

⑥ 岡田登「下久具万野遺跡とその遺物」（『歩跡　第2号』、皇学館大学考古学研究会、1970年）。

⑦ 西村美幸・松葉和也『井尻遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

⑧ 奥義次「第二編通史　第一章原始」（『飯高町郷土誌』、1986年）。
奥義次「縄文時代」（『多気町史』通史　第二編　原始第二章、多気町史編纂委員会、1992年）。

⑨ 岩田直衛ほか『新神馬場遺跡発掘調査報告書』（三重県立津高等学校地歴部、1972年）。

⑩ 奥義次「付Ⅱ　池ノ谷遺跡範囲確認調査報告」（『勢和村遺跡地図』、勢和村教育委員会、1995年）。

⑪ 小林秀「付Ⅲ　五箇篠山城跡」（『勢和村遺跡地図』、勢和村教育委員会、1995年）。

Ⅲ　縁通庵遺跡発掘調査の成果

1　調査の方法

本遺跡は表面積600㎡で、下層調査部分400㎡を合わせると合計1,000㎡の調査面積である。600㎡については通常の遺構検出と掘削を行った。掘削は表土については重機掘削を行った。それ以外は人力による掘削である。また、下層400㎡でも遺構検出を試みたが、結果的に遺構の検出はできず、遺物のみを得た。下層の掘削は主に重機による掘削であるが、遺物が認められた部分は人力による掘削を行った。

調査区は幅約５ｍ、全長約120ｍという東西に細長い形であった。小地区設定は４ｍグリッドで、南北にａ・ｂ、西から東に１～30である。この設定は国土座標とは無関係である。

遺構図面・土層図面については縮尺1/20で作成した。また、重要性が認められた遺構については縮尺1/10で作成している。

2　層序

本遺跡の現状は水田および用水路である。調査区西端の基本層序は次のとおりである。

Ⅰ　灰黄褐色土（表土）
Ⅱ　黒褐色土
Ⅲ　灰黄褐色土（検出面）
Ⅳ　黒褐色土
Ⅴ　黄褐色砂（下層検出面）
Ⅵ　明褐色砂礫

Ⅱは遺物包含層に相当するが、調査区の大半では認められず、表土直下がⅢの検出面となっていた。Ⅲでは縄文時代と中世の遺構を検出したことから、縄文時代と中世の遺物包含層の大半が流失、あるいは耕作によって削平を受けたと考えられる。また、小地区番号20付近以東にはⅡとⅢの中間層があり、この層の上面で中世の遺構を検出した。この層は縄文時代前期の遺物包含層にも相当し、この層の掘削による遺物出土が下層調査の主たる成果である。Ⅴ以下に遺物は認められず、Ⅵで砂礫層に達する。

3　遺構

検出した遺構は、縄文時代と中世に大別できる。層序の項でも述べたが、縄文時代と中世の遺物包含層は大部分が失われていると考えられ、調査区の西半分では縄文時代と中世の遺構を同一面でしか検出することができなかった。

(1)　縄文時代の遺構

縄文時代は、土器・石器がある程度出土しているが、確認できた確実な遺構は土坑１基である。

土坑ＳＫ１（第６図）　調査区のほぼ中央、ａ15・ｂ15に位置する。平面形は長軸約3.4 ｍ、短軸約3.0ｍのやや楕円形で、検出面からの深さは約0.4ｍである。壁面は傾斜し、底面は水平に近い形状である。この遺構に伴うピットなどは検出できなかった。出土遺物は縄文土器片・石器・石器剝片である。土器の時期は前期後半にほぼ限られており、この遺構の時期は、縄文時代前期後半と判断できる。

(2)　中世の遺構

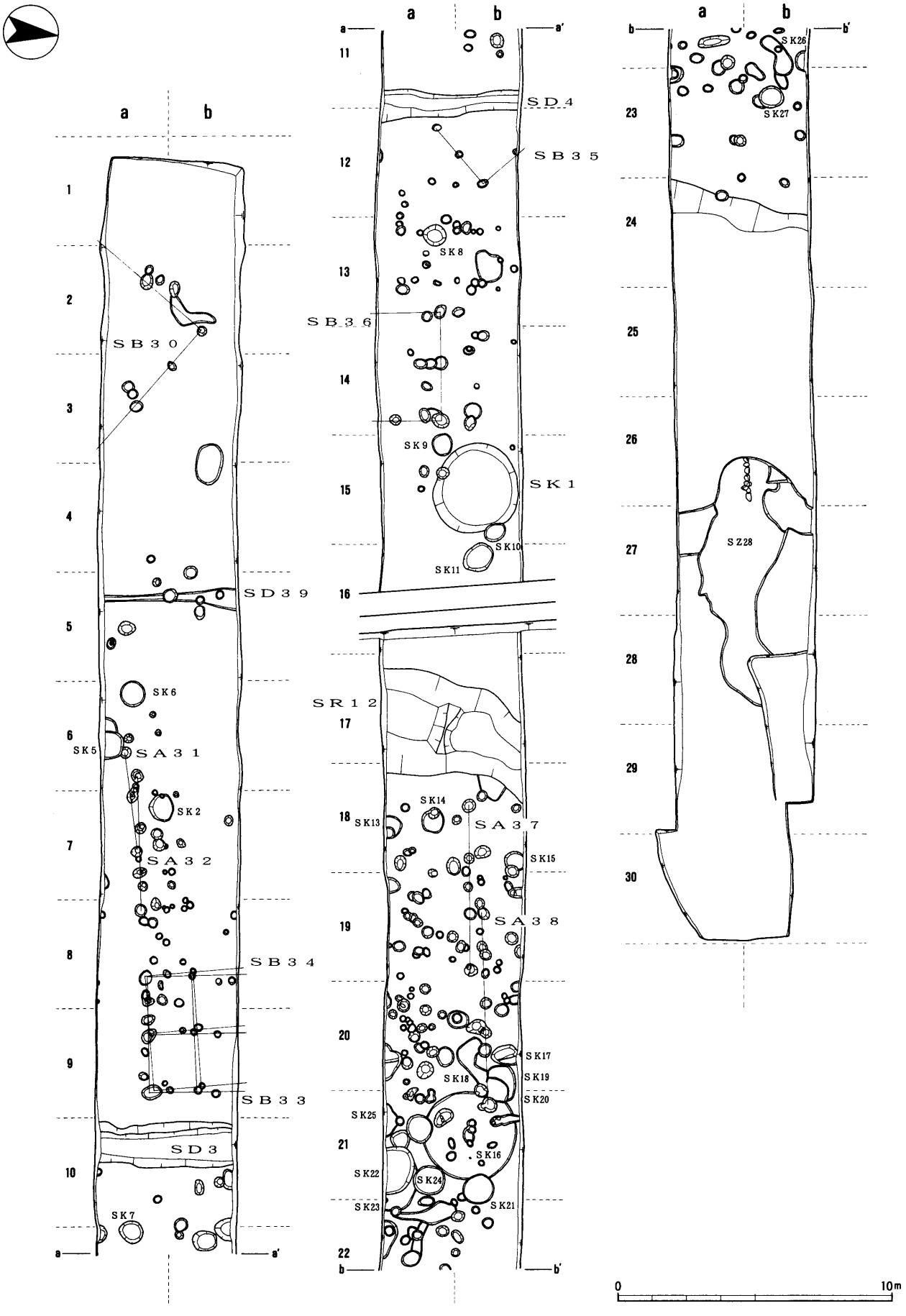
中世の包含層は薄かったものの、遺構はある程度検出することができた。しかし、平面積の割に浅い遺構も認められ、遺構上面も削平されていると考えられる。確認しえたのは、掘立柱建物・柱列・溝・土坑などである。

遺構の時期推定については、伊藤裕偉氏の南伊勢系土師器の編年観（以下「伊藤編年」）によっている。[①] ただし、本遺跡には良好な遺物が少なく、以下ではその可能性のある時期を記述しているにすぎないことを断っておきたい。

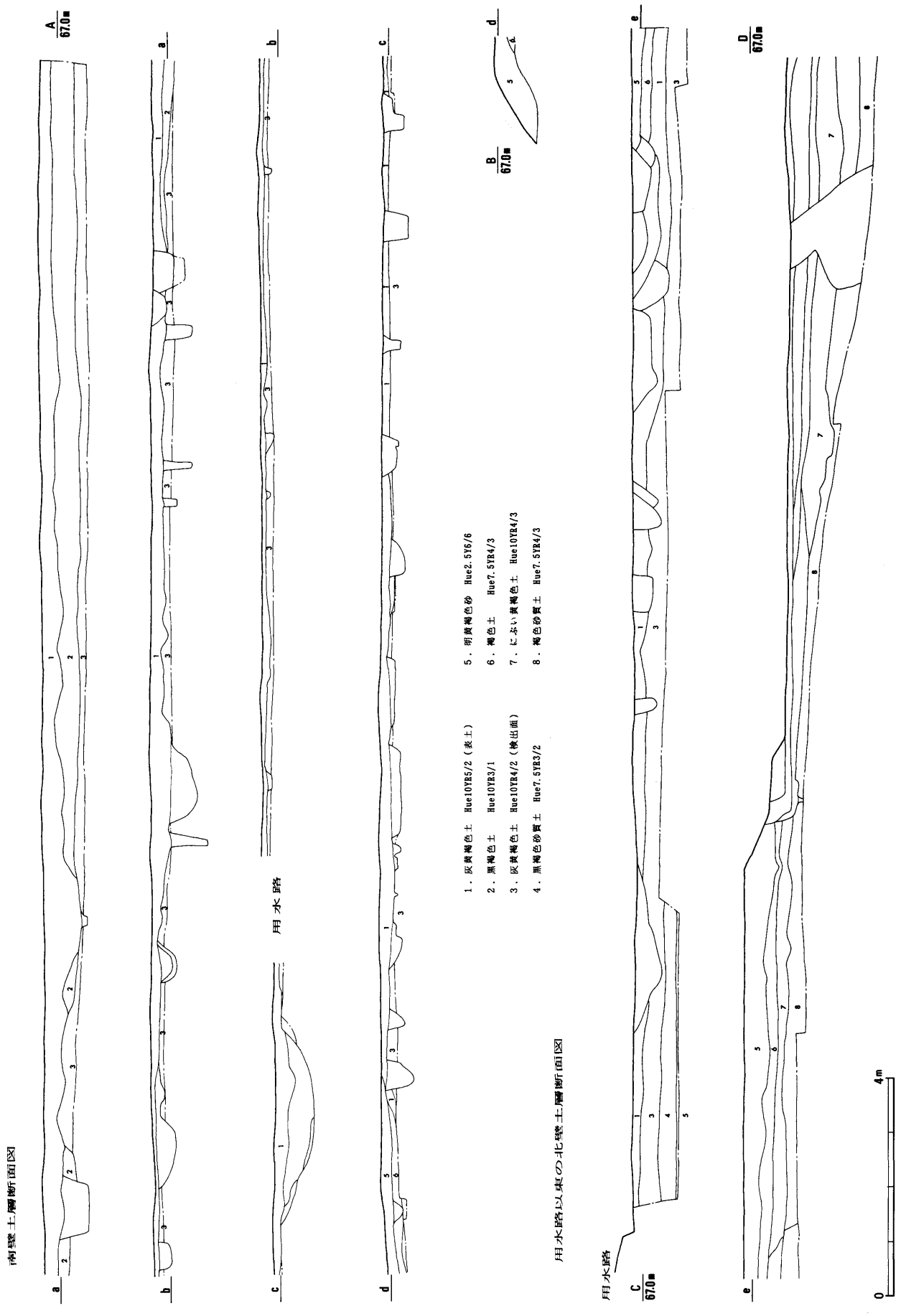
掘立柱建物ＳＢ30（第６図）　小地区番号２・３に位置する。建物の一部分しか確認できないが、２間（約3.6ｍ）以上×１間（約2.7ｍ）以上の側柱建物であろう。棟方向はＮ29°Ｅである。

出土遺物は少なく、時期推定はできない。しかし、棟方向から考えると、後述するＳＢ35との関連も考えられる。

掘立柱建物ＳＢ33（第７図）　小地区番号８・９に位置する。調査区外へのびるため定かでないが、東西２間（約4.2ｍ）×南北１間（約3.6ｍ）以上の規



第4図　調査区平面図（1：200）



第5図　調査区南壁土層断面図及び用水路以東の北壁土層断面図（1：100）

模であると考えられる。南北棟と思われ、棟方向はN15°Wである。

柱穴から出土した土師器鍋の破片は、伊藤編年第2段階に相当するものと思われる。したがって遺構の時期は14世紀前半までと思われる。

掘立柱建物ＳＢ34（第７図）　ＳＢ33と同規模でほとんど重複して建っており、建て替え関係にあると考えられる。切り合い関係からＳＢ34のほうが新しい。南側列の柱穴を共有している可能性もあるが、確認できなかった。棟方向はN20°Wである。

掘立柱建物ＳＢ35（第６図）　小地区番号11・12に位置する。規模は定かでないが、２間（約2.7m）×１間（約1.8m）以上の建物であろう。棟方向はN37°Eである。

出土遺物が無いため、時期推定はできない。しかし、棟方向から判断して、ＳＢ30と同時期の遺構である可能性がある。

掘立柱建物ＳＢ36（第７図）　小地区番号13・14に位置する。確認できなかった柱穴もあるが、２間（約4.2m）×１間（約1.8m）以上の建物と考えられる。南北棟と思われ、棟方向はN14°Wである。

遺物が細片のため、時期推定はできない。

柱列ＳＡ31（第７図）　小地区番号７・８に位置する。２間分（約3.6m）を確認した。調査区南端に近いため対応する柱穴を検出しえなかったが、掘立柱建物の一部である可能性もある。列方向はN19°Wである。根石を持つ柱穴が認められる。

土師器小皿が出土しているが、時期推定の材料にはならなかった。

柱列ＳＡ32（第７図）　小地区番号６～８に位置する。３間分（約5.4m）を確認した。ＳＡ31と同様に掘立柱建物である可能性がある。列方向はN15°Wである。根石を持つ柱穴が認められる。

遺物は、伊藤編年第４段階の小形鍋が出土しており、16世紀初頭を中心とする時期の遺構だと考えられる。

柱列ＳＡ37（第７図）　小地区番号18・19に位置する。３間分（約5.7m）を確認した。対応する柱穴は確認できず、単独の柱列かもしれない。これに直交する線の方向はN14°Wである。根石を持つ柱穴が認められる。

遺物は伊藤編年第４段階の鍋が出土しており、16世紀初頭を中心とする時期の遺構だと考えられる。

柱列ＳＡ38（第７図）　小地区番号19～21に位置する。４間分（約7.5m）を確認した。調査区の北端に近く、対応する柱穴を検出しえなかったが掘立柱建物の一部である可能性もあろう。列方向に直交する線の方向はN16°Wである。

柱穴から伊藤編年第４段階の鍋が出土しており、16世紀初頭を中心とする時期の遺構であると考えられる。

溝ＳＤ39（第４図）　小地区番号５に位置する。幅約0.2m～約0.8m、深さ約0.1mである。南北両端は調査区外にのびる。方向はN12°Wであり、敷地を区画する溝であると考えられる。埋土中の遺物が無く推定できないが、おそらく棟方向が近い掘立柱建物の時期のものであろう。つまり、16世紀初頭を中心とする時期である。

溝ＳＤ３（第７図）　小地区番号10に位置する。幅約1.6m、深さ約0.5mで南北両端は調査区外にのびる。方向はN12°Wであり、区画溝であろう。

遺物は、伊藤編年第４段階の小形鍋が認められ、おそらく16世紀初頭を中心とする時期の遺構であろう。

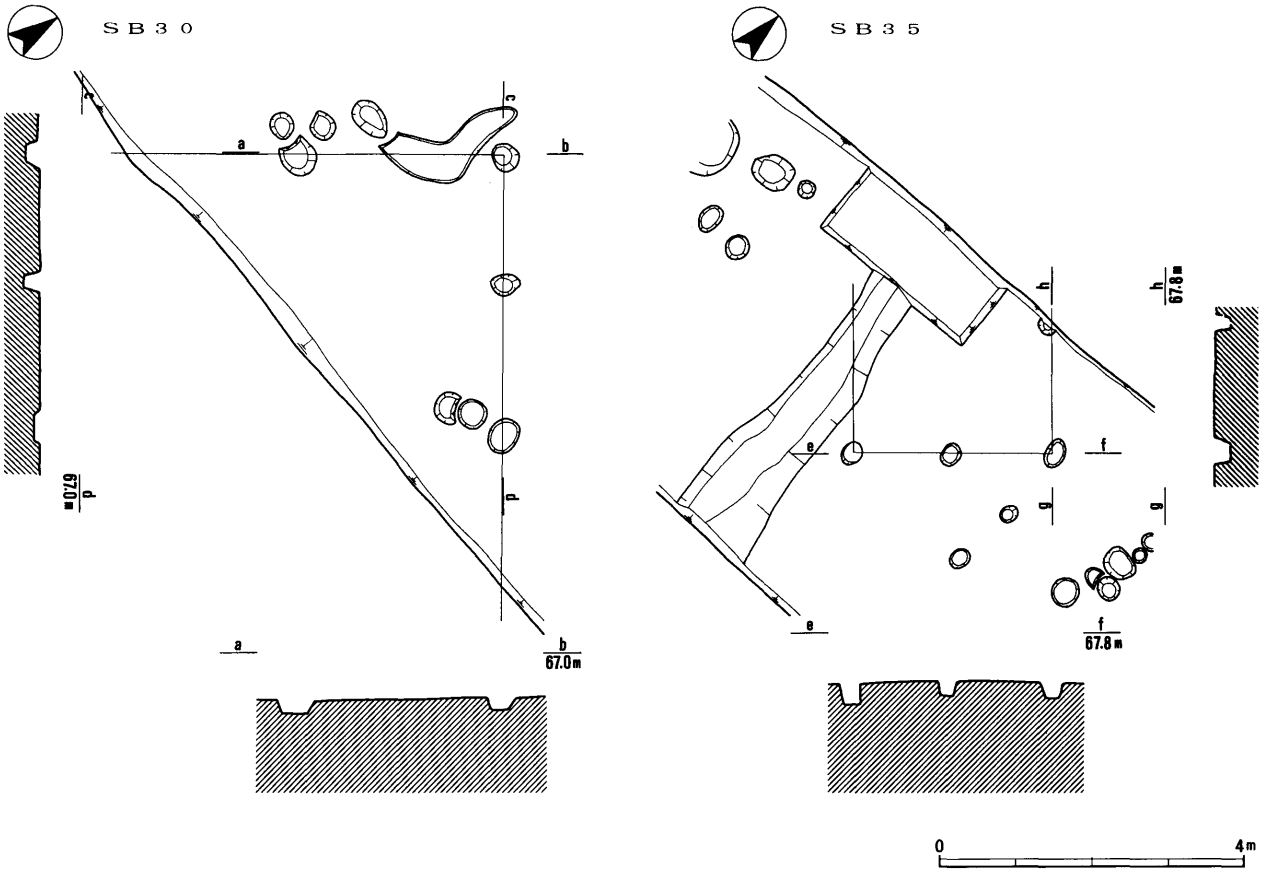
溝ＳＤ４（第４図）　小地区番号11・12に位置する。幅約0.7m～約1.2m、深さ約0.3mである。南北両端は調査区外へのびる。方向はN12°Wであり、区画溝だと考えられる。

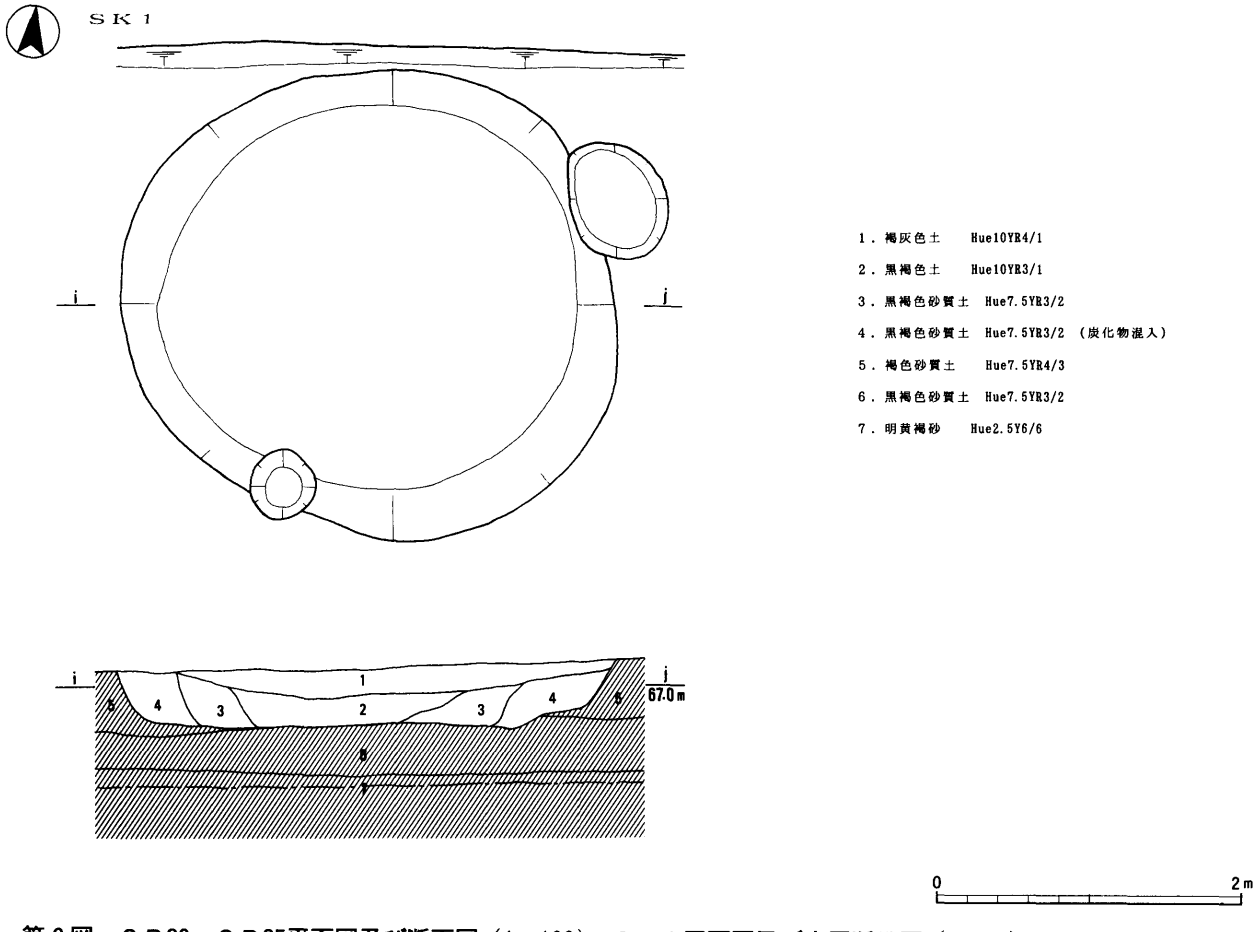
伊藤編年第４段階の鍋が出土しており、16世紀初頭を中心とする時期の遺構であろう。

流路ＳＲ12（第７図）　小地区番号17・18に位置する。幅約2.5m～約4.0m、深さ約0.5m～約0.7mである。中ほどに陸橋部のようなものが認められるが、実際には図示したほどはっきりしていない。流れの方向や形態から、自然流路と判断できる。

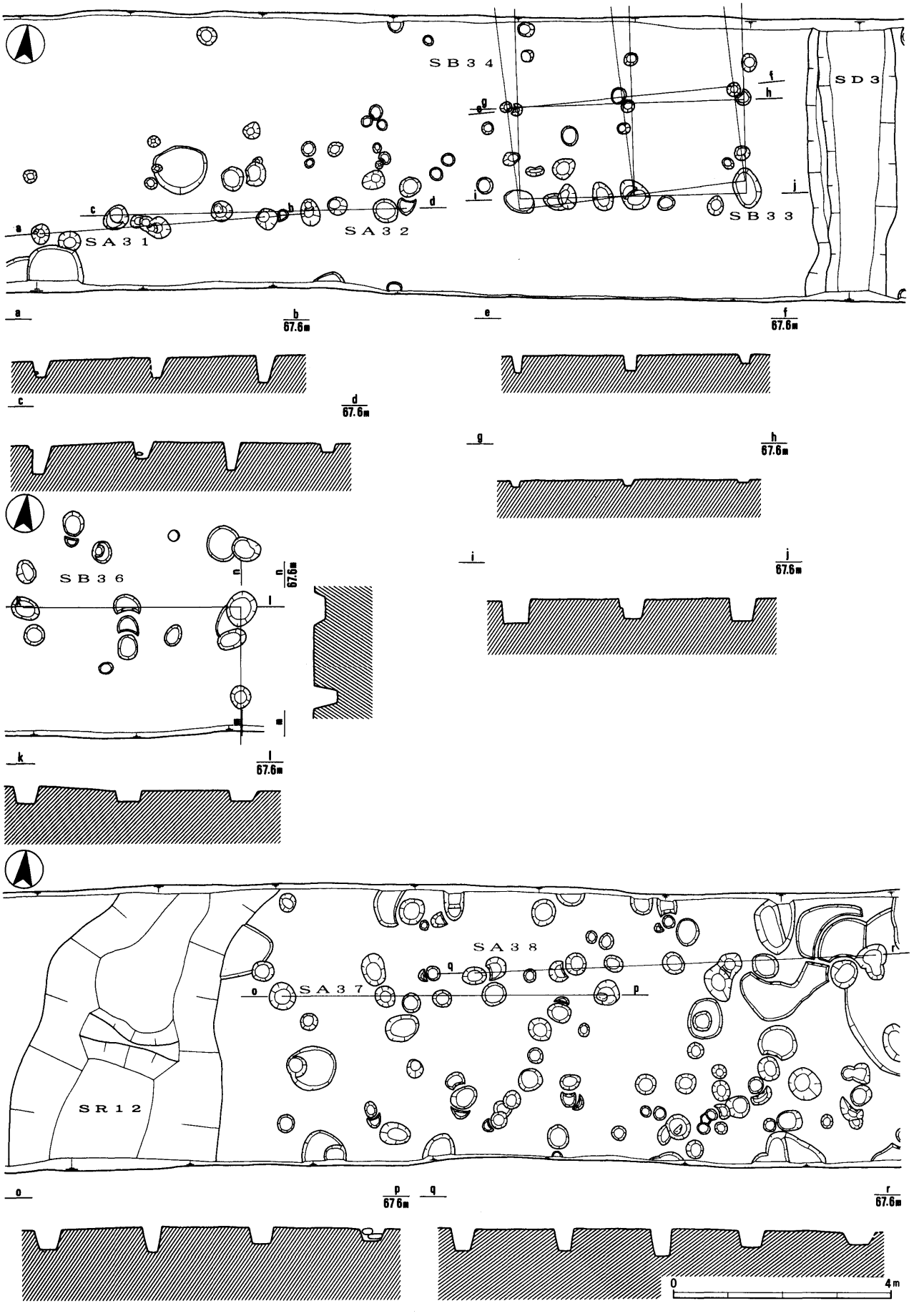
出土遺物は中世の土師器が最も多いが、縄文土器なども出土している。土師器は伊藤編年の第４段階の鍋がみられ、16世紀前半を中心とする時期に埋没した流路であろう。

土坑　中世の土坑はいくつか検出したが、深い掘り込みを持つものはなく、その性格も不明である。遺構規模・時期などは遺構一覧表を参照されたい。





第６図　ＳＢ30・ＳＢ35平面図及び断面図（1：100）、ＳＫ１平面図及び土層断面図（1：50）



第7図　ＳＢ33・ＳＢ34・ＳＡ31・ＳＡ32・ＳＢ36・ＳＡ37・ＳＡ38平面図及び断面図（1：100）

4　遺物

出土遺物には縄文土器・石器、中世の土器類がある。整理用コンテナ箱にして30箱である。

(1)　縄文時代の遺物

土器、石器があるが、比較的資料のまとまったＳＫ１とその他に分けて記述する。

ａ　ＳＫ１出土遺物（１～28）

土器　深鉢と思われるものがほとんどであるが、小破片が多く、器形を復元できるような資料に恵まれなかった。ここでは、文様の有無と種類から以下のように分類を試みた。記述は口縁部、体部、底部の順に行っている。

１類　縄文のみを施すもの（１～3　・18・19）

１～３は口縁部である。１は、外面のみにＲＬの縄文を、２は、外面と口縁端部と内面の肥厚する部分にＬＲの縄文を施すものである。３は、肥厚する部分のみに縄文ＬＲを、口縁端部に刻みを施す。

18・19は、ＬＲの縄文をそれぞれ斜位と横位に施す体部片である。ともに内面に疎らな爪痕が認められる。

２類　縄文の地文に突帯文を施すもの（４～12・20～23）

４～12は口縁部である。突帯上を半裁竹管状工具で刻むもの（４・６・７・８・10・12)、ヘラ状工具で刻むもの（11)、貝殻圧痕を施すもの（５）がある。（９）は不明である。

20～22は体部としたが、口縁部に近いものであろう。20は、突帯を波状に施文している。21は、疎らな刻みを、22は、幅の割に高い突帯を「Ｖ」字状に刻む。23は、平行の突帯から垂下する突帯が見られる体部片である。

３類　突帯文のみを施すもの（13・24・25）

13は、突帯上に縄文を施す口縁部である。24は、突帯上を爪形に刻む体部片、25は、半裁竹管による押し引きを施す体部片である。

４類　縄文の地文に直接押し引きなどを施すもの（14・15・26）

14は、口唇直下に半裁竹管の押し引きが２条認められる口縁部である。15は、外面と、内面の肥厚した部分に縄文を施し、口縁端部を刻んでいる。半裁竹管による施文部分はわずかに突帯があるようにも見える。26は、半裁竹管の押し引きが施される。

５類　平行沈線文を施すもの（16）

16は、平行沈線を施す口縁部である。

６類　無文のもの（17・27・28）

17は、口縁端部を指頭押圧する。27は、赤色顔料[2]が付着した体部小片。28は底部片である。

１類から４類までは、前期後半の北白川下層Ⅱｂ～Ⅱｃ式に属すると考えられる。５類の沈線は太く明確であり、中期から後期のものである可能性もある。

石器　剝片をも含めると数百点に上る。ここでは主なものを取り上げる。

石鏃（52～68）　52～57は、基部が凹基をなし、側縁が直線的で、平面形が二等辺三角形になるものである。52は、細身に仕上げ、長幅比は1.56である。53は、両面ともに調整が行き届いている。両脚を欠く。54は、基部の抉りが浅い。片脚を欠く。55は、基部の抉りが浅く、腹面の二次調整は縁辺部のみである。先端を欠く。56は先端を欠く。57は、基部の抉りが浅い。53がチャートで、他はサヌカイト製である。

58～62は、基部が凹基をなし、側縁が内弯し、脚部で外に張り出したのちに脚先端で内にすぼまるものである。58は先端を欠く。59と60は、片脚と先端を欠く。61は、両面に一次剝離面を残す。片脚を欠く。62は先端を欠く。全てサヌカイト製である。

63・64は、基部が凹基をなし、側縁が緩やかに外に張り出し、長幅比が0.8以下のものである。63は基部の抉りは深く、全長の1/2 に達する。64は先端が尖り、基部の抉りは浅い。ともにサヌカイト製である。

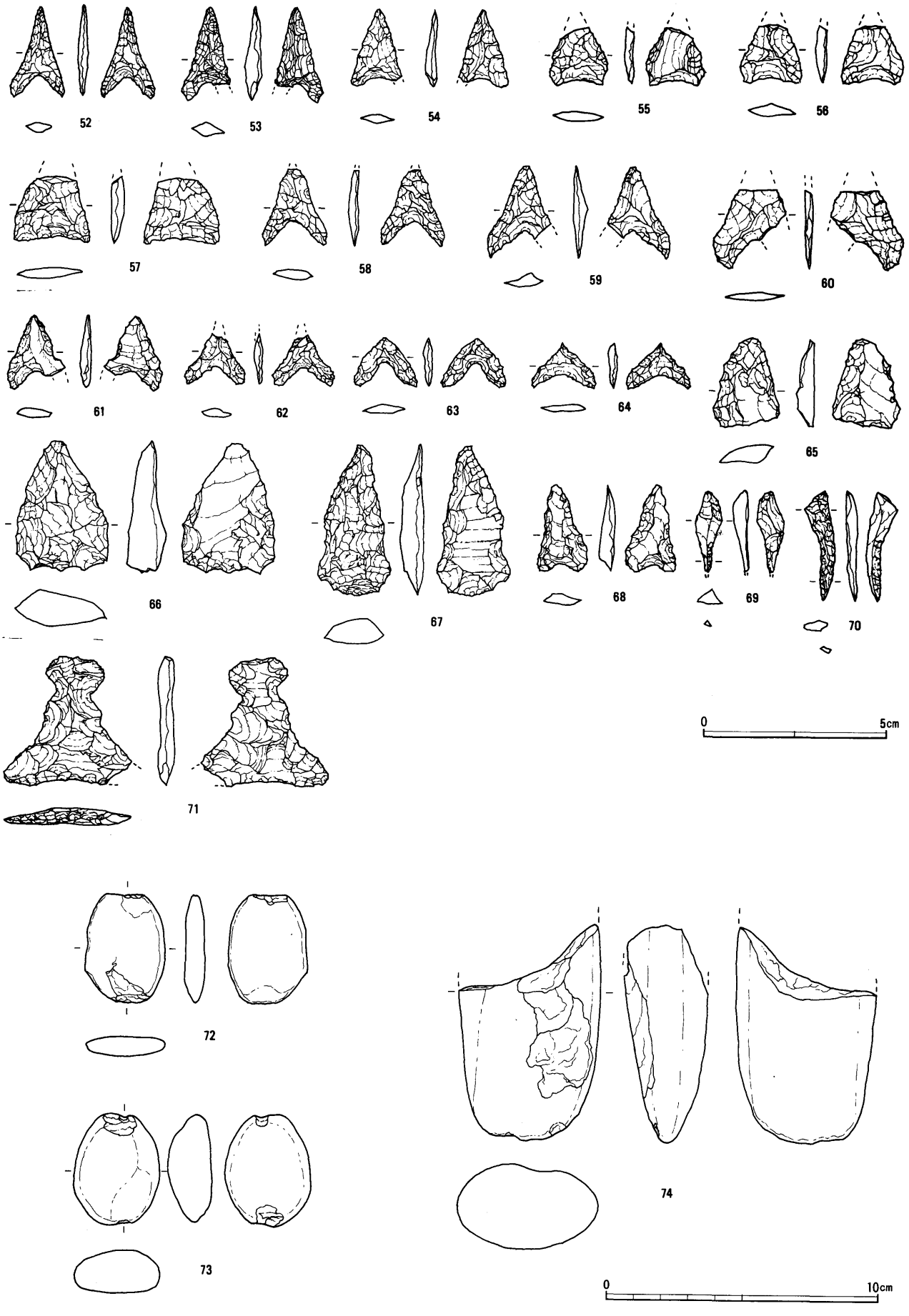
65・66は、基部が平基をなすものである。65は欠損による未製品の可能性がある。66の腹面は、一次剝離面を残す。ともにチャート製である。

67は、基部が円基をなすものである。腹面に一次剝離面を残す。サヌカイト製である。

68は、両面に一次剝離面を残し、未製品と思われる。サヌカイト製である。

石錐（69・70）　ともにつまみ部をもたず、棒状の機能部をもつ。69は素材面を多く残す。70も素材面を残すが、長い機能部を作る。ともにサヌカイト製

第８図　縄文土器実測図(1)（1：２）



第9図　石器実測図(1)　52～71は（2：3）、72～74は（1：2）

である。

石匙（71）　71は、平面三角形で、つまみ部を除く三辺がやや内弯する。サヌカイト製である。前期のものであろう。

打欠き石錘（72・73）　72は、一端の両面と片端の片面を打欠く。砂岩製である。73は、両端の両面を打欠く。砂岩製である。

磨製石斧（74）　74は、乳棒状石斧の身部から刃部にかけての破片である。砂岩製である。

b　ＳＫ１以外の遺物

土器　分類、記述方法は前述によっている。

１類　縄文のみを施すもの（29・40・43・50・51）

29は、外面肥厚部にＬＲの縄文を施す口縁部である。40と43は、羽状縄文を施す体部片である。50・51は、底部片である。51は、側縁に指頭押圧が施される。

２類　縄文の地文に突帯文を施すもの（30～35・41・42・44・46）

30～35は、口縁部片である。30の突帯上は縄文かとも思われる。31は、半裁竹管の押し引き。32は不明である。33・34は、半裁竹管の押し引きである。35は、キャリパー形の波状口縁である。口縁端部に棒状浮文を付す。突帯上は縄文かと思われる。41と42は、内面に爪痕を残す。44は、半裁竹管の押し引きによる粘土のはみ出しが見られる体部片、46は、低い突帯を貼り付ける体部片である。

３類　突帯文のみを施すもの（36・37・47）

36は、口縁屈曲部の突帯上に半裁竹管の押し引きを施す。口縁端部に棒状浮文を斜位に付す。37は、「く」字状に屈曲する口縁の外面に低い突帯を貼り付けるものである。47は、突帯上に半裁竹管の押し引きを施す。ヘラ状刻みも施される。

４類　縄文の地文に直接押し引きなどを施すもの（38）

38は、口縁屈曲部に半裁竹管のナデ引きを行い、棒状浮文を斜位に付す。

その他（39・45・48・49）

39は、三角形の陰刻と突帯上に半裁竹管の押し引きを施す口縁部である。端部には棒状浮文を密に貼りつける。45は、疎らな爪形文の後に突帯を貼りつける体部片である。48は、爪形文を施す体部片である。49は、指頭圧痕が認められる体部片である。

１類から４類までは、前期後半の北白川下層Ⅱｂ～Ⅱｃ式に並行する時期のものだと思われる。ただし、浮文が見られるものなどは、諸磯式の影響も考えられる。また、39は、胎土、施文方法ともに異質のものであり、東の地域からの搬入品である可能性がある。

石器　ＳＫ１以外の石器の内、図示可能なものを取り上げた。

石鏃（75・76）　75は、基部が凹基をなし、側縁が直線的で、平面形は二等辺三角形である。片脚を欠く。76は、基部が凹基をなし、側縁が内弯する。先端部を欠く。ともにサヌカイト製である。

石錐（77）　77は、つまみ部をもたず、棒状の機能部をもつ。全面に二次調整がおこなわれる。両端を欠く。サヌカイト製である。

掻器（78）　78は、両面に比較的角度のある二次調整を行い、刃部を作る。チャート製である。

削器（79）　79は、バルヴァスカーを残す薄い剝片を使用し、先端と一側縁の表裏両面に平坦剝離を施す。サヌカイト製である。

切目石錘（80・81）　80は、打欠きを施したのちに切目を入れる。砂岩片岩製である。81は、砂岩の楕円礫を素材とし、両端にわずかに切目を入れる。

打欠き石錘（82・83）　82・83ともに両端の両面を打欠く。ともに結晶片岩製である。

石棒（84）　84は、石棒だとすれば頭部に近い破片であろう。ただし、表面は研磨され、面ができており、断面が正円形とはならない。砂岩製である。

サヌカイト原礫　85は、大きさ6.2cm×8.0cm×5.3cmで、重さ309.2ｇである。

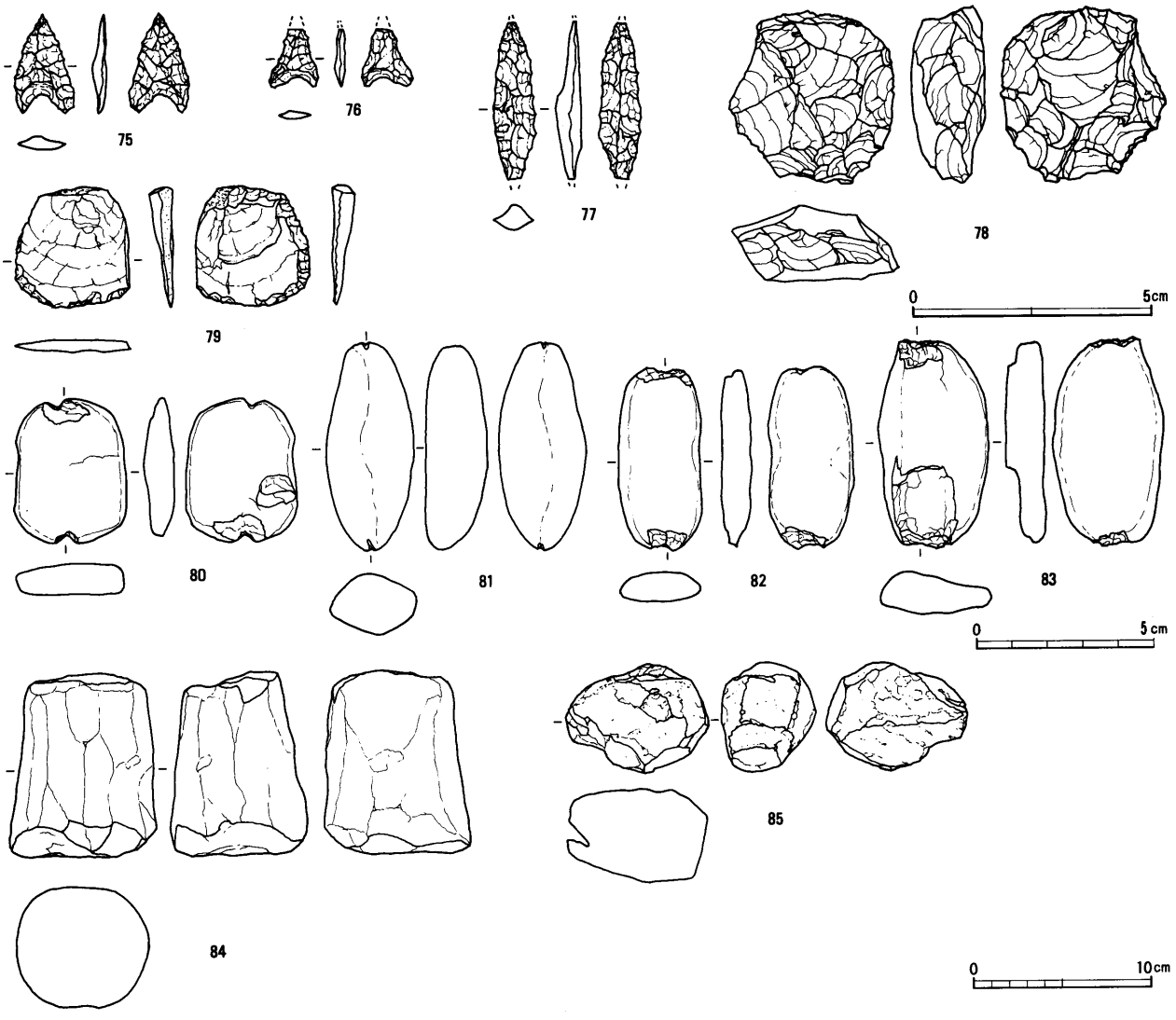
(2)　中世の遺物（86～116 ）

中世の遺物は、ピットとＳＤ12出土のものが大半である。以下には器種別に記述する。

土師器皿（86～95・105）　86～88は、ひずみが大きく、わずかに立ち上がる口縁をもつ。89～94は、体部を丸くする。91は、内弯が強い。95の断面は、外面下部のオサエで内に入り、そこから外へ張り出したのち口縁が若干内弯する。105は、体部を内弯させる。

91は15世紀代、105 は14世紀代のものであろう。

第10図　縄文土器実測図(2)（1：2）



第11図　石器実測図(2)　75～79は（2：3）、80～83は（1：2）、84・85は（1：4）

土師器鍋（98～102・107～113）　98・102は、口縁端部の折り返し上に明確な稜を作る。99・107～109は、口縁端部を低く折り返す。107～109は小型のものである。100・101・110～113は、口縁端部の折り返しをつまみ上げる。110は小型、111・112は中型のものである。113は、体部が半球形を呈するものであろう。

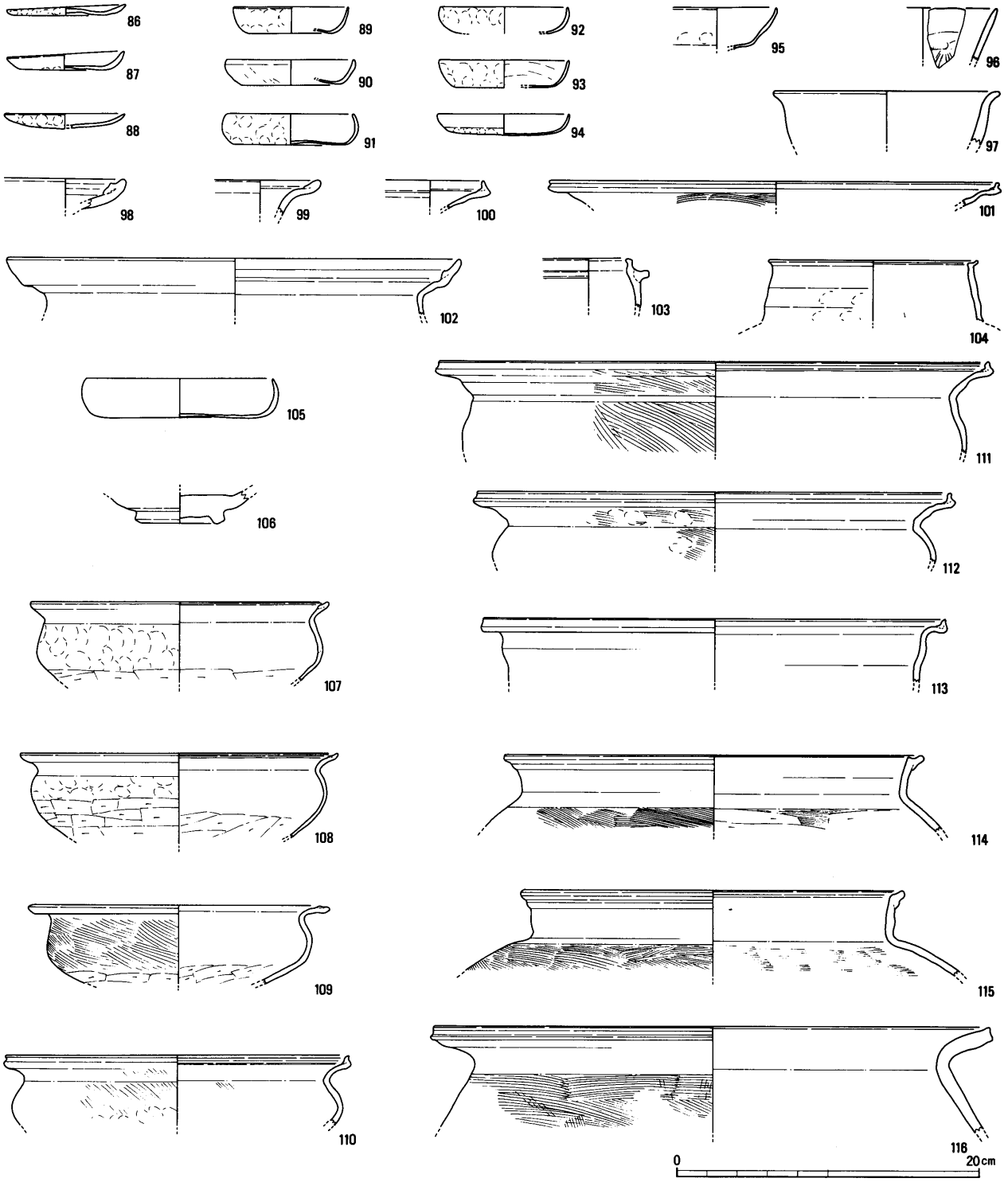
98は、伊藤編年第2段階のものと思われ、13世紀後葉から14世紀中葉、102は、第3段階のものと思われ、14世紀後葉から15世紀前半をあてることができる。107～113は、第4段階のものと思われ、15世紀中葉から16世紀後葉をあてることができる。

土師器羽釜（103）　103の外面鍔部は、口縁近くに短く付けている。口縁端部下をやや強くなで、若干肥厚する。胎土は他の南伊勢系土師器のものより荒い。尾張地域からの搬入品であろう。

土師器茶釜（104・114・115）104の口縁端部は強くなでられ、外に突出する。114・115の口縁端部は強くなでられ、外に突出させ、折り返す。いずれも南伊勢系のものである。

土師器甕（116）　116は、口縁をやや丸く「く」字状にし、端部をやや強くなで、つまみ上げる。

青磁碗（96・97・106）　96の口縁は、ほぼ真っ直ぐに納める。97は、端部が外反する。96は、陰刻花文が認められる。106は、削り出し高台である。



第12図　中世の土器実測図（１：４）

遺構名	小　地　区	規　　模	方　向	根石	時　期	備　　考
ＳＢ30	ａｂ２・３	２間以上×１間以上	東西棟Ｎ29°Ｅ	無		
ＳＡ31	ａ６・７	２間	東西列Ｎ71°Ｅ	有		
ＳＡ32	ａ６・７・８	３間	東西列Ｎ75°Ｅ	有	１６世紀	
ＳＢ33	ａｂ８・９	２間×１間以上	南北棟Ｎ15°Ｗ	無	１４世紀？	
ＳＢ34	ａｂ８・９	２間×１間以上	南北棟Ｎ20°Ｗ	無		
ＳＢ35	ａｂ12	２間×１間以上	東西棟Ｎ37°Ｅ	無		
ＳＢ36	ａ13・14	２間×１間以上	南北棟Ｎ14°Ｗ	無		
ＳＡ37	ｂ18・19	３間	東西列Ｎ76°Ｅ	有	１６世紀	
ＳＡ38	ｂ19・20・21	４間	東西列Ｎ74°Ｅ	無	１６世紀	

第１表　掘立柱建物・柱列一覧表

遺構名	小地区	平面形	上面規模（m）	深さ（m）	時期	備考
ＳＫ１	ａｂ15	楕円形	３．４×３．０	０．４	縄文時代前期	
ＳＫ２	ａ７	楕円形	１．０×０．９	０．２	中世後期	
ＳＫ５	ａ６	楕円形	１．０×０．９	０．３	中世後期	
ＳＫ６	ａ６	円形	直径０．９	０．２		
ＳＫ７	ａ11	楕円形	０．９×０．８	０．３	１６世紀代	
ＳＫ８	ａ13	楕円形	０．９×０．８	０．４	縄文時代前期？	
ＳＫ９	ａ15	楕円形	０．８×０．７	０．１	中世	
ＳＫ10	ｂ15	楕円形	０．８×０．６	０．１	中世	
ＳＫ11	ｂ16	楕円形	１．２×１．０	０．１	縄文時代前期？	
ＳＫ13	ａ18	楕円形	０．９×０．８	０．１	中世後期	
ＳＫ14	ａ18	楕円形	０．８×０．７	０．１	中世	
ＳＫ15	ｂ18	円形	直径０．８	０．１	１６世紀代	
ＳＫ16	ａｂ21	円形	直径３．４	０．１	１６世紀代？	
ＳＫ17	ｂ20	不定形		０．３	１６世紀代	
ＳＫ18	ｂ20	不定形		０．１	縄文時代前期？	
ＳＫ19	ｂ20	不定形		０．１	１６世紀代	
ＳＫ20	ｂ21	不定形		０．３	中世	
ＳＫ21	ｂ21	円形	直径１．２	０．１	中世	
ＳＫ22	ａ21	楕円形？		０．２	１６世紀代	
ＳＫ23	ａ21	不明		０．１	縄文時代前期？	
ＳＫ24	ａ21	円形	直径１．１	０．１	中世	
ＳＫ25	ａ21	不明		０．１	中世	
ＳＫ26	ｂ22	不明		０．２	縄文時代前期？	
ＳＫ27	ｂ23	円形	０．９×０．８	０．３	中世	
ＳＺ28	ａｂ26	不定形		０．３		

第２表　土坑他一覧表

遺構名	小地区	上面規模（m）	深さ(m)	方向	時期	備考
ＳＤ３	ａｂ10	幅１．３～１．７	０．５	N12° W	中世後期	
ＳＤ４	ａｂ11	幅０．７～１．２	０．３	N12° W	１６世紀代	
ＳＲ12	ａｂ17	幅２．５～４．０	０．７		１６世紀代	
ＳＤ39	ａｂ５	幅０．２～０．８	０．２	N12° W		

第３表　溝一覧表

＜遺構一覧表凡例＞

遺構名：表示記号は「例言」に示した。なお、SZ＝不明遺構、SR＝流路である。

上面規模・深さ：数値で表したものは10cm単位である。

方向：特にＳＤについては、おおよその中心線で測っている。

報告書番号	登録番号	器種	出土位置遺構	法量（cm）	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
1	014-04	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文ＲＬ、内面ナデ。	やや粗	並	5YR7/6橙 5YR6/4にぶい橙	口縁小片	
2	012-08	縄文土器	ＳＫ１		外面と口縁端部、内面肥厚部に縄文ＬＲ。	やや密	並	7.5YR8/6浅黄橙	口縁小片	
3	014-02	縄文土器	ＳＫ１		外面ナデ、口縁端部刻み、内面肥厚部に縄文ＬＲ。	やや粗	並	7.5YR6/4にぶい橙	口縁小片	
4	013-08	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文ＲＬのち突帯貼りつけ。突帯上を半裁竹管による押し引き。口縁端部刻み、内面ナデ。	やや密	並	7.5YR4/1褐灰 10YR7/4にぶい黄橙	口縁小片	
5	012-01	縄文土器	ＳＫ１		外面と内面肥厚部に縄文ＬＲ。外面突帯貼りつけ。突帯上を二枚貝による刻み。口縁端部刻み。	やや粗	並	7.5YR7/4にぶい橙	口縁小片	
6	012-02	縄文土器	ＳＫ１		外面と内面肥厚部に縄文ＬＲ。のち外面突帯貼りつけ。突帯上を刻み。口縁端部刻み。	やや粗	並	7.5YR7/4にぶい橙	口縁小片	
7	014-06	縄文土器	ＳＫ１		外面と口縁端部、内面肥厚部に縄文ＲＬ。のち外面突帯貼りつけ、半裁竹管で刻む。	やや粗	並	7.5YR5/6明褐	口縁小片	
8	014-05	縄文土器	ＳＫ１		外面と内面口唇直下に突帯貼りつけ。突帯の上下端を刻む。外面刻み。内面肥厚部に縄文ＲＬ。	やや密	並	7.5YR5/6明褐	口縁小片	
9	012-05	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文ＲＬのち突帯貼りつけ。突帯の上下端を刻む。口縁端部刻み。内面ナデ。	やや密	並	7.5YR7/4にぶい橙	口縁小片	
10	014-01	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文ＲＬのち突帯貼りつけ。突帯の上下端を刻む。屈曲部はヘラ状刻み。内面ナデ。	やや粗	並	5YR6/4にぶい橙 10YR7/4にぶい黄橙	口縁小片	
11	012-07	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文ＬＲのち屈曲部に突帯貼りつけ。突帯上は半裁竹管による刺突か。	やや密	並	10YR6/1褐灰	口縁小片	
12	010-02	縄文土器	ＳＫ１		外面と内面口唇直下に突帯貼りつけ。突帯上を半裁竹管による密な刻み。	やや密	並	10YR6/2灰黄褐	口縁小片	
13	014-08	縄文土器	ＳＫ１		外面ナデのち突帯貼りつけ。突帯上と口縁端部を刻む。	やや密	並	5YR6/4にぶい橙 10YR6/2灰黄褐	口縁小片	
14	013-03	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文のち口唇下に二条の半裁竹管によるナデ引き。	やや粗	並	10YR6/2灰黄褐	口縁小片	
15	013-02	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文ＲＬＲのち突帯貼りつけ。突帯上と口縁端部を刻む。内面肥厚部にも複節ＲＬＲ。	やや粗	並	10YR7/3にぶい黄橙	口縁小片	
16	012-04	縄文土器	ＳＫ１		外面平行沈線。内面ナデ。	やや粗	並	10YR8/3浅黄橙	口縁小片	
17	011-01	縄文土器	ＳＫ１		内外面ナデ。波状口縁と思われる波頂部端部を指頭押圧。内面に爪痕。	やや粗	並	10YR6/3にぶい黄橙	口縁小片	
18	010-08	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文。内面に爪痕。	やや粗	並	10YR6/2灰黄褐	体部小片	
19	010-04	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文ＬＲ。内面に爪痕。	やや粗	並	7.5YR5/3にぶい褐	体部小片	
20	012-03	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文のち突帯貼りつけ。突帯上刻みか。内面ナデ。	やや粗	並	10YR7/3にぶい黄橙 10YR3/2黒褐	体部小片	
21	012-06	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文ＬＲのち突帯貼りつけ。突帯上刻み。内面ナデ。	やや粗	並	5YR6/6橙 5YR4/1褐灰	体部小片	

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
22	013-07	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文ＲＬのち突帯貼りつけ。突帯を山形に刻む。内面ナデ。	やや粗	並	2.5YR5/6明赤褐 7.5YR6/4にぶい橙	体部小片	
23	013-01	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文ＬＲのち突帯貼りつけ。内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR7/3にぶい橙 10YR8/3浅黄橙	体部小片	
24	010-07	縄文土器	ＳＫ１		外面ナデのち突帯貼りつけ。突帯上刻み。内面ナデ。	やや粗	並	10YR6/2灰黄褐	体部小片	
25	013-04	縄文土器	ＳＫ１		外面ナデのち突帯貼りつけ。突帯上を半裁竹管による押し引き。内面ナデ。	やや密	並	7.5YR7/6橙	体部小片	
26	014-03	縄文土器	ＳＫ１		外面縄文ＬＲのち半裁竹管による押し引き。内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR6/4にぶい橙 10YR7/4にぶい黄橙	体部小片	
27	011-03	縄文土器	ＳＫ１		内外面ナデ。	やや粗	並	10YR6/3にぶい黄橙 2.5YR6/6橙。	体部小片	内面に赤色顔料付着
28	014-07	縄文土器	ＳＫ１	底径(9.1)	外面オサエ。内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR6/4にぶい橙 10YR4/1褐灰	底部1/3	
29	009-04	縄文土器	ＳＤ１２		外面縄文ＬＲ。内面ナデ。	粗	並	10YR7/4にぶい黄橙	口縁小片	
30	009-02	縄文土器	ａ２２ 下層検出		外面と内面肥厚部に縄文ＬＲ。外面に突帯貼りつけ。突帯上刻み。口縁端部刻み。	やや密	並	5YR5/3にぶい赤褐	口縁小片	
31	009-01	縄文土器	ｂ２３ 下層検出		外面と内面肥厚部縄文ＬＲ。のち外面突帯貼り付け。半裁竹管で刻む。口縁端部刻み。	やや粗	並	7.5YR5/3にぶい褐 7.5YR7/4にぶい橙	口縁小片	
32	010-01	縄文土器	ａ２０ Ｐ１		外面と内面肥厚部縄文。のち外面突帯貼り付け。内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR4/1褐灰	口縁小片	
33	007-01	縄文土器	ｂ２３ 下層検出		外面縄文ＬＲのち突帯貼り付け。半裁竹管で刻む。口縁端部刻み。	やや粗	並	7.5YR7/2明褐灰	口縁小片	
34	007-07	縄文土器	ｂ２２		外面口縁端部下縄文ＬＲ。のち突帯貼り付け、半裁竹管で刻む。内面ナデ。	やや粗	並	10YR5/1褐灰	口縁小片	
35	008-02	縄文土器	ａ２２ 下層検出		外面口縁端部下縄文のち浮文。突帯貼り付け、突帯上に縄文か。内面オサエ、ナデ。	やや粗	並	10YR7/4にぶい黄橙	口縁小片	
36	008-05	縄文土器	ｂ２３ 下層検出		外面ナデのち突帯貼り付け、半裁竹管で刻む。内面ナデ。	やや粗	並	10YR6/3にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	口縁小片	
37	009-03	縄文土器	ａ２１ 下層検出		外面ナデのち突帯貼り付け。内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR5/6明褐	口縁小片	
38	008-06	縄文土器	ｂ２２ 下層検出		外面半裁竹管による押し引きか。のち浮文貼り付け。内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR5/6明褐	口縁小片	
39	008-01	縄文土器	ｂ２２ 下層検出		外面三角陰刻、突帯貼り付けのち半裁竹管による押し引き。口縁端部に浮文。内面工具ナデ。	やや粗	並	7.5YR6/3にぶい褐	口縁小片	
40	007-03	縄文土器	ｂ２２		外面羽状縄文。内面ナデ。	やや粗	並	2.5Y5/2暗灰黄 10YR7/2にぶい黄橙	体部小片	
41	010-06	縄文土器	ＳＫ１６		外面縄文のち半裁竹管によるなで引き。内面ナデ、爪痕。	やや密	並	7.5YR7/4にぶい橙	体部小片	
42	007-02	縄文土器	ｂ２２		外面縄文、半裁竹管によるなで引き。内面ナデ、爪痕。	やや密	並	10YR8/3浅黄橙	体部小片	
43	010-03	縄文土器	ＳＫ１６		外面羽状縄文。内面ナデ。	やや粗	並	10YR6/2灰黄褐	体部小片	
44	007-08	縄文土器	下層検出		外面縄文のち突帯貼り付け。半裁竹管による押し引き。内面ナデ。	やや粗	並	10YR8/2灰白 10YR6/2灰黄褐	体部小片	
45	007-06	縄文土器	排土		外面爪形文のち突帯貼り付け。内面オサエ、ナデ。	やや粗	並	7.5YR7/4にぶい橙 10YR7/3にぶい黄橙	体部小片	
46	007-04	縄文土器	下層検出		外面縄文ＲＬのち突帯貼り付け。内面オサエ、ナデ。	やや粗	並	7.5YR5/3にぶい褐 5YR6/4にぶい橙	体部小片	
47	011-02	縄文土器	ＳＫ１６		外面突帯貼り付け。半裁竹管による押し引き。刻み。内面ナデ。	やや密	並	7.5YR6/3にぶい褐	体部小片	
48	010-05	縄文土器	ＳＫ１６		外面爪形文。内面ナデ。	やや粗	並	10YR7/2にぶい黄橙	体部小片	
49	007-05	縄文土器	ａ２２ 下層検出		外面指頭圧痕。内面オサエ、ナデ。	やや粗	並	2.5Y4/1黄灰 10YR7/3にぶい黄橙	体部小片	
50	008-04	縄文土器	ａ２２ 下層検出	底径(12.1)	外面縄文ＬＲ。内面オサエ、ナデ。	やや粗	並	5YR6/4にぶい橙	底部1/9	
51	008-03	縄文土器	ＳＫ２２	底径(8.9)	外面縄文ＬＲ。底部外周指圧痕。	やや密	並	7.5YR6/4にぶい橙	底部1/4	
86	001-02	土師器　皿	ｂ７ Ｐ１	口径7.2～7.9 器高0.3～1.5	内外面ナデ。底部オサエ、ナデ。	密	並	10YR8/2浅黄橙	完形	
87	001-03	土師器　皿	ｂ７ Ｐ１	口径(7.7) 器高1.3	内外面ナデ。底部オサエ、ナデ。	やや密	並	10YR8/2浅黄橙	1/3	
88	001-04	土師器　皿	ａ７ Ｐ６	口径(7.8)	内外面ナデ。底部オサエ、ナデ。	やや密	並	5Y2/1黒	1/2	
89	001-05	土師器　皿	ｂ１９ Ｐ１４	口径(7.5)	内外面ナデ。底部オサエ、ナデ。	密	並	10YR8/3浅黄橙	1/4	
90	001-09	土師器　皿	ａ７ Ｐ７	口径(8.3) 器高1.7	内外面ナデ。	やや密	並	7.5YR8/3浅黄橙	1/5	
91	001-06	土師器　皿	ｂ２０ Ｐ４	口径(8.3) 器高2.05	外面オサエ。内面ナデ。	密	並	10YR8/3浅黄橙	1/4	
92	001-07	土師器　皿	ｂ１９ Ｐ１４	口径(8.3)	外面オサエ、ナデ。内面ナデ。	密	並	10YR6/2灰黄褐	1/4	
93	001-08	土師器　皿	ｂ１９ Ｐ１０	口径(8.5) 器高1.8	外面オサエ。内面ナデ。	やや密	並	10YR8/3浅黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	1/4	
94	001-01	土師器　皿	ｂ２１ Ｐ４	口径(8.7) 器高1.4	内外面横ナデ。底部オサエ、ナデ。	密	並	7.5YR8/3浅黄橙	1/4	
95	002-09	土師器　皿	ｂ２０ Ｐ７		外面オサエ、ナデ。内面ナデ。	密	良	10YR7/3にぶい黄橙	小片	
96	002-10	青磁　碗	ｂ１９ Ｐ９		内外面に施釉。内面陰刻。	密	良	7.5Y7/1灰白 釉)7.5Y6/2灰オリーブ	口縁小片	
97	002-04	青磁　碗	ｂ２０ Ｐ３	口径(14.7)	内外面に施釉。	密	良	10Y7/1灰白 釉)10Y5/2オリーブ灰	口縁1/6	
98	002-05	土師器　鍋	ａ９ Ｐ５		内外面横ナデ。	やや密	並	7.5YR5/3にぶい褐	口縁小片	
99	002-08	土師器　鍋	ａ７ Ｐ２		内外面横ナデ。	やや密	並	7.5YR7/3にぶい橙	口縁小片	

第４表　土器観察表（１）

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
100	002-07	土師器 鍋	b19 P9		内外面横ナデ。	やや密	並	7.5YR5/1褐灰	口縁小片	
101	002-01	土師器 鍋	b19 P9	口径(29.7)	内外面横ナデ。外面ハケメ。	やや密	並	7.5YR7/2明褐灰 7.5YR5/2灰褐	口縁1/7	
102	002-02	土師器 鍋	a19 P1	口径(29.6)	内外面横ナデ。	やや密	並	7.5YR5/3にぶい褐 10YR8/2灰白	口縁1/9	
103	002-06	土師器 羽釜	a20 P8		内外面横ナデ。	やや密	並	2.5YR7/4にぶい橙	口縁小片	
104	002-03	土師器 茶釜	b19 P15	口径(13.6)	内外面横ナデ。外面オサエ。	密	良	7.5Y6/2灰褐	口縁1/5	
105	006-01	土師器 皿	表土	口径(12.5) 器高2.6	内外面横ナデ。	やや密	並	2.5Y8/3淡黄	2/3	
106	004-04	青磁 碗	SD12	高台径(5.0)	内外面施釉。	密	良	10Y7/1灰白 釉)10Y6/2オリーブ灰	底部1/3	
107	004-02	土師器 鍋	SD12	口径(19.5)	口縁内外面横ナデ。外面オサエ、ケズリ。内面工具ナデ、ケズリ。	やや密	並	2.5YR6/4にぶい橙 7.5YR8/3浅黄橙	1/6	
108	004-01	土師器 鍋	SD12	口径(21.0)	口縁内外面横ナデ。外面オサエ、ナデ、ケズリ。内面工具ナデ、ケズリ。	密	並	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR8/3浅黄橙	1/3	
109	006-02	土師器 鍋	SD12	口径(20.0)	口縁内外面横ナデ。外面ハケメ、ケズリ。内面ナデ、ケズリ。	密	並	10YR8/4浅黄橙	1/3	
110	004-03	土師器 鍋	SD12	口径(22.6)	口縁内外面横ナデ。外面ハケメ、オサエ、ナデ。内面ナデ。	密	並	7.5YR8/3浅黄橙	1/6	
111	003-02	土師器 鍋	SD12	口径(36.3)	口縁内外面横ナデ。外面ハケメ、内面ナデ。	密	並	10YR7/3にぶい黄橙		
112	005-02	土師器 鍋	SD12	口径(31.4)	口縁内外面横ナデ。外面ハケメ、内面ナデ。	密	並	10YR7/3にぶい黄橙 7.5YR6/2灰褐	1/8	
113	005-03	土師器 鍋	SD12	口径(30.5)	口縁内外面横ナデ。	密	並	5YR7/3にぶい橙 5YR5/2灰褐	口縁1/10	
114	003-03	土師器 茶釜	SD12	口径(27.6)	口縁内外面横ナデ。外面ハケメ、内面ハケのちケズリ。	密	並	7.5YR8/3浅黄橙	口縁1/10	
115	005-01	土師器 茶釜	SD12	口径(25.1)	口縁内外面横ナデ。内外面ハケメ。	密	並	7.5Y8/3浅黄橙 5YR7/6橙	1/5	
116	003-01	土師器 甕	SD12	口径(36.6)	口縁内外面横ナデ。外面ハケメ、内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR7/3にぶい橙	1/6	

第5表 土器観察表（2）

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	石材	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
52	015-01	石鏃	SK1	サヌカイト	完形	2.5	1.6	0.3	0.5	
53	019-01	石鏃	SK1	チャート	脚部欠	2.6	(1.4)	0.4	(0.9)	
54	018-02	石鏃	SK1	サヌカイト	脚部一方欠	2.1	(1.4)	(0.3)	(0.6)	
55	022-02	石鏃	SK1	サヌカイト	先端脚一欠	(1.6)	(1.6)	0.3	(0.8)	
56	021-02	石鏃	SK1	サヌカイト	先端部欠	(1.6)	1.7	0.4	(0.9)	
57	021-01	石鏃	SK1	サヌカイト	先端部欠	(1.8)	2.1	0.4	(1.5)	
58	018-01	石鏃	SK1	サヌカイト	先端部欠	(2.1)	1.8	0.3	(0.6)	
59	015-02	石鏃	SK1	サヌカイト	脚部一方欠	2.6	(1.8)	0.4	(0.8)	
60	022-01	石鏃	SK1	サヌカイト	先端脚一欠	(2.2)	(2.0)	0.3	(1.0)	
61	020-01	石鏃	SK1	サヌカイト	脚部一方欠	2.0	(1.6)	0.3	(0.7)	
62	020-02	石鏃	SK1	サヌカイト	先端部欠	(1.4)	1.6	0.3	(0.3)	
63	017-01	石鏃	SK1	サヌカイト	完形	1.4	1.8	0.3	0.3	
64	017-02	石鏃	SK1	サヌカイト	完形	1.3	1.8	0.3	0.4	
65	024-02	石鏃	SK1	チャート	先端脚一欠	2.5	(1.8)	0.5	(2.0)	
66	024-01	石鏃	SK1	チャート	完形	3.6	2.6	1.2	8.3	
67	016-02	石鏃	SK1	サヌカイト	完形	4.2	2.1	0.7	5.8	
68	019-02	石鏃	SK1	サヌカイト	完形	2.4	1.4	0.3	1.0	
69	023-02	石錐	SK1	サヌカイト	先端部欠	(2.3)	0.8	0.4	(0.4)	
70	023-01	石錐	SK1	サヌカイト	基部欠	(3.0)	0.9	0.3	(0.6)	
71	016-01	石匙	SK1	サヌカイト	先端一方欠	3.6	(3.5)	0.5	(4.7)	
72	025-01	打欠き石錘	SK1	砂岩	完形	4.0	2.9	0.7	13.3	
73	025-02	打欠き石錘	SK1	砂岩	完形	4.1	3.2	1.6	32.7	
74	026-01	磨製石斧	SK1	砂岩	約2／3欠	(8.0)	(5.2)	(3.1)	(142.1)	
75	030-02	石鏃	b21検出	サヌカイト	脚部一方欠	2.1	1.3	0.3	0.5	
76	027-01	石鏃	b15検出	サヌカイト	先端部欠	(1.2)	1.1	0.2	(0.2)	
77	030-01	石錐	b21P4	サヌカイト	両端部欠	(3.4)	0.9	0.6	(1.2)	
78	031-01	掻器	検出	チャート	完形	3.7	3.5	1.6	23.4	
79	032-01	掻器	SK13	サヌカイト	完形	2.6	2.4	0.3	2.9	
80	029-01	切目石錘	SD12	砂岩片岩	完形	4.1	3.2	0.9	17.6	
81	029-02	切目石錘	SD12	砂岩	完形	5.9	2.5	1.7	33.4	
82	028-01	打欠き石錘	a22検出	石英片岩	完形	5.2	2.4	0.9	16.1	
83	028-02	打欠き石錘	b23検出	絹雲母石英片岩	完形	6.0	3.1	1.2	29.3	
84	033-01	石棒？	SD12	砂岩	一部残	(10.4)	(8.3)	(7.1)	(797.4)	
85	034-01	サヌカイト原石	SD12	サヌカイト		6.2	8.0	5.3	309.2	

第6表 石器観察表

＜遺物観察表凡例＞
報告書番号：図版に対応する番号である。
登録No.：実測図作成番号である。
器種：陶器・土師器などの区別と、見た目の器種を表記した。
法量：わかる法量を表記した。カッコ内は推定値である。
成形・技法の特徴：おおよそを表記した。
胎土：密・やや密・やや粗・粗の4段階で表記した。
焼成：良・並・不良の3段階で表記した
色調：『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編 9版 1989）を基準にしている。
残存状況：数値は分数で、数値で表せないものは「小片」とした。石器は言葉で表した。

Ⅳ　アカリ遺跡発掘調査の成果

1　調査の方法

本遺跡の調査面積は1,205㎡である。掘削は表土については重機掘削を行った。それ以外は人力による掘削である。

調査区は幅約５ｍ、全長約88ｍの南北に細長い水路予定部分と、東西約56ｍ、南北平均約20ｍの削平予定部分である。小地区設定は４ｍグリッドで、北から南に－４～23、西から東にａ～ｏである。この設定は、国土座標や縁通庵遺跡の設定とは無関係である。

遺構図面・土層図面については縮尺1/20で作成した。また、重要性が認められた遺構については縮尺1/10で作成している。

2　層序

本遺跡の現状は畑地および水田である。調査区の基本層序は次のとおりである。

Ⅰ　灰褐色土（表土）

Ⅱ　黒褐色土

Ⅲ　灰黄褐色土（検出面）

Ⅱは遺物包含層に相当するが、調査区の大半では認められず、表土直下がⅢの検出面となっていた。Ⅰ上面からⅢ上面までは20㎝内外である。Ⅲでは縄文時代から中世の遺構を検出したことから、縁通庵遺跡と同様に削平等を受けていると考えられる。Ⅲ以下は砂層になっており、遺構の存在や遺物の包含は一切認められなかった。

3　遺構

検出した遺構は、縄文時代から近世に及ぶが、その多くは弥生時代と中世のものである。

(1)　縄文時代の遺構

縄文時代は３基の土坑を確認した。検出時から縄文時代前期の土器と、石器が多く出土しており、いずれも前期の遺構と思われる。

土坑ＳＫ67（第13図）　調査区の北端、ｂ-4・ｃ-4に位置する。平面形はＳＤ15に切られるため不明であるが、長軸約1.8ｍの楕円形とも考えられる。検出面からの深さは約0.2ｍである。出土遺物は縄文土器片と石器剝片である。土器の時期は縄文時代前期後半と思われる。石器は出土していないが、おびただしい数のサヌカイト剝片が出土している。

土坑ＳＫ68（第13図）　ｃ-3に位置する。平面形は長軸約1.4ｍ、短軸約1.0ｍの楕円形で、検出面からの深さは約0.1ｍである。出土遺物は石鏃とサヌカイト剝片である。

土坑ＳＫ69（第13図）　ｃ-2に位置する。ＳＤ15に切られ、調査区外へ出るため平面形は不明である。検出面からの深さは約0.2ｍである。出土遺物は縄文土器と石器である。

(2)　弥生時代の遺構

今回の調査では最も遺構に恵まれた時代である。竪穴住居11棟、掘立柱建物１棟、方形周溝墓１基、土坑３基を確認した。出土遺物から、竪穴住居、掘立柱建物の時期は中期後半であると考えられる。

竪穴住居ＳＨ19（第14図）　ｃ17・18に位置する。

平面形は長辺約4.4ｍ、短辺約3.5ｍの隅丸方形で、検出面からの深さは約0.2ｍである。床面には柱穴を４つ確認した。東側に貯蔵穴とも思われる土坑があるが、深さ約0.2ｍとやや浅い。中央にピットがあるが、焼土や炭化物は出土しなかった。壁周溝は南西隅以外で認められる。貼り床も確認できた。遺物出土状況は南に偏在する傾向が見られる。南東の主柱穴付近に甕が１個体、南東と南西の主柱穴の間に１個、南西と北西の主柱穴の間に２個の大型で比較的偏平な石が出土している。

竪穴住居ＳＨ35（第14図）　ｃ20・21を中心に位置する。平面形は長辺約3.7ｍ、短辺約3.1ｍの方形で、検出面からの深さは約0.1ｍである。床面には柱穴と思われるものを２つ確認した。中央と東側に浅い土坑を確認している。２か所で焼土を確認したが、いずれも床面から浮いた状態であった。壁周溝はほぼ全周する。貼り床も確認できた。遺物は北西隅に広口壺が１個体出土している。石斧は２個体出土した。遺物の出土位置は、東西の壁際の北方向に偏っているように見える。

竪穴住居ＳＨ41（第15図）　ｅ19・20を中心に位置する。平面形は長辺5.4m、短辺4.5mの隅丸方形で、検出面からの深さは約0.2mである。主柱穴を４つ確認した。南東壁には貯蔵穴を確認した。貯蔵穴は直径約0.8m、床面からの深さは約0.25mである。周囲に土手状の高まりを巡らせている。この土手状の高まりをＳＨ42の壁周溝が切っていることから、前後関係が判明した。壁周溝はほぼ全周する。貼り床も確認した。ＳＨ42に切られるため、遺物出土状況の傾向はつかめなかった。

竪穴住居ＳＨ42（第15図）　ｅ19・20を中心に位置する。平面形は長辺4.4m、短辺4.2mの方形で、検出面からの深さは約0.2mである。主柱穴を４つ確認した。北側に貯蔵穴と思われる土坑を確認した。壁周溝はほぼ全周し、貼り床も確認している。ＳＨ70に切られるため、遺物出土状況の傾向はつかめなかった。ＳＨ70の床面で被熱して赤化した壁をもつ不定型のピットを検出した。炉跡だと思われるが、壁周溝との位置関係から、ＳＨ42のものだと思われる。

竪穴住居ＳＨ70（第15図）　ｅ19・20に位置する。平面形は長辺約3.4m、短辺約3.0mの方形で、検出面からの深さは約0.2mである。主柱穴を４つ確認した。壁周溝は北側以外で確認できた。壁周溝の切り合いからＳＨ42より新しい。遺物出土状況には顕著な傾向は認められない。

竪穴住居ＳＨ43（第15図）　一部分の検出のため、平面形は片方の一辺が4.6mの方形であろうと推定される。検出面からの深さは約５㎝で、遺物もほとんどない。切り合いから、４棟の内で最も古いと思われる。

竪穴住居ＳＨ47（第16図）　ｆ22・23を中心に位置する。平面形は長辺約4.2m、短辺約2.8mの方形だと思われる。検出面からの深さは約0.1mである。いくつかのピットは検出できたものの、柱穴と想定するには至らなかった。壁周溝は南側に認められる。ＳＨ71との切り合いは不明であるため、貯蔵穴かとも思われる南東隅の土坑はどちらのものか不明である。

竪穴住居ＳＨ71（第16図）　ｆ23・ｇ23を中心に位置する。平面形は長辺約3.8m、短辺約2.6mの方形だと思われる。検出面からの深さは約0.1mである。柱穴を想定することはできなかった。壁周溝は北側に認められた。

竪穴住居ＳＨ48（第16図）　ｅ23を中心に位置する。調査区外へ延びるため定かではないが、平面形は片方の一辺が約4.1mの方形だと思われる。検出面からの深さは約0.2mである。柱穴は想定できなかった。壁周溝は部分的にとぎれるものの、全周にわたって認められる。

竪穴住居ＳＨ59（第13図）　ｈ23を中心に位置する。西壁と壁周溝の一部を確認したのみで、大部分が調査区外に出ている。平面形は方形であるが、規模は不明である。検出面からの深さは約0.1mである。

竪穴住居ＳＨ60（第13図）　ＳＨ59の壁周溝の内側に確認した壁周溝の一部のみである。ＳＨ59と建て替えの関係にあると思われる。

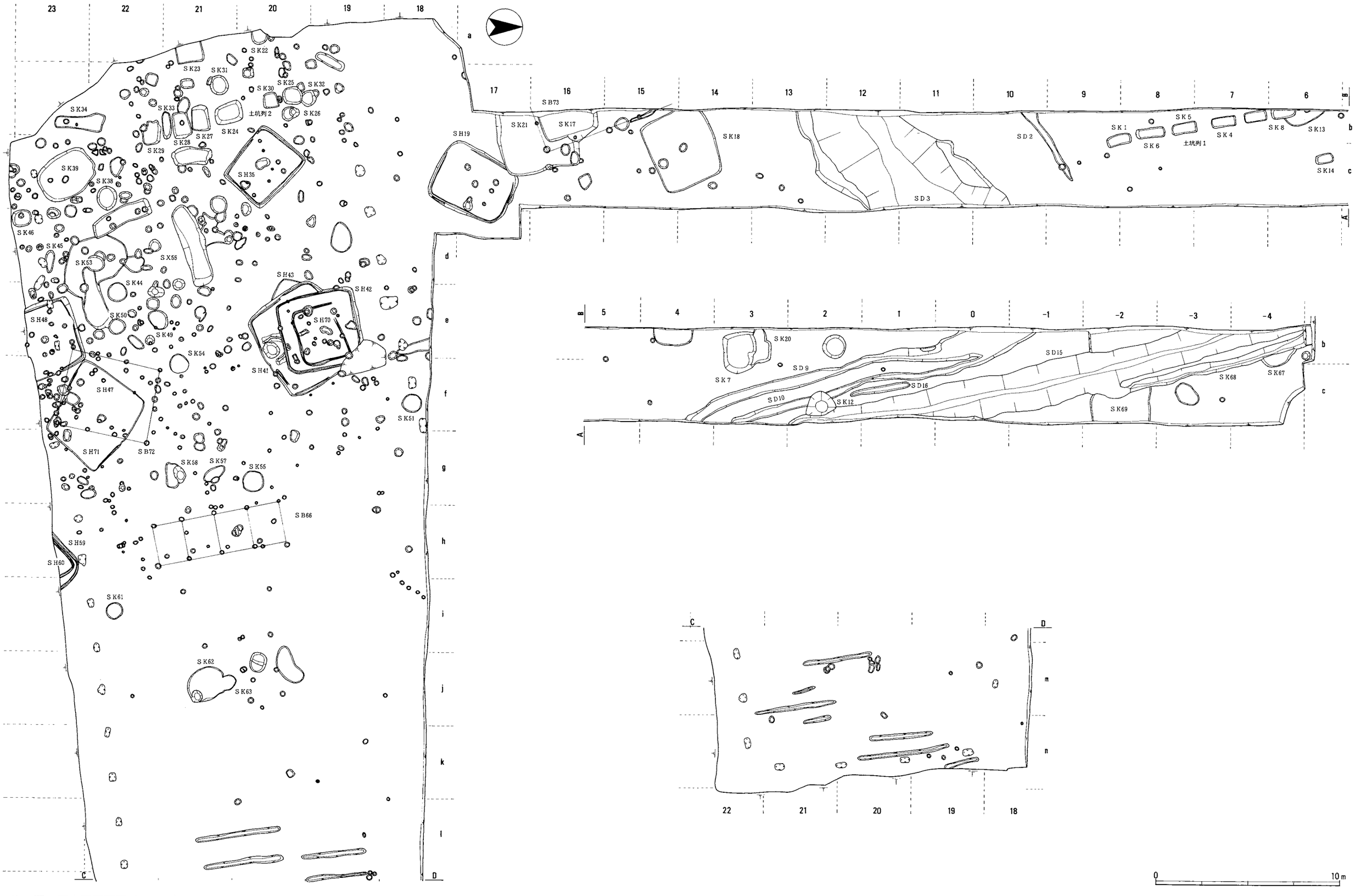
掘立柱建物ＳＢ72（第17図）　ｆ22・23を中心に位置する。梁行２間（約4.0m）×桁行３間（約5.0m）以上の規模だと思われる。南北棟で、棟方向はＮ４°Ｅである。北東隅の柱穴から広口壺と高杯が１個体ずつ出土している。ＳＨ47・ＳＨ71・ＳＨ48と切り合うが、出土遺物はほとんど同時期であり、前後関係は不明である。

方形周溝墓ＳＸ56（第17図）　ｄ21・22を中心に位置する。墳丘部は削平され、周溝のみである。東の周溝は検出できなかった。北・南・西の周溝はお互いに途切れる。規模は、周溝の芯々間で南北約6.4m、内側の上端で南北約5.0mである。北周溝は、幅約1.4m、深さ約0.2m、南周溝は幅約0.6m～約1.4m、深さ約0.2m、西周溝は幅約0.9m、深さ約0.1mである。出土遺物はほとんど無く、時期は不明である。

(3)　中世の遺構

掘立柱建物２棟、いくつかの土坑、溝がある。その他多数のピットがある。時期の推定は、伊藤裕偉氏の南伊勢系土師器の編年観と、藤澤良祐氏の山茶椀の編年観[③]によっている

掘立柱建物ＳＢ73（第18図）　ｂ15・16を中心に位置する。調査区外へ延びるため定かでないが、１間（約1.5m）以上×３間（約5.4m）以上の規模である。棟方向はＮ25°Ｗである。南東隅土坑ＳＫ17を伴っている。ＳＫ17出土遺物から、13世紀前半までのものと思われる。



第13図　調査区平面図（1：200）

掘立柱建物ＳＢ66（第18図）　ｈ20～22に位置する。梁行１間（約2.4m）、桁行４間（約7.2m）の規模である。南北棟で、棟方向はN19°Wである。出土遺物から、15世紀後半のものと思われる。

土坑ＳＫ17（第18図）　ｂ16に位置する。ＳＢ73に伴う南東隅土坑である。平面形は、約3.1m×約1.5m以上の隅丸方形である。検出面からの深さは約0.7mである。出土遺物は渥美型第２形式（尾張型第５型式並行）の山茶椀と人頭大までの石である。

土坑ＳＫ21（第18図）　ｂ16・17を中心に位置する。ＳＫ17より新しい土坑である。平面形は、約4.4m×約3.6m以上の隅丸方形だと思われる。検出面からの深さは約0.3mである。出土遺物は渥美型第２形式の山茶椀であり、ＳＢ73との時期差はほとんど無いようである。

溝ＳＤ３（第13図）　ｃ11・12を中心に位置する。幅約5.5m、深さ約1.7mで、約11mにわたって検出した。断面はＶ字形である。方向はN40°Eである。出土遺物は渥美型第２形式の山茶椀が出土しており、13世紀前半までに埋没したと考えられる。

溝ＳＤ９（第13図）　ｃ２～４に位置する。幅約0.3m～約0.7mだが、ｂ０でＳＤ10と一緒になる。深さは約0.1m～約0.2mである。方向はN24°Wである。南伊勢系第４段階に相当する土師器鍋が出土しており、16世紀代に埋没した溝であろう。

溝ＳＤ10（第13図）　幅約0.3m～約0.5mで、深さは約0.1mである。方向はN24°Wである。ＳＤ９同様に16世紀代に埋没した溝だと考えられる。

溝ＳＤ15（第13図）　幅約2.0m～約2.4m、深さは約0.9m～約1.0mである。断面はＶ字形をなすが、一部W字形になる。方向はN20°Wである。ＳＤ９・10と同時期だと考えられるが、その形状からは堀としての機能が想定できる。

(4)　近世の遺構

土坑列が２か所、その他いくつかの単独の土坑がある。

土坑列１（第13図）　ｂ６～９に位置する。７つの土坑で構成するが、調査区外へ出るために全体数は明らかでない。２つの土坑は調査区外へ一部出ており不明だが、残る５つの平面形は約1.2m～約1.6m×約0.5m～約0.6mの方形で、検出面からの深さは約0.1m～約0.2mである。列は延長11m以上になると思われ、方向はN15°Wである。近世陶磁器が出土している。土坑の壁がほぼ垂直に落ち、床が平らであることや、その配置から、近世墓の可能性が考えられる。

土坑列２（第13図）　ｂ20～22に位置する。直線的に並ぶ７つの土坑で構成する。平面形は隅丸方形を基本とするが、土坑列１ほどの規格性はなく、幅狭い長方形から正方形まで多様である。規模は、南北約0.4m～約1.6m×東西約0.9m～約1.5mで、検出面からの深さは約0.1m～約0.3mである。列延長は約9.8mで、方向はN24°Wである。壁が垂直に落ち、床が平らな土坑が多いこと、配置から近世墓の可能性がある。

土坑ＳＫ７・ＳＫ20（第13図）　ｂ３に位置する。ＳＫ７は、約2.2m×約1.7mのやや崩れた方形で、検出面からの深さは約0.2mである。ＳＫ20はＳＫ７に切られ、全体形は不明であるが、約1.9m×約0.8m以上の不定形の土坑である。ともに近世陶器が出土している。

土坑ＳＫ11（第13図）　ｂ２に位置する。直径約1.2mの円形土坑である。外縁に幅約８㎝～約20㎝の白色粘土帯が巡り、内側は直径約1.0mの円形土坑となっている。検出面からの深さは約0.3mである。断面から、桶状の容器が入っていたものと思われ、桶棺墓とみてよいだろう。

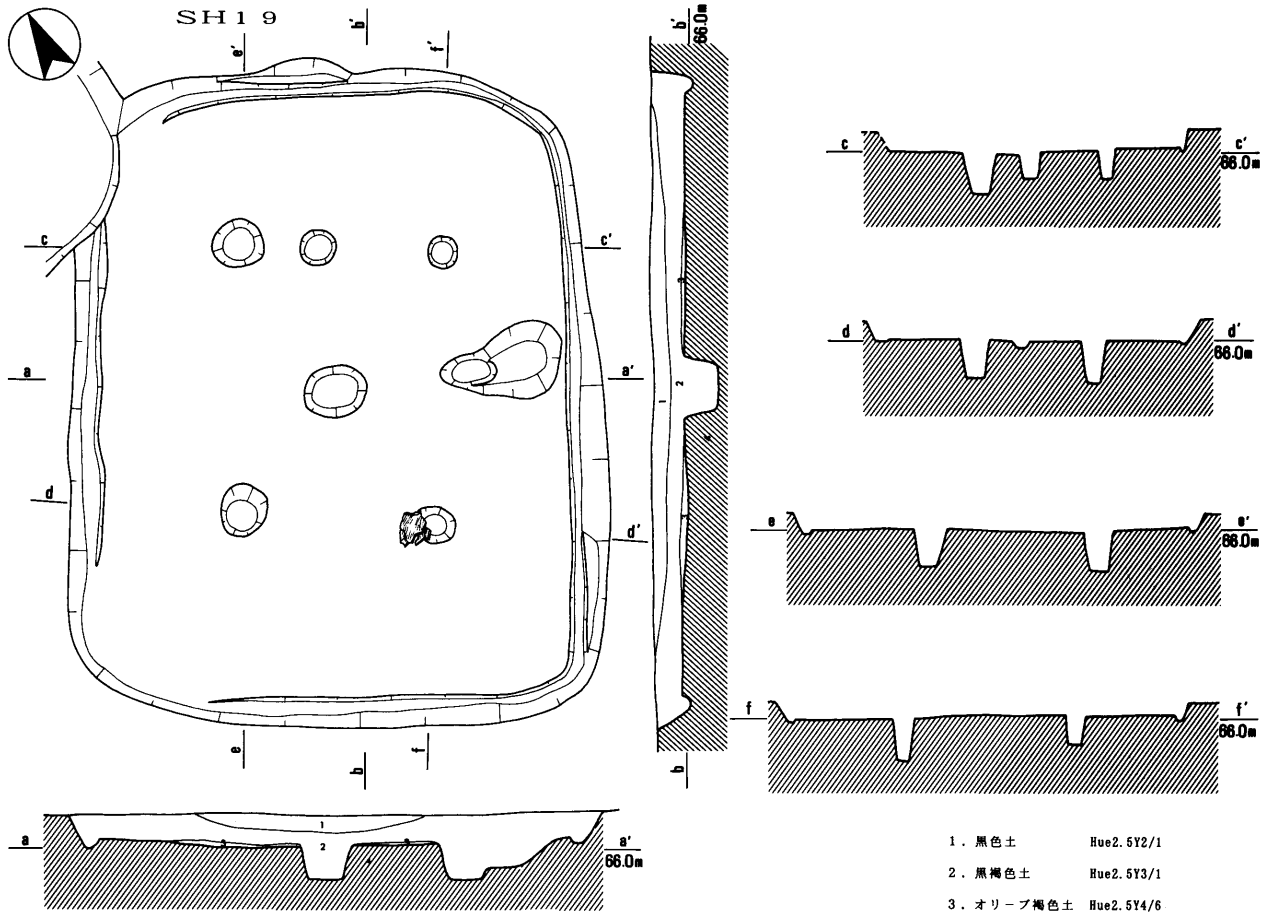
土坑ＳＫ14（第13図）　ｃ６に位置する。約1.0m×約0.5mの隅丸方形の土坑である。検出面からの深さは約0.1mである。土坑列１に近く、方向もほぼ同じこと、遺物・埋土の状況から、土坑列１と同時期の近世墓である可能性が高い。

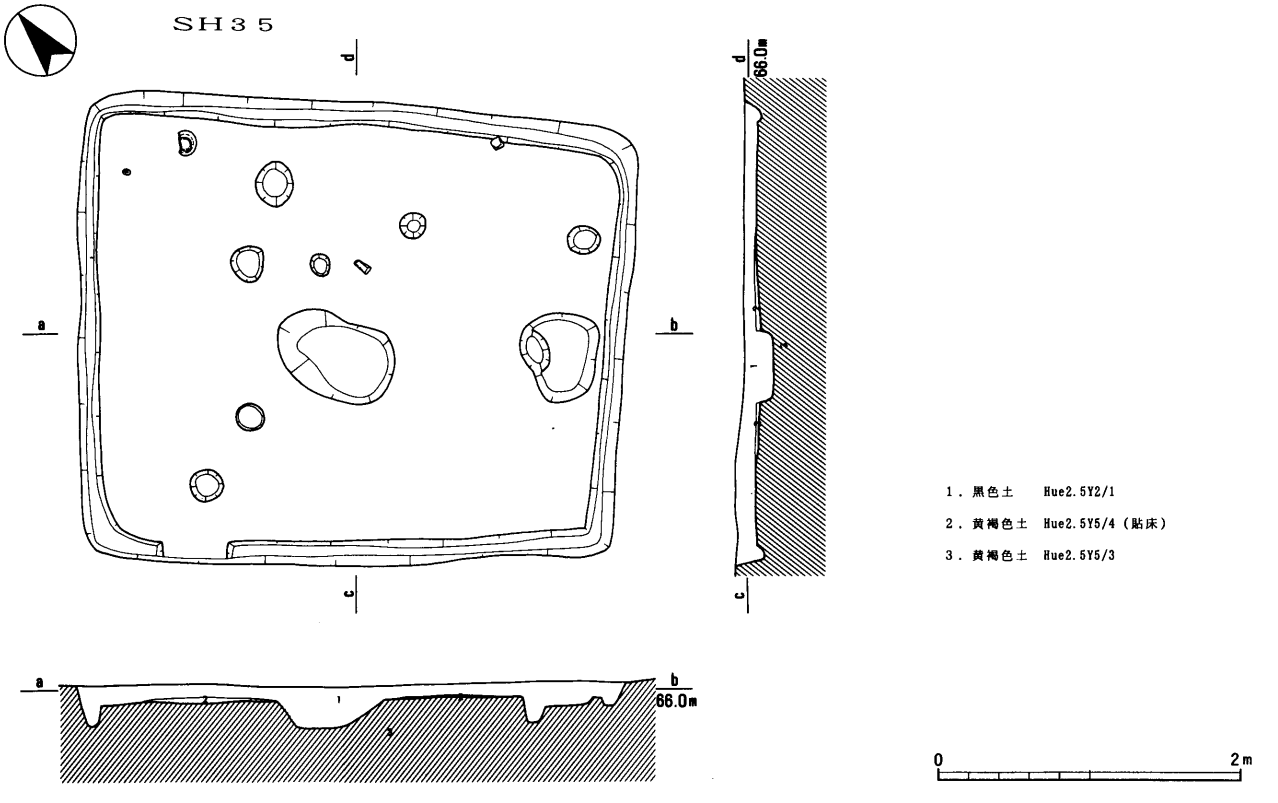
4　遺物

出土遺物には縄文土器・石器、弥生土器・石器、中世の土器類がある。整理用コンテナ箱にして45箱である。以下には土器を時代順に記述し、石器は一括して記述する。

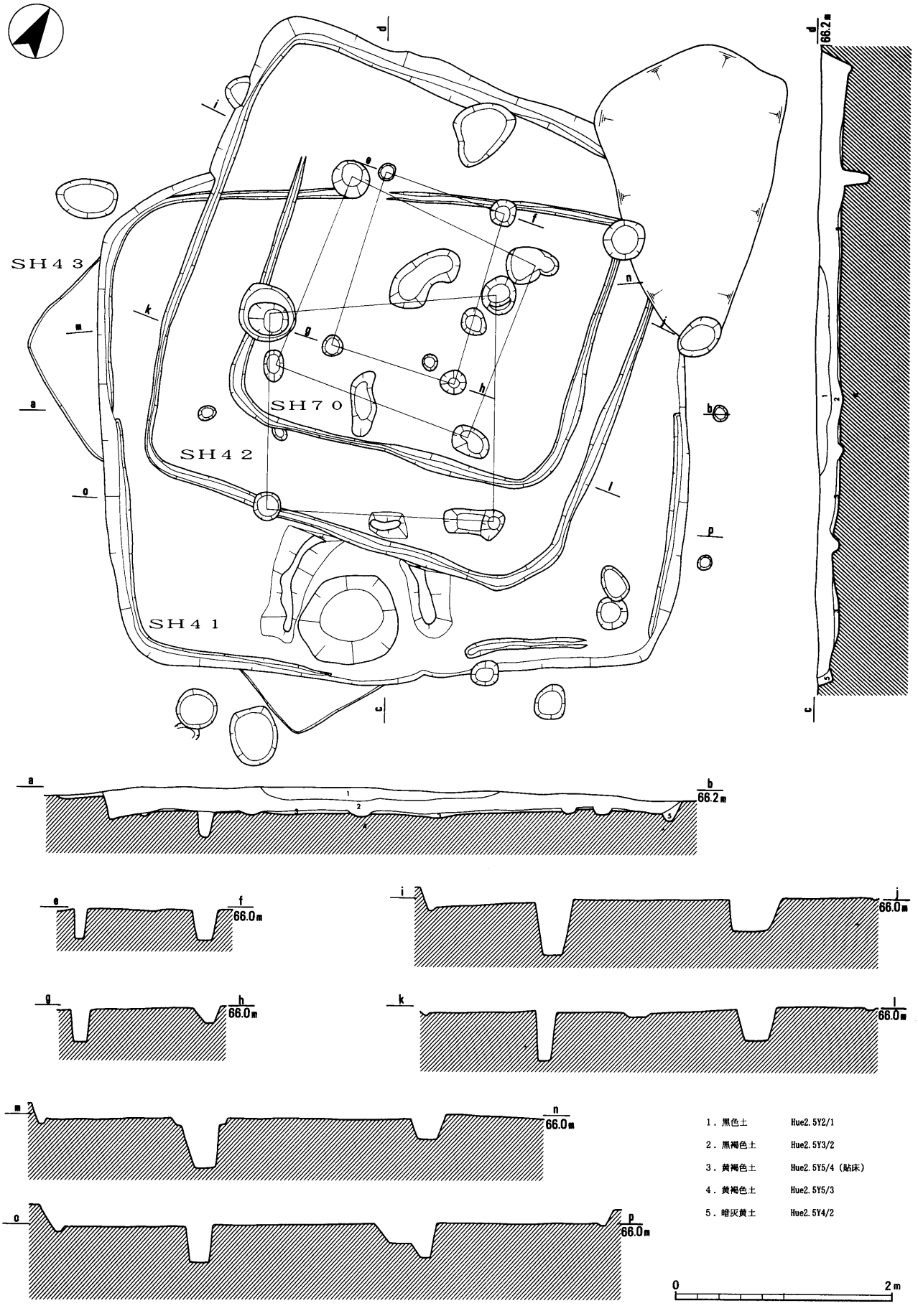
(1)　縄文時代の土器（１～７）

出土位置は小地区番号１以北に偏る傾向がある。深鉢と思われるものがほとんどであるが、小破片が多く、器形を復元できるような資料に恵まれなかっ

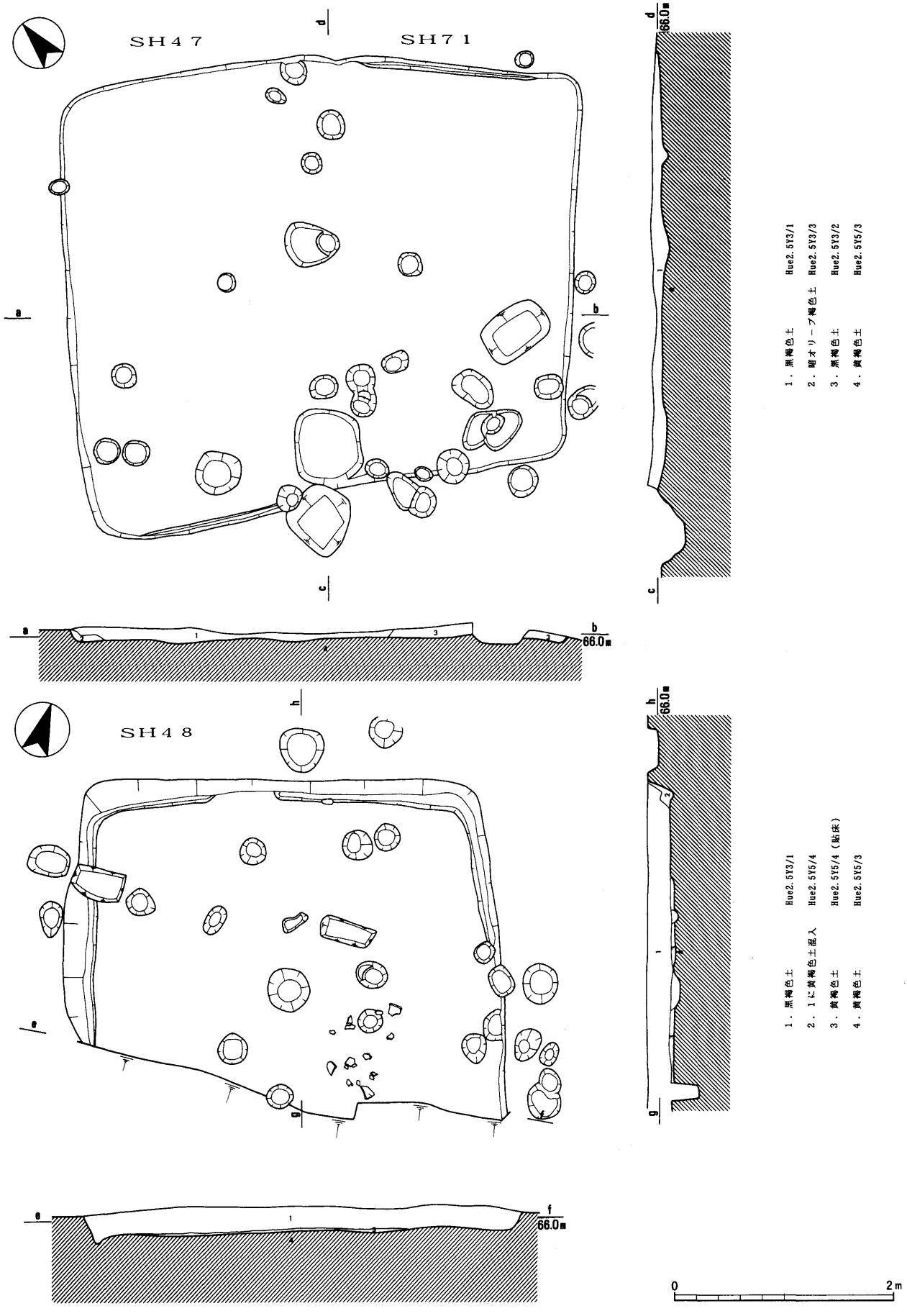




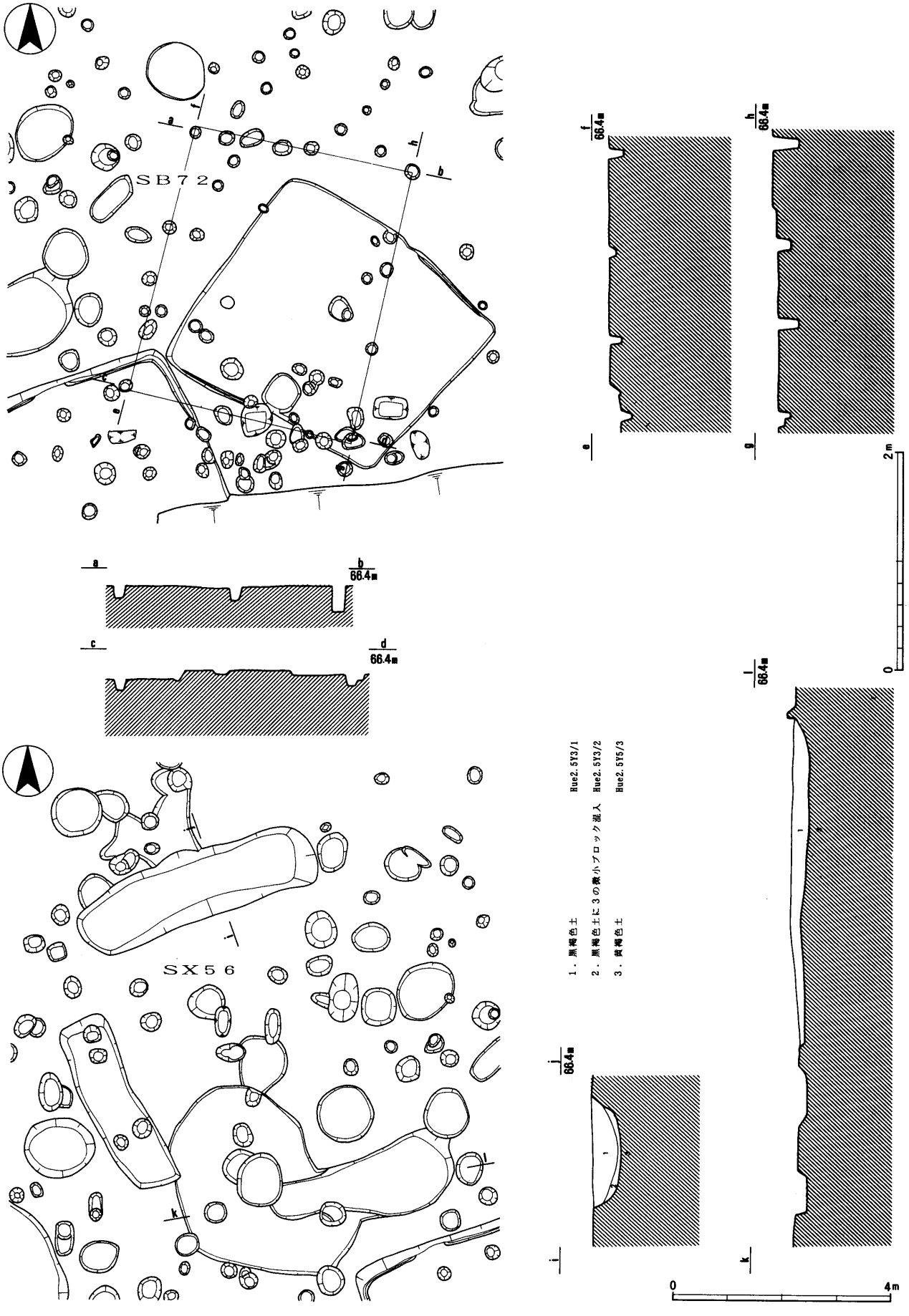
第14図　ＳＨ19・ＳＨ35平面図及び断面図（1：50）



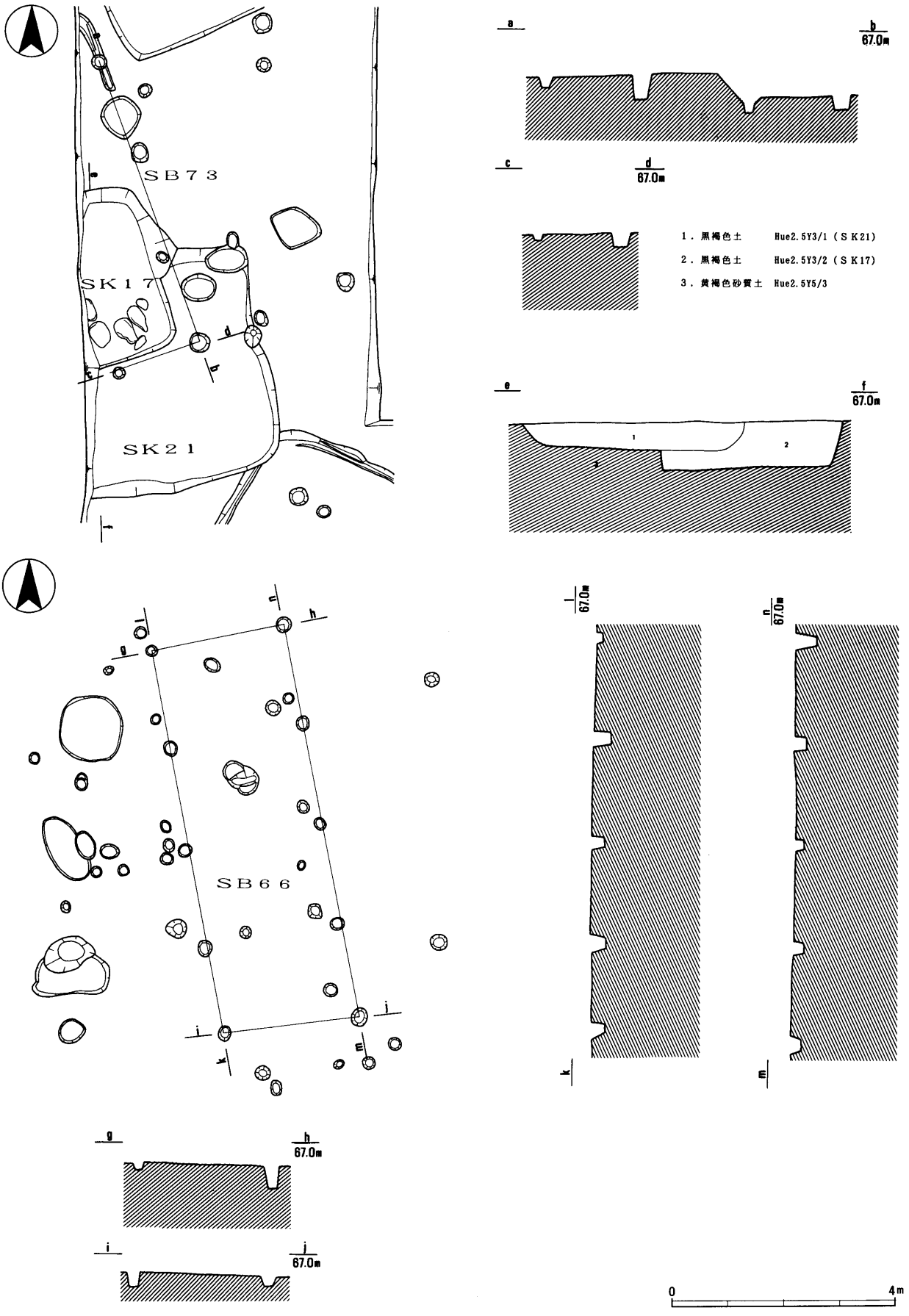
第15図　ＳＨ41～43・ＳＨ70平面図及び断面図（1：50）



第16図　ＳＨ47・ＳＨ48・ＳＨ71平面図及び断面図（1：50）



第17図　ＳＢ72平面図及び断面図・ＳＸ56平面図（１：100）及び断面図（1：50）



第18図　ＳＢ73・ＳＫ17・ＳＫ21・ＳＢ66平面図及び断面図（1：100）

た。

1は直口口縁である。地文にＬＲの縄文をもち、2条の突帯を貼り付ける。突帯上と口縁端部も縄文である。2は、やや外に開く口縁である。地文にＬＲの縄文をもち、2条の突帯を貼り付ける。突帯上も縄文である。それぞれの突帯の上方に弱い沈線が認められる。3は波状口縁である。地文に羽状縄文をもち、突帯を貼り付ける。突帯上も縄文である。4はキャリパー状を呈する口縁部片である。地文に羽状縄文をもち、突帯を貼り付ける。突帯上も縄文である。内面の口唇直下には幅広い突帯、あるいは肥厚部の剝離痕が認められる。その下方には2段の疎らな爪痕が認められる。5は波状になると思われる口縁部片である。沈線で渦巻き文を施す。6は口縁部片である。ＬＲの縄文を地文にもち、沈線間を磨く。磨り消し縄文である。7は底部片である。外縁の突出部に刻みを施す。

1～4・7は前期後半の北白川下層Ⅱｂ～Ⅱｃ式に属すると考えられる。5は中期末、6は中期末から後期初頭のものであろう。

(2) 弥生時代の土器（8～35）

竪穴住居出土のものが中心である。当初遺構の切り合いを誤認していたため、出土遺構の認定は不安定である。以下には器種別に記述する。

広口壺（8～11）　8は口縁部片である。ナデで下方に突出した端部面に櫛描きの波状文を、内面には刺突を矢羽状に施す。瘤状隆起は3つ確認できる。9も口縁部片である。端部面と、端部から内側へ約2.3cm幅のみに櫛描きの波状文を施す。10は頸部から上の資料である。口縁部には施文されず、頸部に簾状文が認められる。17の高杯脚と同一ピットの出土である。11は頸部から口縁部の破片である。口縁部には施文されず、頸部にハケメが施される。

受口状口縁壺（12～14）　12は口縁部から頸部にかけて4帯の簾状文が認められる。13・14は口縁屈曲部から上に2条の凹線が施される。

高杯（15～17）　15は杯部である。大きく開き内弯し、端部に面を持つ。16は水平口縁高杯の口縁部である。17は脚部である。端部内面に帯状に煤が付着しており、蓋に転用された可能性もある。

甕（18～30）　18は口縁外面に段をもつ。波状口縁の可能性もある。19は口縁が強く「く」字状に屈曲し、端部で上方につまみ上げ、端部面外側を刻む。20・22・24・27・28も口縁端部で上方につまみ上げる。21は口縁が強く短く屈曲する。端部のつまみ上げは弱い。23は口縁端部を刻み、口縁部内面は横方向のハケメである。25・26の口縁は「く」字状に屈曲し、端部のつまみ上げは弱い。29は口縁部の屈曲が弱く、端部は若干つまみ上げる。30は口縁屈曲部から内弯し、端部をつまみ上げる。

底部（31～35）　31・35は角度が大きい立ち上がりで、甕の底部であろう。32・33は角度が小さい立ち上がりで、壺の底部であると思われる。32の外面は二次焼成による剝離が著しい。34は内外面2方向から焼成前穿孔をおこなう。

以上の土器の中心時期は、中期第Ⅳ様式後半であると思われる。18は近江の影響を受けていると思われるもので、第Ⅲ様式後半までさか上る可能性がある。

(3) 中世の土器（36～63・66）

以下には器種別に記述する。時期推定は、伊藤裕偉氏の南伊勢系土師器の編年観、藤澤良祐氏の山茶椀の編年観によっている。

土師器皿（47～49）　47・48は体部から口縁部にかけて内弯する。49は器高が低く、端部をやや厚くする。内面に油煙が付着しており、灯明皿として使われたと思われる。

47・49は15世紀後葉、48は15世紀初頭を中心とする時期だと考えられる。

土師器椀（63）　63は椀の台部だと考えられる。底面外側が緩く突出し、雑な工具ナデが認められる。出土遺構からは第4段階並行のものである可能性がある。

土師器鍋（52～60）　52・53の口縁端部は丸く短く折り返す。54・55・57・59はナデにより口縁端部を低く折り返す。56・58・60は口縁端部の折り返しをつまみ上げる。

52・53は、伊藤編年の南伊勢系土師器確立期以前にあたる（仮）Ａ段階としているもので、12世紀後半のものであろう。54・55・57・59は、伊藤編年第3段階のものだと思われ、14世紀後葉から15世紀前半のものであろう。56・58・60は、第4段階に相当

第19図　縄文土器実測図（1：2）

し、15世紀中葉から16世紀後葉をあてることができる。

土師器羽釜（61～62）　61の鍔部は厚く、端部に面をもつのに対し、62の鍔部は先端が狭くなる。ともに口縁端部を外に折り返し、面をつくる。

これらは伊藤編年第4段階に相当すると思われ、15世紀中葉から16世紀後葉をあてることができる。

土錘（66）　66は紡錘形を呈する。

山茶椀（36～46）　全て渥美産であろう。36は口縁部の2か所に灰釉の漬け掛けをする。36～45は全て口縁端部が外反するが、37・39は特に強い。36以外の高台は低く、粗雑に付けられ、糸切り痕も残る。36～39・43・44の内面底には使用による磨滅が認められる。46は小皿である。底部は突出せず、口縁端部はやや外反する。

これらは、おおよそ渥美型第2型式（尾張型第5型式並行）に相当すると考えられ、13世紀初頭を中心とする時期をあてることができる。36は灰釉漬け掛けや、高台の形から、若干先行するものだと考えられる。

陶器碗（51）　51は、古瀬戸の灰釉平碗だと思われる。13世紀から14世紀のものであろう。

青磁碗（50）　50は、やや外反する口縁部である。外面に蓮弁文が認められる。

(4)　近世の土器（64・65）

64は鉄釉丸碗、65は陶器の鉢である。ともに江戸時代後半のものと思われる。

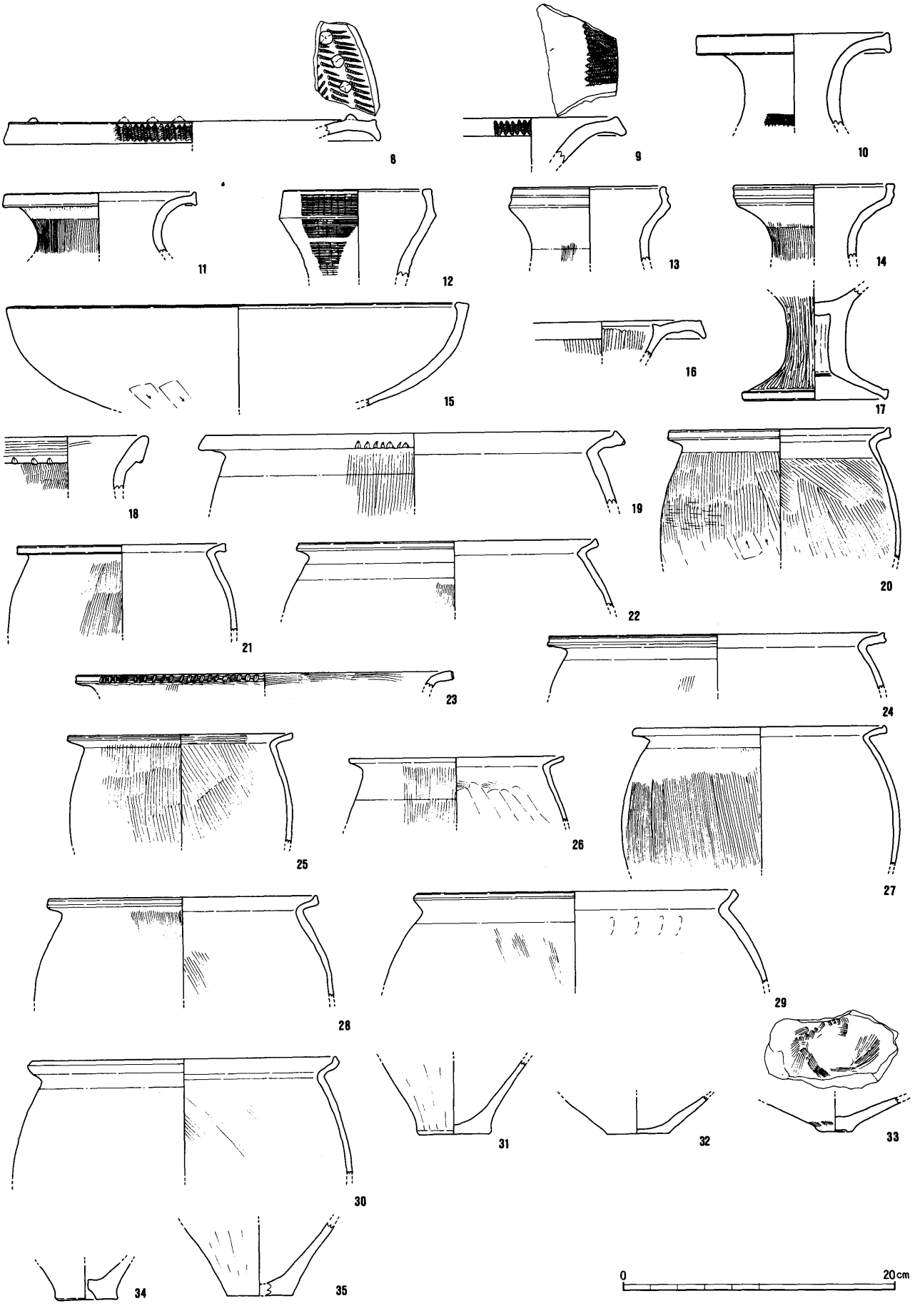
(5)　石器・石製品（67～107）

以下には器種別に記述し、時期が明確なもの以外の時期については言及しない。

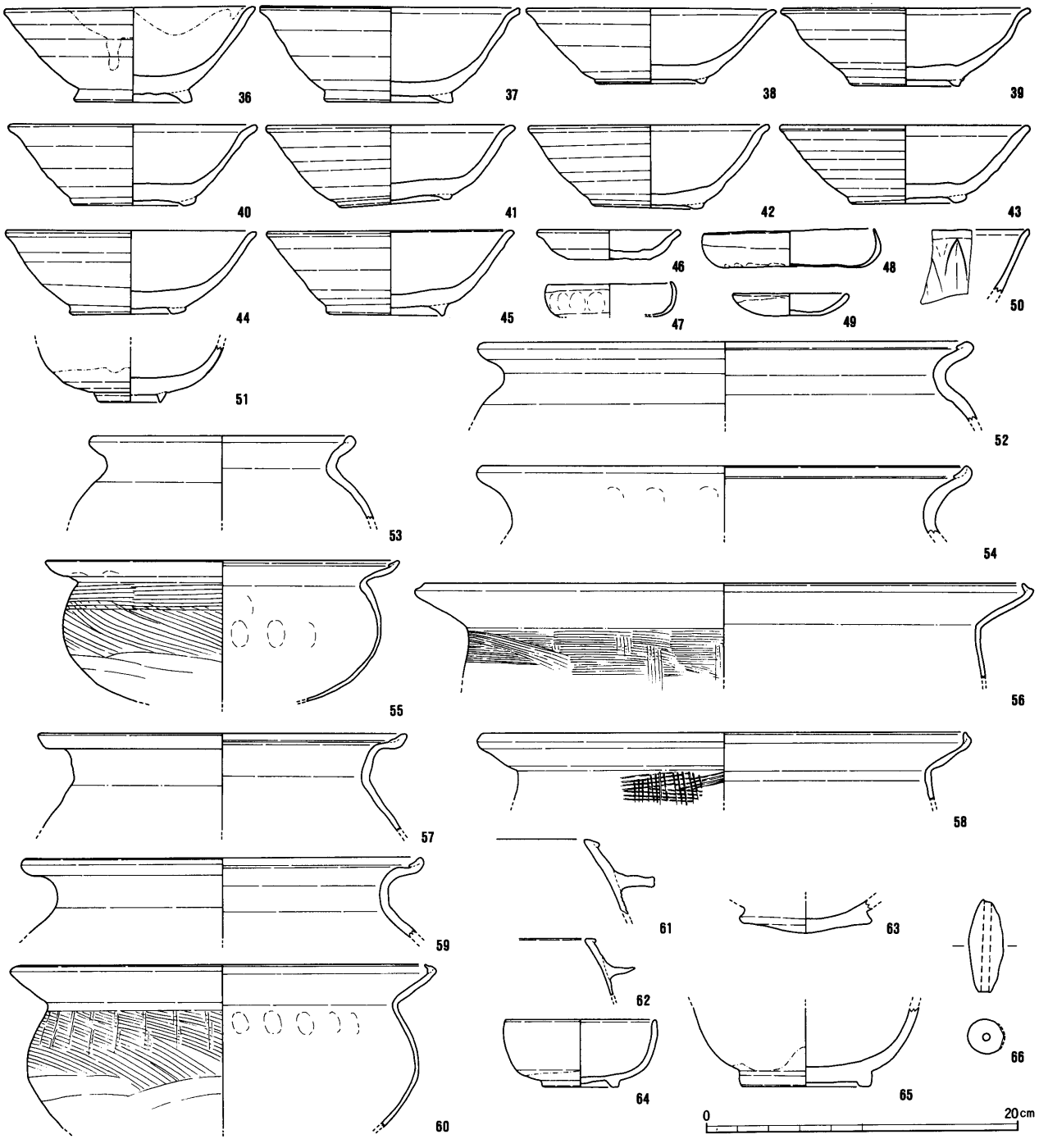
ナイフ形石器（67）　横長の剝片を素材とし、2側縁に急角度の調整をおこなう。チャート製である。

石鏃（68～83）　68～73は、基部が凹基をなし、側縁が直線的で平面形が二等辺三角形のものである。68は腹面に一次剝離面を、69は背面に礫面を残す。71は二次調整が行き届いており、側縁は細かい鋸歯状となっている。72は石英と思われる結晶の部分で欠損する。73は脚部端が縁をなす。71・73がチャート製で、他はサヌカイト製である。

74～79は、基部が凹基をなし、側縁が緩やかに外に張り出し、平面形が正三角形あるいは二等辺三角形のものである。74は基部の抉りが深く、全長の1/2に達する。75は長幅比が0.89である。縄文時代前期に属するものであろう。77は右側縁を欠損する。基



第20図　弥生土器実測図（１：４）



第21図　中・近世の土器実測図（1：4）

部の抉りは浅い。78は全長3.6cmで、最も大型である。79は側縁が鋸歯状をなす。全てサヌカイト製である。

80は基部が凹基をなし、側縁が内に屈曲し、平面形が逆「Y」字状となる。割合厚い断面をもつ。サヌカイト製である。

81は基部が凹基をなし、側縁が直線的で先端近くで屈曲し、平面形が五角形のものである。両面とも周縁加工のみで、素材面を大きく残す。サヌカイト製である。

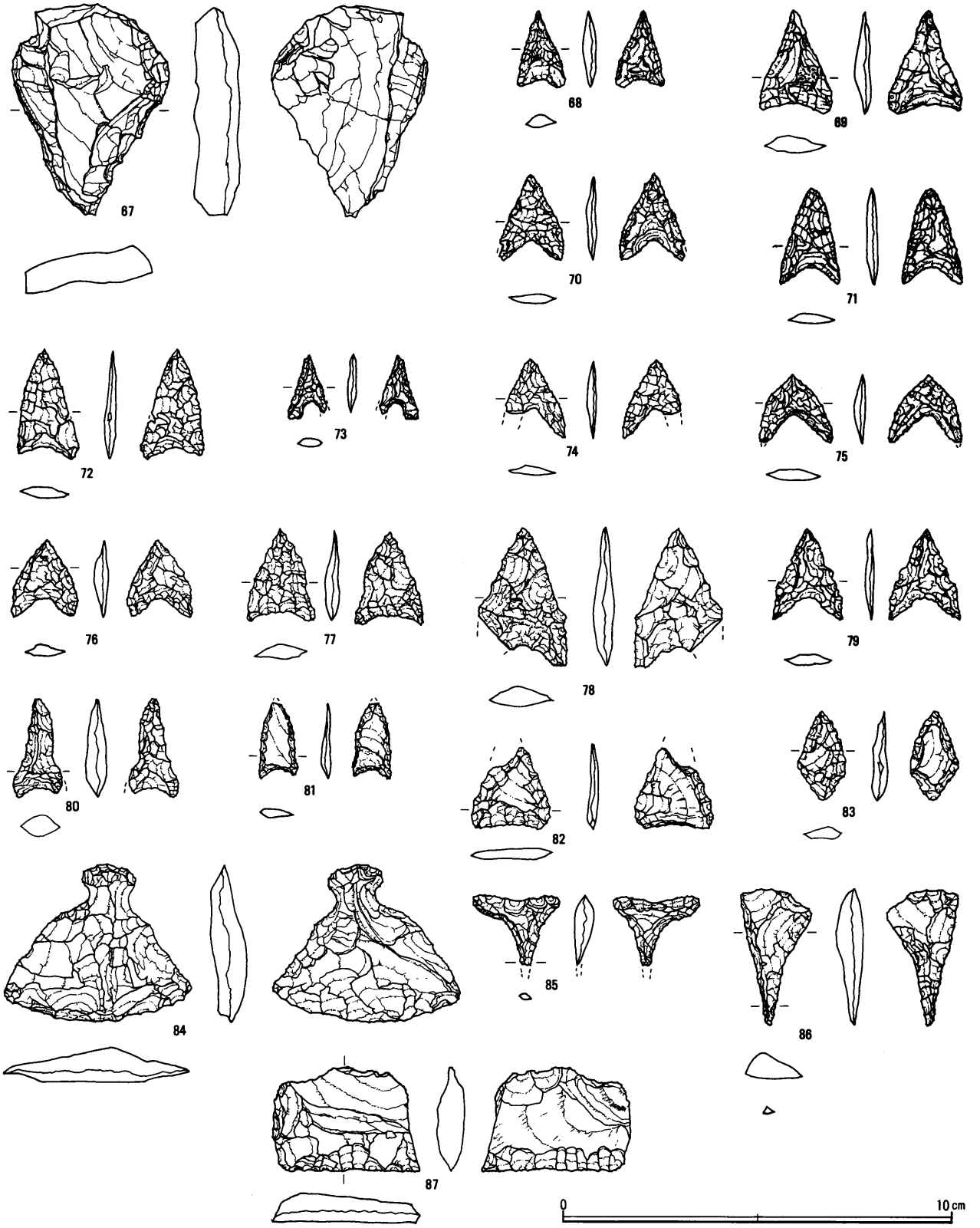
82は基部が平基をなし、側縁が直線的で、平面形が二等辺三角形となる。背面は周縁のみの加工、腹面は調整が少ない。未製品であろう。サヌカイト製である。

83は基部が尖基をなし、側縁が直線的である。腹面には素材面を残す。サヌカイト製である。弥生時代のものと思われ、竪穴住居に伴うものだと考えられる。

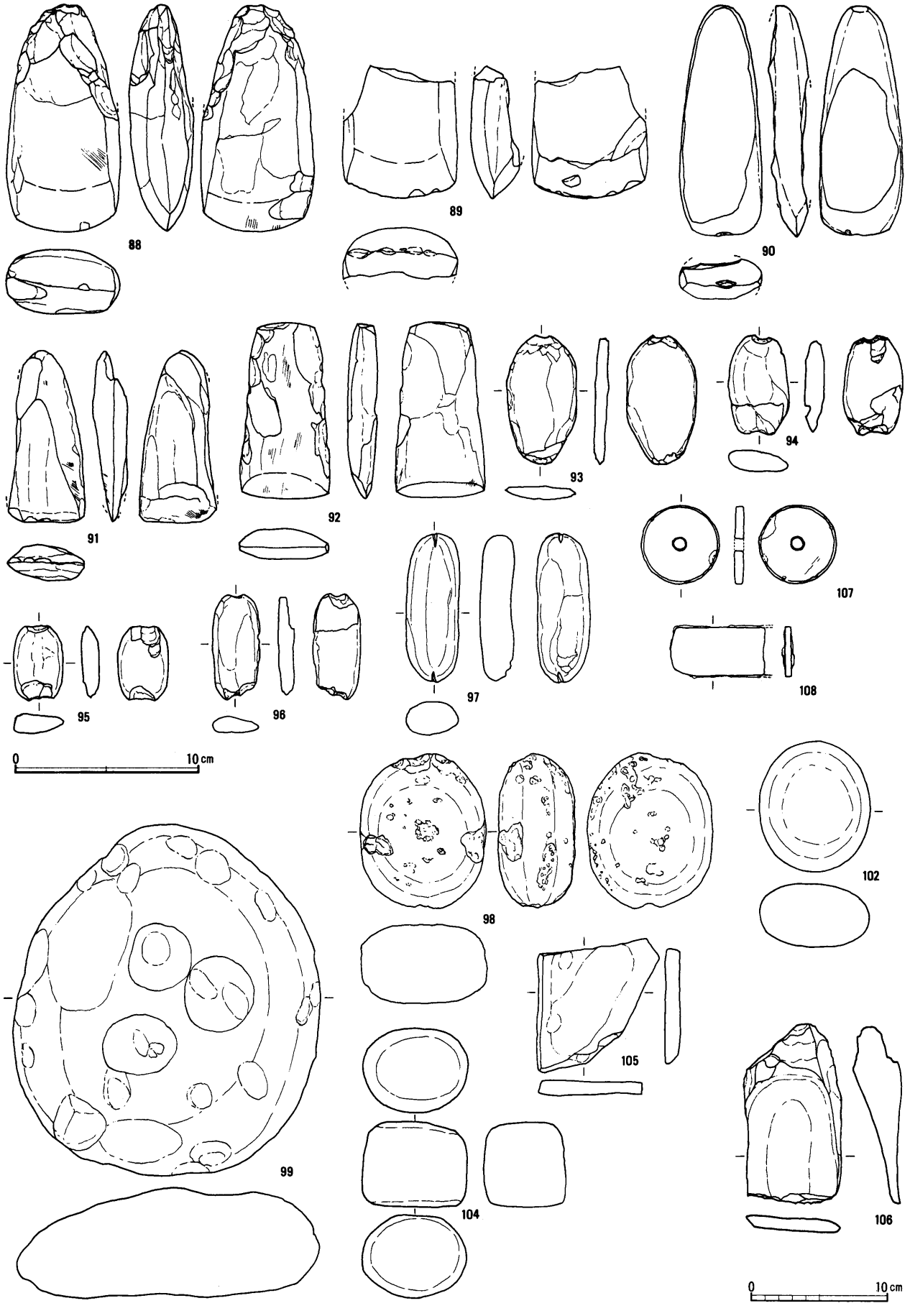
石匙（84）　84は平面形が正三角形で、つまみ部を

除く各側縁が緩く外に張る弧状となる。サヌカイト製である。縄文時代前期のものであろう。

石錐（85・86）　85は明確なつまみ部をもつ。各側縁が内弯し、平面形が「Y」字状になる。両面に素材面を残す。86は明確なつまみ部をもたない。背面に礫面を残す素材を使用し、背面は右側縁のみを、腹面は基部と両側縁を調整する。ともにサヌカイト製である。



第22図　石器実測図（2：3）



第23図　石器・石製品・鉄製品実測図　88～97・107・108は（1：3）、98～106は（1：4）

削器（87）　87は横長の剝片を素材とし、先端縁の両面を調整する。刃部は直線的である。サヌカイト製である。

磨製石斧（88～92）　88～91は両刃である。88は厚い素材を使用している。蛤刃である。一部に光沢部分があり、装着痕だと思われる。砂岩製である。89は刃部片で、蛤刃である。刃部先端には小剝離がみられる。凝灰岩製である。90は、やや小型品で、蛤刃をなす。両面が大きく剝離している。グリーンタフ製である。91は剝離と風化が著しい。本来蛤刃であると思われる。緑簾石石英片岩製である。92は片刃である。偏平で、平面形は裾広がりの短冊状を呈する。刃部には使用によると思われる擦痕が認められる。凝灰岩製である。

磨製石斧は全て弥生時代のもので、竪穴住居に伴うものであろう。

打欠き石錘（93～96）　93は粘板岩の横長の剝片を素材とする。長軸の両端両面を打欠く。94・95は長軸の両端両面を打欠く。94は砂岩片岩製、95は砂岩製である。96は一端は両面を、反対側は片面を打欠く。長石石英片岩製である。

切目石錘（97）　97は楕円礫を素材とし、長軸の両端に切目を入れる。チャート製である。

敲石（98）　98は器体の中央に若干の敲打痕をもち、周縁に敲打痕がみられるものである。

台石（99）　99は敲打痕を両面にもつ。

石皿（100）　100は片面を機能面とし、広く凹部が形成されている。

磨石（101～104）　101・103は磨痕が若干弱い。102は、良く使われている。104は楕円柱状礫の両端面を機能面とするものである。

砥石（105・106）　105は、偏平な砂岩の両面と左側面が機能面である。106は、厚みのある素材の両面を良く使い込んでいる。絹雲母石墨石英片岩である。

紡錘車（107）　107は、両面と側面を良く研磨している。偏平で、断面は長方形である。弥生時代のものであろう。結晶片岩製である。

(6)　鉄製品(108)

108はＳＨ42壁周溝出土である。鎌であるかと思われる。

遺構名	小地区	平面形	上面規模（m）	深さ（m）	柱穴	壁周溝	貯蔵穴	炉	貼床	備考
ＳＨ19	c 17・18	隅丸方形	4.4×3.5	0.2	4	ほぼ全	有？		有	
ＳＨ35	c 20・21	方形	3.7×3.1	0.1	2	ほぼ全			有	
ＳＨ41	e 19・20	隅丸方形	5.4×4.5	0.2	4	ほぼ全	有		有	貯蔵穴の周囲に高まり
ＳＨ42	e 19・20	方形	4.4×4.2	0.2	4	ほぼ全	有	有	有	
ＳＨ43	e 19・20	方形	4.6	0.1						
ＳＨ47	f 22・23	方形	4.2×2.8	0.1		一部	有？		有	
ＳＨ48	e 23	方形	4.1	0.2		ほぼ全			有	
ＳＨ59	h 23	方形		0.1		有				
ＳＨ60	h 23	方形				有				
ＳＨ70	e 19・20	方形	3.4×3.0	0.2	4	一部			有	
ＳＨ71	f g23	方形	3.8×2.6	0.1		一部	有？		有	

第７表　竪穴住居一覧表

遺構名	小地区	上面規模（m）	方向	根石	時期	備考
ＳＢ66	h 20～22	1間×4間	南北棟N19°W	無	１５世紀代以降	
ＳＢ72	f 22・23	2間×3間以上	南北棟N４°E	無	弥生時代中期	
ＳＢ73	a 6・7・8	1間以上×3間以上	N25°W	無	１３世紀	南東隅土坑を伴う

第８表　掘立柱建物一覧表

遺構名	小地区	規模（m）	方向	時期	備考
ＳＸ56	d 21・22	周溝の芯々間６.４m 周溝の内側上端間５.０m	N２６°W	弥生時代	東周溝は検出されなかった
北周溝		幅１.４m　深さ０.２m			
西周溝		幅０.９m　深さ０.１m			
南周溝		幅0.6～1.4m　深さ０.２m			

第９表　方形周溝墓一覧表

遺構名	小地区	平面形	上面規模（m）	深さ(m)	時期	備考
ＳＫ１	b 9	隅丸方形	1.3×0.6	0.3	近世	土坑列１
ＳＫ４	b 7	隅丸方形	1.4×0.5	0.2	近世	土坑列１
ＳＫ５	b 8	隅丸方形	1.4×0.6	0.2	近世	土坑列１
ＳＫ６	b 8	隅丸方形	1.6×0.4	0.2	近世	土坑列１
ＳＫ７	b 3	隅丸方形	2.2×1.7	0.2	近世	
ＳＫ８	b 6	隅丸方形	1.6×0.6	0.1	近世	土坑列１
ＳＫ11	b 2	円形	直径1.2	0.3	中世	
ＳＫ12	c 2	不定形	1.7×1.3	0.5	１６世紀	
ＳＫ13	b 6		2.2	0.1	弥生時代中期	
ＳＫ14	c 6	隅丸方形	1.0×0.5	0.1	近世	
ＳＫ17	b 16	隅丸方形	3.1×1.5	0.7	１３世紀代	
ＳＫ18	b 14	方形	4.6×3.7	0.1		

遺構名	小地区	平面形	上面規模(m)	深さ(m)	時期	備考
ＳＫ20	ｂ３	不定形	１．８×０．８	０．１	近世	
ＳＫ21	ｂｃ17	隅丸方形	４．４×３．６	０．３	１３世紀代	
ＳＫ22	ａ20		０．９	０．１	中世	
ＳＫ23	ａ21		１．４	０．２		
ＳＫ24	ｂ21	隅丸方形	１．６×１．１	０．３	近世	土坑列２
ＳＫ25	ｂ20	隅丸方形	１．１×０．９	０．２	近世	土坑列２
ＳＫ26	ｂ20	楕円形	０．９×０．７	０．２	中世	
ＳＫ27	ｂ21	方形	１．２×０．９	０．２	近世	土坑列２
ＳＫ28	ｂ21	方形	１．４×１．０	０．２	近世	土坑列２
ＳＫ29	ｂ22	隅丸方形	１．２×１．０	０．３	近世	土坑列２
ＳＫ30	ｂ20	方形	０．８×０．８	０．１	近世	土坑列２
ＳＫ31	ｂ21	円形	直径１．０	０．６	中世？	
ＳＫ32	ｂ20	不定形	０．８×０．７	０．３	中世？	
ＳＫ33	ｂ22	楕円形	１．５×０．５	０．３	近世	土坑列２
ＳＫ34	ｂ23	不定形	２．８×０．７	０．１	中世？	
ＳＫ36	ｃ21	不定形	２．２×１．０	０．３	中世	
ＳＫ38	ｃ22	楕円形	１．３×１．１	０．２	中世	
ＳＫ39	ｃ23	楕円形	３．２×２．４	０．３	弥生時代中期	
ＳＫ44	ｄ22	円形	直径１．０	０．３	中世	
ＳＫ45	ｄ23	不定形	１．２×０．５	０．２		
ＳＫ46	ｃ24	隅丸方形	１．０×１．０	０．１	中世	
ＳＫ49	ｅ22	楕円形	１．２×１．０	０．２	中世	
ＳＫ50	ｅ22	楕円形	０．９×０．８	０．１	中世	
ＳＫ51	ｆ18	円形	直径１．０	０．２	中世	
ＳＫ53	ｄ23	楕円形	１．０×０．８	０．２	中世	
ＳＫ54	ｆ22	円形	直径１．０	０．４	中世	
ＳＫ55	ｇ20	隅丸方形	１．１×１．１	０．２	中世	
ＳＫ57	ｇ21	楕円形	１．３×０．６	０．１	弥生時代	
ＳＫ58	ｇ21	不定形	０．９×０．６	０．２	中世？	
ＳＫ61	ｉ22	楕円形	０．９×０．８	０．２	中世	
ＳＫ62	ｊ21	楕円形	２．２×１．８	０．１	中世	
ＳＫ63	ｊ21	楕円形	０．９×０．８	０．１	中世	
ＳＫ64	ｅ20	楕円形	０．９×０．８	０．５	弥生時代中期	ＳＨ４１の貯蔵穴
ＳＫ65	ｅ19	不定形	０．５×０．５	０．３	弥生時代中期	ＳＨ４２の貯蔵穴
ＳＫ67	ｂ－４		１．８	０．２	縄文時代前期	
ＳＫ68	ｃ－３	楕円形	１．４×１．０	０．１	縄文時代前期	
ＳＫ69	ｃ－２		３．２	０．２	縄文時代前期	

第10表　土坑一覧表

遺構名	小地区	上面規模(m)	深さ(m)	方向	時期	備考
ＳＤ２	ｃ９・ｂ10	延長　４．４　幅０．３～０．７	０．１	Ｎ55°Ｅ	中世	
ＳＤ３	ｂｃ11～13	延長１１．０　幅５．５	１．７	Ｎ40°Ｅ	１３世紀	
ＳＤ９	ｃ２～４	延長１５．０　幅０．３～０．７	０．２	Ｎ24°Ｗ	１６世紀	
ＳＤ10	ｃ３	延長１７．０　幅０．３～０．５	０．１	Ｎ24°Ｗ	１６世紀	
ＳＤ15	ｃ１・２	延長３０．０　幅２．０～２．４	１．０	Ｎ20°Ｗ	１６世紀	
ＳＤ16	ｃ１・２	延長　４．５　幅０．３	０．１	Ｎ10°Ｗ	１６世紀？	

第11表　溝一覧表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
1	014-02	縄文土器	ＳＤ１５		外面縄文ＬＲ。突帯貼りつけ。突帯上を縄文ＬＲ。口縁端部縄文。内面ナデ。	やや粗	並	10YR7/3にぶい黄橙	口縁小片	
2	014-03	縄文土器	ＳＤ１５		外面縄文ＬＲ。突帯貼りつけ。突帯上を縄文ＬＲ。内面オサエ、ナデ。	やや粗	並	10YR6/2灰黄褐	口縁小片	
3	014-05	縄文土器	ＳＫ６７		外面羽状縄文。突帯貼りつけ。突帯上を縄文。内面ナデ。	やや粗	並	2.5Y5/2暗灰黄	口縁小片	
4	014-04	縄文土器	ｆ１９ Ｐ２		外面羽状縄文。突帯貼りつけ。突帯上を縄文。内面爪痕。	やや粗	並	5YR5/2灰褐	口縁小片	内面口唇直下に剥離痕。
5	014-07	縄文土器	ｂ２０ 検出		外面縄文ＬＲ。沈線間を磨く。内面ナデ。	やや密	並	10YR6/3にぶい黄褐	口縁小片	
6	014-06	縄文土器	ＳＫ１		外面沈線による渦巻き文。内面ナデ。	やや密	並	10YR6/3にぶい黄橙 7.5YR7/4にぶい橙	口縁小片	
7	014-01	縄文土器	ＳＫ１	底径(15.2)	外面ナデ。底部外周に刻み。内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR6/3にぶい褐	底部1/7	
8	013-03	弥生土器 広口壺	ＳＨ３５	口径(27.0)	外面ハケ、横ナデ。口縁端部櫛描き波状文。内面矢羽状の櫛刺突文。瘤状隆起。	やや密	並	7.5YR7/6橙	口縁1/12	
9	013-07	弥生土器 広口壺	ＳＨ１９		外面横ナデ。口縁端部と内面櫛描き波状文。	やや粗	並	7.5YR6/4にぶい橙 10YR5/3にぶい黄褐	口縁小片	
10	001-02	弥生土器 広口壺	ｇ２２ Ｐ１	口径14.0	外面頸部簾状文、ナデ。口縁端部横ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR6/4にぶい橙 7.5YR7/4にぶい橙	頸部以上	
11	009-03	弥生土器 広口壺	ＳＨ３５	口径(14.0)	外面頸部ハケメ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	2.5YR6/6橙 5YR5/1褐灰	口縁1/2	
12	009-05	弥生土器 受口状口縁壺	ＳＨ４２	口径(10.8)	外面頸部口縁部簾状文。内面ナデ。	やや密	並	10YR6/2灰黄褐	口縁1/6	
13	013-01	弥生土器 受口状口縁壺	ＳＨ３５	口径(11.3)	口縁部外面２条の凹線文。頸部ハケメ。内外面横ナデ。	やや粗	並	10YR6/4にぶい黄橙	口縁1/10	
14	011-02	弥生土器 受口状口縁壺	ＳＨ１９	口径(12.0)	口縁部外面２条の凹線文。頸部ハケメ。内外面横ナデ。	やや粗	並	5YR6/6橙 5YR1.7/1黒	口縁1/6	
15	010-02	弥生土器 高杯	ＳＨ４８	口径(34.0)	外面下部ケズリ。外面上部と内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR7/4にぶい橙	口縁1/8	
16	013-02	弥生土器 高杯	ＳＨ４１		内外面ミガキ。	やや粗	並	7.5YR6/4にぶい褐	口縁小片	
17	010-04	弥生土器 高杯	ｇ２２ Ｐ１		外面ミガキ。内面ナデ。	粗	並	7.5YR7/4にぶい橙 N3/0暗灰	脚部	脚端部内面のみスス付着。

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm)	成形・調整・文様の様相	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
18	013-06	弥生土器 甕	SH41		外面ハケメ。肥厚部下端刻み。内面横ナデ。	やや粗	並	7.5YR7/4にぶい橙	口縁小片	
19	013-05	弥生土器 甕	SH41	口径(30.0)	外面ハケメ。口縁内外面横ナデ。口縁端部外側に刻み。内面ナデ。	やや粗	並	10YR8/4浅黄橙	口縁1/14	
20	009-01	弥生土器 甕	SK13	口径(16.2)	外面上半ハケメ、下半ケズリ。口縁部横ナデ。内面ハケメ。	やや粗	並	5YR5/3にぶい赤褐	口縁1/4	
21	011-03	弥生土器 甕	SH19	口径(15.4)	外面ハケメ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	10R1.7/1黒 10YR7/3にぶい黄橙	口縁1/8	
22	011-06	弥生土器 甕	SH41	口径(21.0)	外面ハケメ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR6/3にぶい褐 7.5YR5/3にぶい褐	口縁1/10	
23	009-04	弥生土器 甕	SH47	口径(27.6)	外面ハケメ。口縁端部刻み。内面ハケメ。	やや粗	並	5YR6/4にぶい橙	口縁1/6	
24	010-03	弥生土器 甕	SH42	口径(25.0)	外面ハケメ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	7.5YR8/4浅黄橙	口縁小片	
25	009-02	弥生土器 甕	SH48	口径(16.4)	外面ハケメ。口縁部横ナデ。口縁部内面ハケメ。内面ハケメ。	やや粗	並	5YR6/4にぶい橙 5YR5/2灰褐	口縁1/9	
26	013-04	弥生土器 甕	SH35	口径(16.0)	外面ハケメ。口縁部横ナデ。内面ハケメ、ナデ。	やや粗	並	2.5Y8/4淡黄 7.5YR6/4にぶい橙	口縁1/8	
27	012-01	弥生土器 甕	SH41	口径(18.4)	外面ハケメ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	10YR2/1黒 10YR3/2黒褐	口縁1/6	
28	011-04	弥生土器 甕	SK39	口径(19.8)	外面ハケメ、ナデ。口縁部横ナデ。内面ハケメ、ナデ。	やや粗	並	10YR8/3浅黄橙 10YR2/1黒	口縁1/12	
29	012-02	弥生土器 甕	SH41	口径(24.0)	外面ハケメ、ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや粗	並	10YR5/3にぶい黄褐 10YR2/3黒褐	口縁1/10	
30	011-05	弥生土器 甕	SH19	口径(23.0)	外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ハケメ、ナデ。	やや粗	並	7.5YR5/3にぶい褐 5YR6/4にぶい橙	口縁1/5	
31	012-06	弥生土器	SH19	底径(5.2)	内外面ナデ。	やや粗	並	7.5YR4/3褐 7.5YR7/4にぶい橙	底部1/2	
32	012-03	弥生土器	SH19	底径4.5	内外面ナデ?	やや粗	並	10YR7/3にぶい黄橙	底部	
33	012-04	弥生土器	SH19	底径2.3	外面ナデ。内面ハケメ。	やや粗	並	10YR7/3にぶい黄橙 10YR6/4にぶい黄橙	底部	
34	011-01	弥生土器	SH41	底径4.4	内外面ナデ。底部焼成前穿孔。	やや粗	並	5YR5/4にぶい赤褐	底部	
35	012-05	弥生土器	SH41	底径(4.8)	内外面ナデ。	やや粗	並	7.5YR4/3褐	底部1/2	
36	001-01	山茶椀	SD3	口径16.0 器高6.2	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや密	良	2.5Y7/1灰白 2.5Y8/1灰白	完形	
37	002-02	山茶椀	SD3	口径(16.5) 器高6.1	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや密	良	5Y8/1灰白	1/8	
38	002-04	山茶椀	SD3	口径(15.9) 器高4.9	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや密	良	10YR7/1灰白	1/4	もみがら痕。
39	003-06	山茶椀	b17	口径(15.9) 器高5.0	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや密	良	2.5Y7/1灰白	1/4	
40	002-03	山茶椀	SK17	口径(15.6) 器高5.2	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや密	良	10YR7/1灰白	1/6	
41	003-01	山茶椀	SK21	口径(15.6) 器高5.5	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや密	良	2.5Y7/1灰白 2.5Y6/1黄灰	4/5	
42	003-02	山茶椀	SK21	口径15.6 器高5.5	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや粗	良	2.5Y7/1灰白 2.5Y7/2灰黄	ほぼ完形	
43	003-03	山茶椀	SK21	口径(16.0) 器高5.1	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや密	良	2.5Y6/1黄灰	1/4	
44	003-04	山茶椀	b2 検出	口径(16.0) 器高5.4	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや密	良	2.5Y7/1灰白	1/3	
45	003-05	山茶椀	b17	口径(16.0) 器高5.5	内外面ロクロナデ。貼り付け高台。	やや粗	良	2.5Y8/1灰白	3/4	
46	006-06	山皿	SK17	口径(9.0) 器高1.9	内外面ロクロナデ。	密	良	10YR7/2にぶい黄橙	1/8	
47	006-04	土師器皿	SD15	口径(7.9) 器高2.2	外面オサエ、ナデ。内面ナデ。	密	良	7.5YR7/6橙	3/4	
48	008-03	土師器皿	SD15	口径11.1 器高2.5	外面オサエ、ナデ。内面ナデ。	やや密	良	10YR8/3浅黄橙	4/5	
49	008-04	土師器皿	g21 P5	口径7.3 器高1.4	内外面ナデ。	やや密	良	7.5YR7/4にぶい橙	完形	
50	008-05	青磁碗	SD3		内外面施釉。	密	良	7.5Y7/1灰白 釉)10GY7/1明緑灰	口縁小片	
51	007-03	陶器平碗	SK12	高台径4.0	内外面ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ。のち施釉。貼り付け高台。	密	良	2.5Y6/2灰黄 釉)5Y6/4オリーブ黄	底部1/2	
52	008-02	土師器鍋	SD3	口径(31.2)	外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや密	良	10YR7/4にぶい黄褐	口縁1/6	
53	004-03	土師器鍋	SD3	口径(16.5)	外面ナデ。口縁部横ナデ。内面工具ナデ。	粗	良	10YR8/3灰白	1/7	
54	004-02	土師器鍋	SK17	口径(31.3)	口縁部横ナデ。内面オサエ、ナデ。	やや密	良	10YR6/2灰黄褐	1/3	
55	005-01	土師器鍋	SD15	口径(22.4)	体部上半ハケ、下半ケズリ。口縁部横ナデ。内面オサエ、工具ナデ。	密	良	10YR6/4にぶい黄橙	1/6	
56	008-01	土師器鍋	SD10	口径(38.8)	外面ハケメ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	密	良	10YR8/3浅黄橙	1/6	
57	005-02	土師器鍋	SK17	口径(23.4)	外面ナデ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	粗	良	10YR6/4にぶい黄橙	1/5	
58	007-05	土師器鍋	SD10	口径(31.2)	外面ハケメ。口縁部横ナデ。内面ナデ。	やや密	良	10YR7/4にぶい黄橙	1/8	
59	006-05	土師器鍋	SK17	口径(25.3)	口縁部横ナデ。	やや密	良	10YR6/3にぶい黄橙	1/6	
60	004-01	土師器鍋	SD15	口径(26.0)	体部上半ハケメ、下半ケズリ。口縁部横ナデ。内面オサエ、ナデ。	密	良	10YR6/4にぶい黄橙	1/3	
61	006-03	土師器羽釜	SD15		外面ハケメ、口縁部ナデ。	密	良	10YR7/4にぶい黄橙	口縁小片	
62	007-01	土師器羽釜	SD10		内外面ナデ。	密	良	2.5Y7/3浅黄	口縁小片	
63	006-02	土師器椀	SD15	底径8.5	底面外面工具ナデ。内面ナデ。	密	良	10YR7/4にぶい黄橙	底部	
64	006-01	陶器丸碗	SK7	口径(9.7) 器高4.3	内外面ロクロナデのち施釉(鉄釉)。ケズリ出し高台。	やや密	良	10YR7/2にぶい黄橙 釉)5YR4/3にぶい赤褐	口縁1/4	
65	002-01	陶器鉢	包含層	高台径(8.2)	内外面ロクロナデのち施釉。ケズリ出し高台。	密	良	N7/0灰白 釉)5Y6/4オリーブ黄	底部	
66	007-02	土錘	SD15	長さ5.9 幅2.2 重さ(23.2)g	全面ナデ。	やや密	良	2.5Y8/2灰白	ほぼ完形	

第12表　土器観察表

報告書番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	石材	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
67	027-02	ナイフ形石器	ＳＨ４１	チャート	完形	5.5	3.5	1.2	22.23	
68	023-02	石鏃	ＳＤ１５	サヌカイト	完形	2.0	1.2	0.3	0.65	
69	025-01	石鏃	ｂ－１	サヌカイト	完形	2.6	1.9	0.4	1.48	
70	023-01	石鏃	ｃ－２	サヌカイト	ほぼ完形	2.2	1.6	0.3	0.76	
71	022-04	石鏃	ＳＨ４１	チャート	完形	2.5	1.5	0.3	0.92	
72	022-01	石鏃	ＳＫ６９	サヌカイト	ほぼ完形	2.8	1.6	0.3	1.01	
73	025-04	石鏃	排土	チャート	先端脚一欠	(1.6)	(1.0)	0.2	(0.30)	
74	024-04	石鏃	ｂ－２	サヌカイト	脚部一方欠	2.0	(1.5)	0.2	(0.42)	
75	025-03	石鏃	ＳＫ３９	サヌカイト	ほぼ完形	1.7	1.9	0.3	0.65	
76	024-03	石鏃	ｂ－２	サヌカイト	完形	2.0	1.7	0.3	0.78	
77	022-03	石鏃	ＳＫ６９	サヌカイト	完形	2.4	1.7	0.4	1.17	
78	023-03	石鏃	ＳＤ１５	サヌカイト	脚部一方欠	3.6	(2.2)	0.5	(3.44)	
79	022-02	石鏃	ＳＨ４１	サヌカイト	完形	2.3	1.8	0.3	0.81	
80	024-01	石鏃	ＳＨ４１	サヌカイト	脚部一方欠	2.5	(1.2)	0.5	(1.28)	
81	025-02	石鏃	ＳＤ１０	サヌカイト	先端部欠	(2.0)	1.0	0.3	(0.49)	
82	023-04	石鏃	ＳＫ６９	サヌカイト	先端部欠	(2.1)	2.0	0.3	(1.14)	
83	024-02	石鏃	ＳＨ４１	サヌカイト	完形	2.3	1.2	0.4	(0.96)	
84	026-01	石匙	ＳＤ１５	サヌカイト	完形	4.1	4.8	0.9	12.61	
85	026-03	石錐	ＳＨ４３	サヌカイト	基部先端欠	(1.8)	(2.2)	0.5	(1.34)	
86	026-02	石錐	ＳＤ１５	サヌカイト	完形	3.5	1.8	0.7	2.59	
87	027-01	削器	ＳＫ３９	サヌカイト	完形	2.7	3.8	0.8	9.21	
88	017-01	磨製石斧	ＳＨ４８	砂岩	ほぼ完形	12.3	6.2	3.5	403	
89	017-03	磨製石斧	ＳＨ３５	凝灰岩	基部2／3欠	(7.3)	6.3	(2.9)	(172)	
90	017-02	磨製石斧	ＳＤ１５	グリーンタフ	表裏面欠	12.5	4.5	2.2	170	
91	018-03	磨製石斧	ＳＤ１５	緑簾石石英片岩	一側縁欠	9.4	(3.7)	1.9	82	
92	018-02	磨製石斧	ＳＨ３５	凝灰岩	ほぼ完形	9.6	5.0	1.6	126	
93	015-01	打欠き石錘	ＳＤ１５	粘板岩	完形	7.0	3.8	0.8	26.58	
94	015-04	打欠き石錘	ｃ－１	砂岩片岩	完形	5.4	3.3	1.2	24.56	
95	015-05	打欠き石錘	表採	砂岩	完形	4.1	2.7	1.1	16.82	
96	015-03	打欠き石錘	ＳＤ１５	長石石英片岩	一端欠	5.8	2.6	0.9	17.06	
97	015-02	切目石錘	表採	チャート	完形	7.9	2.9	1.8	72.53	
98	018-01	敲石	ＳＤ１５	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	11.3	9.3	5.8	891	
99	020-01	台石	ＳＤ３	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	25.6	22.7	8.1	5,980	
100	021-01	石皿	ＳＤ３	流紋岩質溶結凝灰岩	一部欠	(20.3)	(21.8)	(10.6)	(5,270)	
101	019-02	磨石	ＳＨ４１	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	12.8	10.8	6.7	1,280	
102	016-03	磨石	ＳＤ１５	砂岩	完形	9.6	8.2	4.6	520	
103	016-04	磨石	ＳＨ１９	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	8.1	6.7	4.1	277	
104	019-01	磨石	ＳＨ４１	流紋岩質溶結凝灰岩	完形	6.2	7.7	6.0	495	
105	016-02	砥石	ＳＤ３	砂岩	一部	9.8	9.1	1.2	143	
106	016-01	砥石	ＳＫ５４	絹雲母石墨石英片岩	一部	13.1	7.3	3.6	329	
107	015-06	紡錘車	ＳＨ３５	結晶片岩	ほぼ完形	直径4.3	穴径0.7	0.5	16.73	

第13表　石器観察表

＜遺構一覧表凡例＞
遺構名：表示記号は「例言」に示した。なお、SX＝方形周溝墓である。
深さ：ＳＨについては、検出面から床面までの深さである。
柱穴：確認できた数を表記した。
壁周溝：現存状態を言葉で表記した。
以上の他は、縁通庵遺跡に準拠する。
＜遺物観察表凡例＞
全ての項目は、縁通庵遺跡に準拠する。

Ⅴ　結　　語

1　縄文時代の縁通庵遺跡・アカリ遺跡

（１）縁通庵遺跡ＳＫ１について

平面形、断面形から判断すれば竪穴住居であるとも考えられる。但し、柱穴や炉跡は確認できず、この一例だけでは竪穴住居と判断するのは難しいと判断した。員弁町・北野遺跡第２次発掘調査で確認された竪穴住居は、平面形は不定形ながらも、柱穴や炉跡を検出している。[4]

ＳＫ１以外では、東日本の影響を受けた土器や、黒曜石の剝片も出土しており、西日本の特徴を基本としながらも、東日本の文化も流入しているという特徴がみてとれる。

（２）前期の集落範囲について

両遺跡で、縄文時代前期後半の、北白川下層Ⅱｂ～Ⅱｃ式に比定できる土器が出土している。間違いなく、この時期の集落が存在していると思われる。縁通庵遺跡ではＳＫ１という、ほぼ純粋なこの時期の遺構があり、アカリ遺跡においては調査区の北に遺構が偏っていることから、中心は民家から縁通庵遺跡寄りだと考えられる。

（３）他時期について

良好な遺構は確認できないものの、中期末から後期初頭の遺物が若干見つかっている。

2　弥生時代のアカリ遺跡

（１）集落について

竪穴住居11棟、掘立柱建物１棟以上からなり、おそらく中期第Ⅳ様式後半期の集落であろう。竪穴住居では４棟が重複する箇所がある。ＳＨ43→ＳＨ41→ＳＨ42→ＳＨ70の変遷では、住居の規模縮小が行われている。

（２）集落範囲について

縁通庵遺跡では全く確認できず、アカリ遺跡では南寄りに偏っていることから、中心はアカリ遺跡調査区内と南方向であると考えられる。

（３）方形周溝墓について

時期は不明ながら１基確認した。「コ」字状に検出したが、半辺陸橋型とされるものであろう。[5]

3　中世以降の縁通庵遺跡・アカリ遺跡

（１）13世紀初めを中心とする時期について

住居跡では、アカリ遺跡ＳＢ73がある。棟方向はＮ25°Ｗである。同時期にＳＤ３が存在する。ＳＤ３は、断面がＶ字形で深さ1.7mを測り、大規模なものである。

（２）16世紀初めを中心とする時期について

住居跡では、縁通庵遺跡の大半の掘立柱建物と柱列、アカリ遺跡ＳＢ66[6]である。同時期にアカリ遺跡ＳＤ15などの溝が数条存在する。これらの方向は、Ｎ20°～25°Ｗほどである。ＳＤ15は、断面Ｖ字形で深さ1.0mを測り、区画溝以上の機能を果たしたと考えられる。[7]

中世の遺構方向は、現在の畦畔方向とほぼ同一である。

［註・参考文献］

① 伊藤裕偉「南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie-history』vol.1 、三重歴史文化研究会、1990年）。
伊藤裕偉『岩出地区内遺跡群発掘調査報告II』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

② 分析をしておらず、成分は不明である。発色からは、ベンガラである可能性がある。

③ 藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第３号、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。

④ 蔭山誠一『北野遺跡第２次発掘調査報告』（員弁町教育委員会、1994年）。

⑤ 山田猛「２　弥生時代」（『大鼻遺跡』本文編　Ⅷ考察、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。

⑥ 1998年度に三重県埋蔵文化財センターが発掘調査をおこなった亀山市・大会遺跡では、類例が多く確認されている。担当の穂積裕昌氏は、その使用目的は「畜舎」だと推定している。

⑦ 発掘調査範囲内では確認できなかったが、「居館」のようなある程度の規模の遺構の存在を示唆するものであろうか。

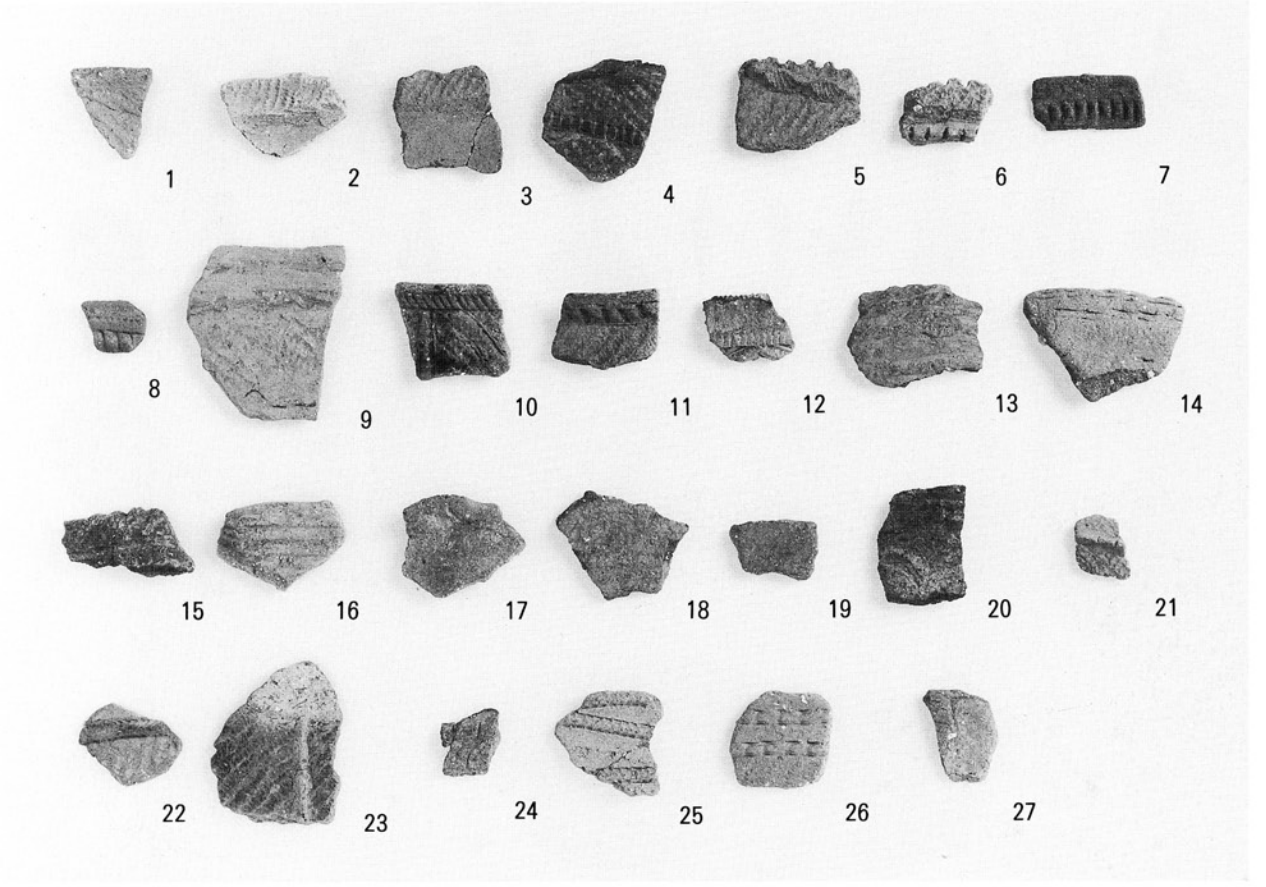
他に、以下の文献は全般にわたって参考にした。

・網谷克彦「北白川下層式土器様式」（『縄文土器大観』１草創期・早期・前期、小学館、1989年）。
・谷口康浩「諸磯式土器様式」（『縄文土器大観』１草創期・早期・前期、小学館、1989年）。
・竹内英昭「No.138 B 地点（源鳥Ｃ遺跡）の調査」（『上野新都市開発整備区域　埋蔵文化財発掘調査報告書』第１分冊　第３章　調査の記録、上野市遺跡調査会、1993年）。
・上村安生「壺形土器を中心とした凹線紋出現前後の土器について」（『研究紀要』第４号、三重県埋蔵文化財センター、1995年）。
・石黒立人ほか『阿弥陀寺遺跡』（財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1990年）。
・佐原眞ほか『弥生時代の研究』５道具と技術Ⅰ（雄山閣、1985年）。

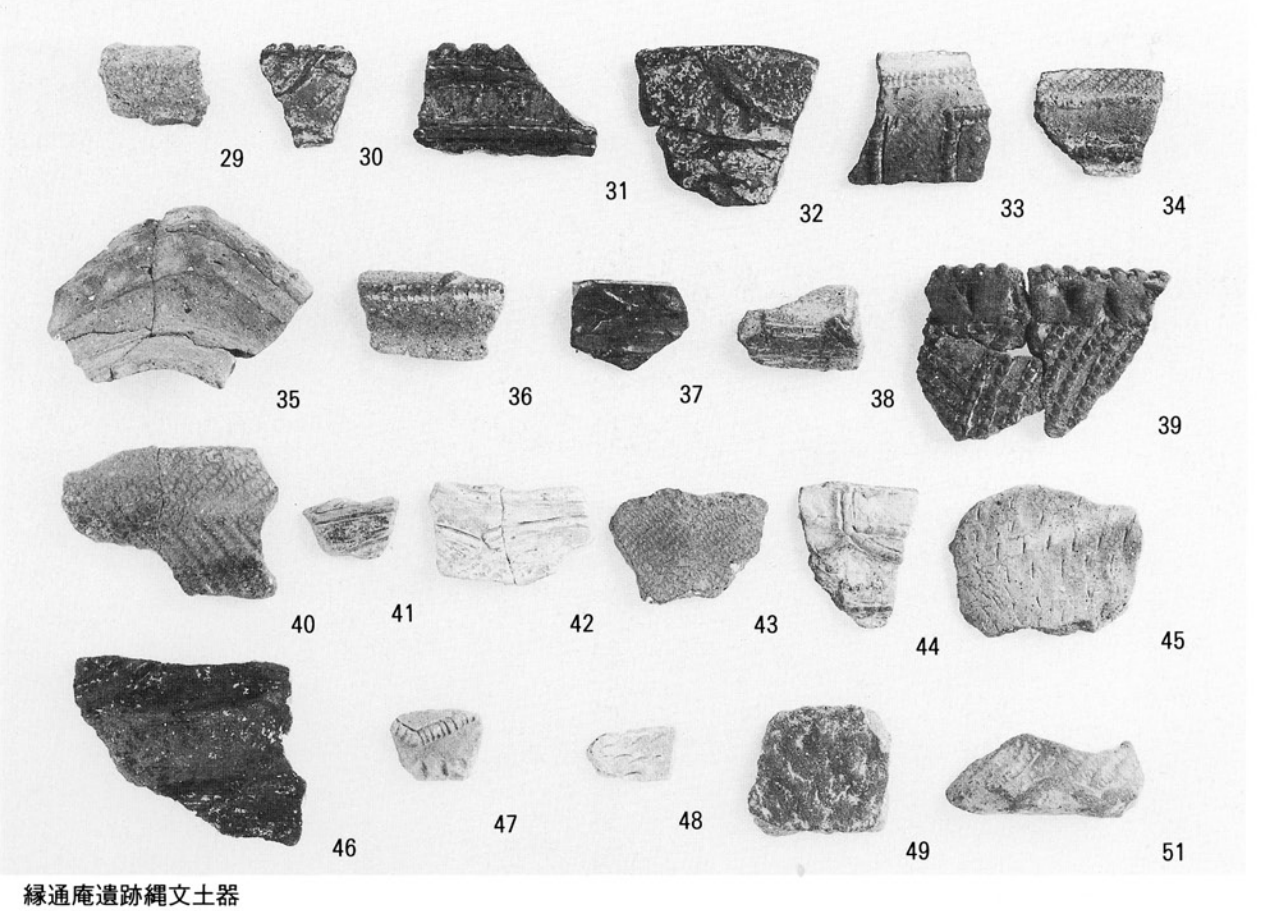
図版 1

縁通庵遺跡調査区全景（東から）

縁通庵遺跡　ＳＫ１（南西から）

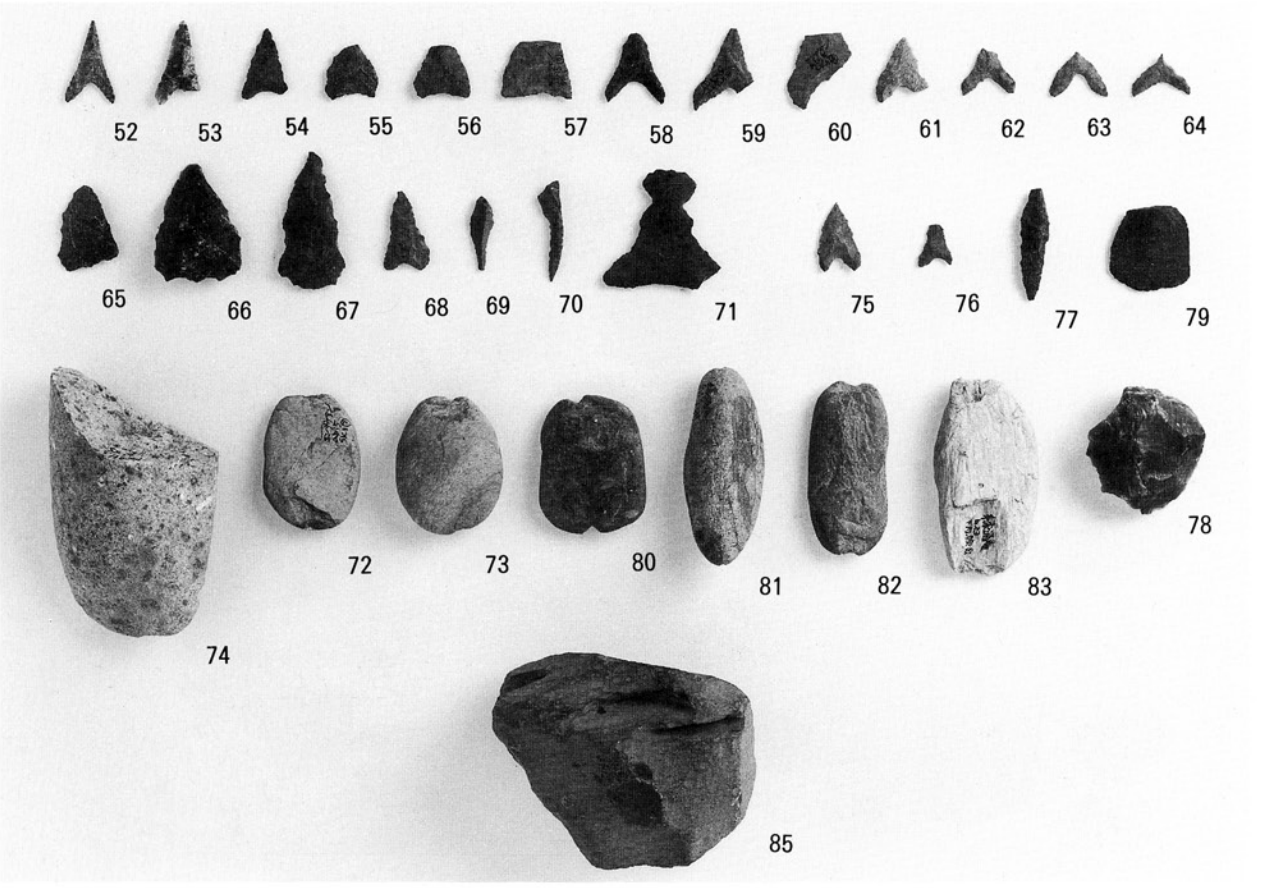


縁通庵遺跡縄文土器（ＳＫ1）



縁通庵遺跡縄文土器

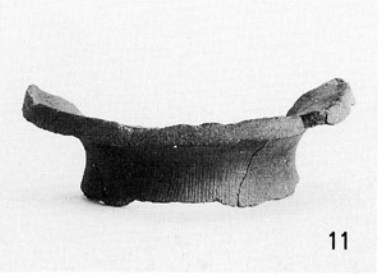
図版 3

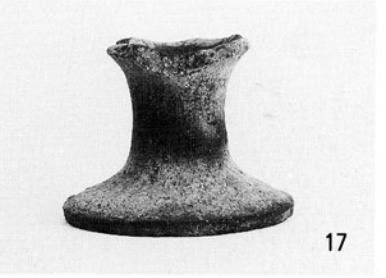


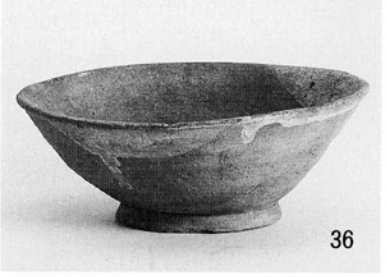
縁通庵遺跡石器

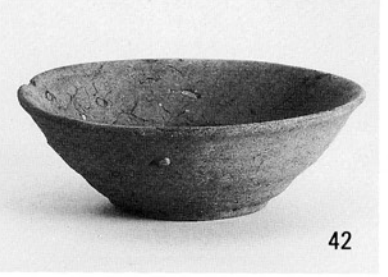
アカリ遺跡調査区（西から）

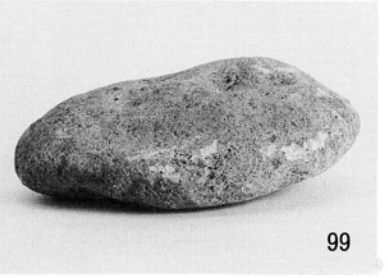
アカリ遺跡　ＳＨ41～43・ＳＨ70（北から）

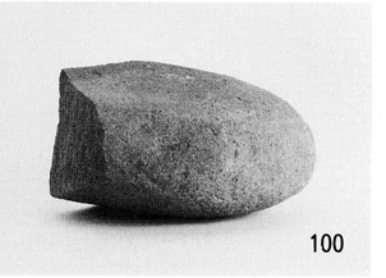






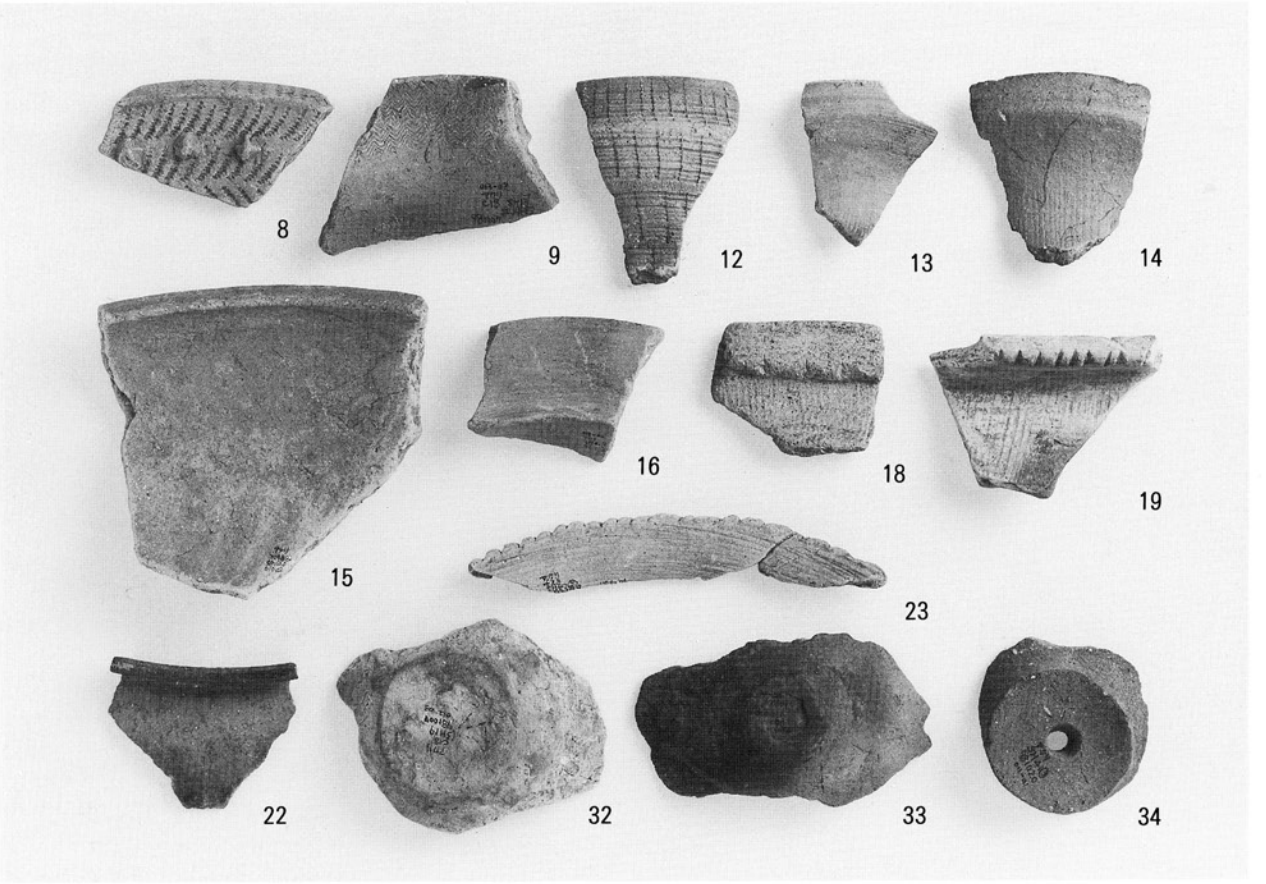




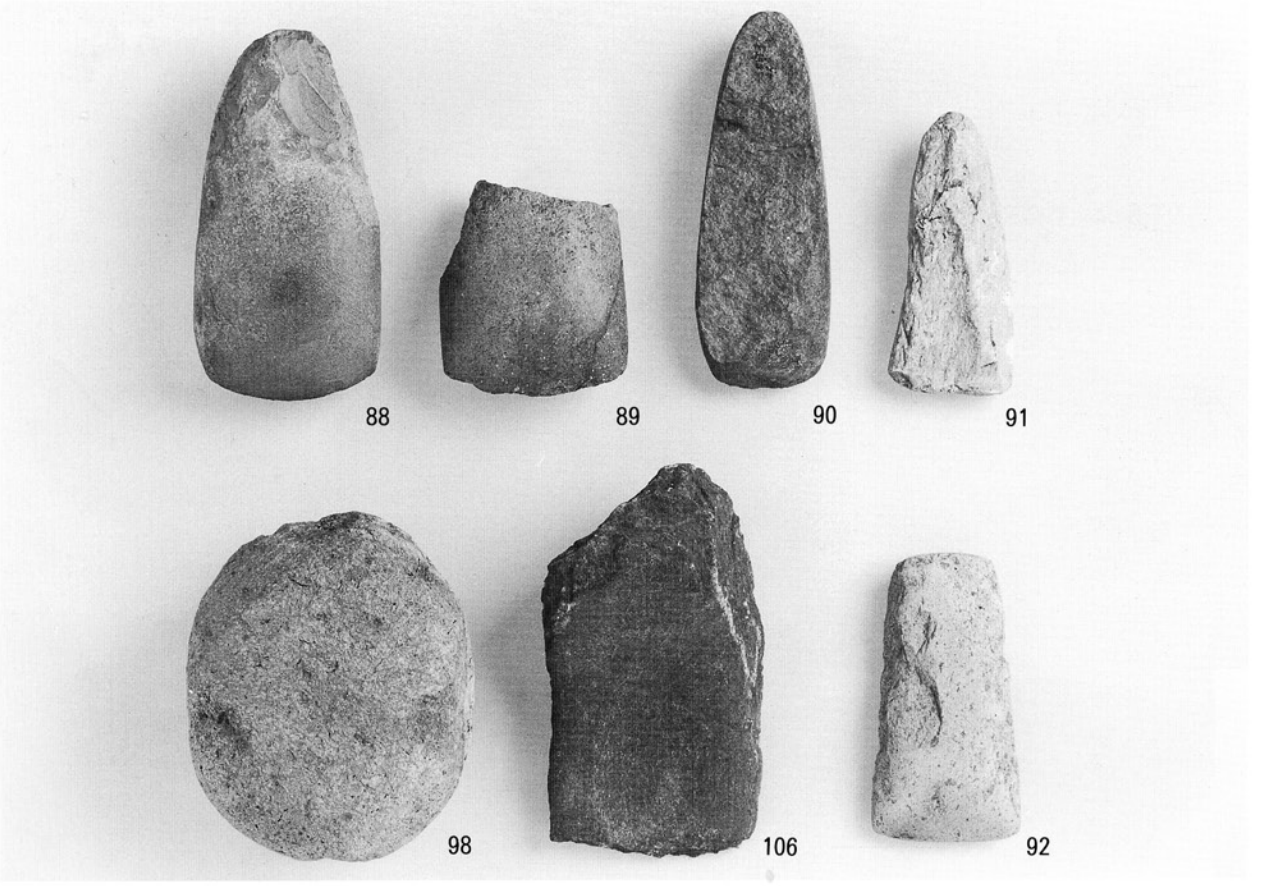


アカリ遺跡出土遺物

図版 5



アカリ遺跡弥生土器



アカリ遺跡石斧他

報告書抄録

ふりがな	えんつうあんいせき ・あかりいせき はっくつちょうさほうこく
書名	縁通庵遺跡・アカリ遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告
シリーズ番号	１７１
編著者名	松葉　和也
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL ０５９６－５２－１７３２
発行年月日	西暦　１９９９年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
縁通庵遺跡（えんつうあんいせき）	三重県多気郡勢和村片野（みえけんたきぐんせいわむらかたの）	244449	24	34° 28'30"	136° 27'40"	19970918 ～ 19971030	600 下層400	県営畜産経営 環境整備事業
アカリ遺跡（あかりいせき）	三重県多気郡勢和村片野（みえけんたきぐんせいわむらかたの）	244449	25	34° 28'30"	136° 27'40"	19980904 ～ 19981113	1,205	県営畜産経営 環境整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
縁通庵遺跡	集落跡	縄文時代前期 中世	土坑 掘立柱建物･柱列･土坑･溝	縄文土器・石器 土師器・陶器・磁器	
アカリ遺跡	集落跡	縄文時代前期 弥生時代中期 中世	土坑 竪穴住居・方形周溝墓 掘立柱建物・土坑・溝	縄文土器・石器 弥生土器・石器・鉄製品 土師器・陶器・磁器	

平成11(1999)年３月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年８月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　１７１

縁通庵遺跡・アカリ遺跡発掘調査報告

―― 三重県多気郡勢和村片野 ――

1999年（平成11年）３月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　光出版印刷株式会社